

加越国境城郭群と古道 調査報告書

一切山城跡・松根城跡・小原越一

平成26年3月

(2014年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

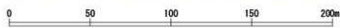
加越国境城郭群と古道 調査報告書

— 一切山城跡・松根城跡・小原越 —

平成26年3月

(2014年)

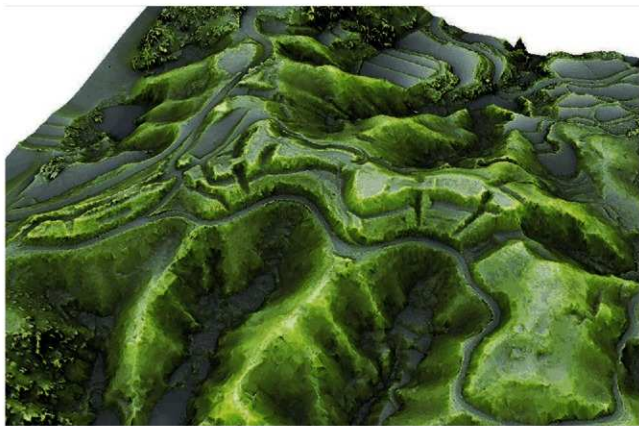
金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)



松根城跡 立体地図 (色彩を改变)



松根城跡 立体鳥瞰図（加賀側より）



松根城跡 立体鳥瞰図（越中側より）



松根城跡から越中方面を望む



松根城跡から加賀方面を望む



切山城跡 門遺構



松根城跡 門遺構

例 言

1. 本書『加越国境城郭群と古道調査報告書』は、石川県金沢市桐山町・宮野町地内に所在する切山城跡、同松根町・竹又町・小矢部市内山町に所在する松根城跡、切山城と松根城を繋ぐ小原越の発掘調査等を扱った報告書である。

2. 本調査は金沢市が平成 23 年度～平成 25 年にかけて国庫補助事業として実施したものである。

3. 調査にあたっては加越国境城郭群と古道調査指導委員会及び金沢市埋蔵文化財調査委員会の指導を受けた。

加越国境城郭群と古道調査指導委員会	委員長	谷内尾 晋司
	委員	木越 隆三
	〃	千田 嘉博
	〃	山崎 幹泰
	〃	山本 建夫

金沢市埋蔵文化財調査委員会	委員長	橋本 澄夫 (平成 23 年度まで)
	〃	谷内尾 晋司 (平成 24 年度から)
	委員	垣田 修児
	〃	小嶋 芳孝 (平成 24 年度から)
	〃	谷内尾 晋司 (平成 23 年度まで)
	〃	横山 方子

4. 調査及び本書の執筆、編集、調査時の写真撮影は向井裕知（金沢市文化財保護課主任主事）が担当した。遺物の写真撮影は景山和也（金沢市文化財保護課主査）が担当した。

5. 本書の各図及び写真図版の指示は以下のとおりである。

(1) 方位は全て座標北である。座標は世界測地系（第Ⅶ系）に基づき設定している。

(2) 各図の縮尺は、遺物は 1/2・1/3・1/4・1/6・1/8、遺構は 1/40・1/60・1/100 が主であるが、各図に指示しているとおりである。

(3) 遺物実測図の番号は通し番号とし、それぞれの本文中、観察表、写真図版のそれと一致する。

(4) 遺構名の略号は、SA＝柵列・塀跡、SB＝礎石建物跡、SD＝溝・堀跡、SK＝土坑跡、SX＝焼土坑跡、SP＝柱穴・小穴跡などである。

6. 本調査での出土遺物、記録資料は金沢市埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

第1章 調査の経過

第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境	3
第3節	加越国境城郭群の歴史	4

第3章 切山城跡の調査

第1節	概要	7
第2節	遺構と遺物	7
第3節	小結	9

第4章 松根城跡の調査

第1節	概要	21
第2節	遺構と遺物	21
第3節	小結	24

第5章 小原越の調査

第1節	概要	43
第2節	遺構	43
第3節	小結	44

第6章 自然科学分析

第1節	松根城跡検出土壌の花粉化石とプラントオパール分析 (森将志)	65
第2節	松根城跡検出土壌の大型植物遺体と昆虫化石分析 (佐々木由香、パンダリ スタルジャン、森勇一)	70
第3節	切山城跡出土火縄銃弾丸の理化学的分析結果 (齋藤努、永嶋正春)	73

第7章 総括

第1節	「前田・佐々戦争」に関する文献史料について (木越隆三)	77
第2節	城郭史上の加越国境城郭群 (千田嘉博)	98
第3節	総括	103

写真図版

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成11年度～17年にかけて石川県教育委員会による「石川県中世城館跡調査事業」が国庫補助事業で実施された。その報告を受けて文化庁で実施された「平成19年度第2回中世城館遺跡・近世大名墓所等の保存検討委員会」において、加越国境城郭群の歴史的重要性が指摘され、群として指定すべきとの方針が示された。平成21～22年度には文化庁調査官が現地を視察し、城郭群が街道を取り込むことが特徴であることから、街道も調査対象に含めるよう指導があった。

以上の状況を受けて、加越国境城郭群は広範囲に分布するが、既往の調査等によってある程度状況が把握されている松根城跡、切山城跡及び小原越が調査対象として選定された。

平成23年度から、学識者や地元代表から構成される「加越国境城郭群と古道調査指導委員会」を設置し、アドバイザーとして文化庁及び石川県、オブザーバーとして松根城跡を一部含む小矢部市の協力を得て、考古学、文献史学及び建築史学などの視点からなる調査体制が整えられた。

委員会の構成

委員長	谷内尾晋司（考古学、石川考古学研究会 会長）
委員	木越隆三（文献史学、石川県金沢城調査研究所 所長）
	千田嘉博（城郭考古学、奈良大学 教授）
	山崎幹泰（建築史学、金沢工業大学 准教授）
	山本建夫（地元代表、金沢市三谷地区町会連合会 会長）
アドバイザー	文化庁記念物課、石川県教育委員会文化財課
オブザーバー	小矢部市教育委員会生涯学習文化課
事務局	金沢市都市政策局歴史文化部文化財保護課

第2節 調査の経過

平成23年度

4月に松根城跡、切山城跡及び小原越の現況確認のため踏査を実施した。切山城跡の東側で複数の道跡を確認し、小原越の旧道である可能性が考えられた。また、小原越については、所々に旧道と考えられる掘り割り状の遺構が確認された。

7月には第1回の調査指導委員会を開催し、事業概要や対象とする城郭と古道の概要について報告を行い、秋に実施予定の切山城跡発掘調査についての助言などを得た。

10月には石川県、富山県及び小矢部市の担当者と会議を実施し、協力関係を確認すると共に、今後の調査等について検討を行った。

11月に切山城跡の発掘調査に着手した。切山城跡では平成13年度に国庫補助事業で測量調査を実施しており、今回の調査に際して基礎資料として利用した。また、金沢市文化財探訪月間の一環として、調査中の切山城跡や松根城跡、小原越の紹介を行った。

12月には、駐車スペースの都合により地元の方々と一部の研究者のみを対象として発掘調査成果現地説明会を開催した。

3月には、第2回調査指導委員会を開催し、切山城跡の発掘調査成果と次年度に予定している松根城跡の航空レーザ測量及び加越国境城郭群のその他の城郭について報告した。

平成 24 年度

6月に松根城跡の航空レーザ測量を実施し、自動解析で得た地形図を元に発掘調査場所の検討を行った。なお、本測量は小矢部市域も含んでいることから、小矢部市と共同で実施している。

7月に年度第1回目の調査指導委員会を開催し、松根城跡航空レーザ測量の実施や発掘調査の予定について報告すると共に、木越委員から「加越国境城郭群」築造の歴史的背景について」と題する報告をいただいた。

10月～11月にかけて松根城跡の発掘調査を実施し、現在の遺構が16世紀後葉のものであることや、中世に遡る小原越を発見するなど多くの成果をあげた。なお、調査途中で小矢部市と共同で発掘調査成果説明会を実施し、約100名の参加者があった。また、2回目の調査指導委員会を調査中の松根城跡で実施し、委員の方々から有益なご指摘をいただいた。

3月には、国立歴史民俗博物館において、切山城跡出土鉄砲玉の分析を行い、鉛玉であることが判明し、鉛同位体比分析も併せて実施した(第6章第3節参照)。

平成 25 年度

5月に年度1回目の調査指導委員会を実施し、松根城跡の発掘調査成果や小原越の調査予定、小原越に関する文献調査について報告した。

7月に小原越の測量調査と発掘調査を実施した。これまでに想定されていなかった丘陵尾根根において、小原越の可能性が考えられる道跡を複数の調査区で発見するなど、大きな成果を得た。

8月以降、これまでの調査成果について整理作業を実施し、3月には、本書を刊行すると共に、年度2回目の調査指導委員会を実施し、小原越の調査成果と本書による調査成果を報告した。



切山城跡 現地説明会



松根城跡 調査指導委員会の視察



松根城跡 小矢部市と共同で説明会を実施



松根城跡 小矢部市と共同で説明会を実施

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

切山城跡と松根城跡、それらを繋ぐ小原越は石川県金沢市と富山県小矢部市に所在する。

石川県は本州日本海側のほぼ中央に位置している。北方は日本海に面し、南方は福井県、岐阜県、富山県と接する南北に細長い県であり、日本海に突き出た能登地方とその南の加賀地方に分けられる。金沢市は加賀地方の北部に位置している。その西部は日本海に接し、南東部には海拔 1,500m を越える山地をかかえる。この山地からは市域を西流する二大河川、浅野川と犀川が流れ、北側に位置する前者は河北潟へ、南側の後者は日本海へ注ぐ。市域の西部に展開する平野部では両河川に挟まれた地域に市街地が形成されている。また、犀川を境として、北部平野と南部平野に分かれ、前者は犀川・浅野川やその北部を流れる金腐川・森下川によって形成された沖積平野であり、後者は白山を源とする手取川が形成する扇状地の北辺である。切山城跡は砺波丘陵の一部である森本丘陵上に立地する。

第2節 歴史的環境

切山城や松根城、小原越が所在する森本地区には北陸道や加賀・越中間を北陸道よりも近距離で結ぶ小原越・田近越といった脇街道が通り、また河北潟・大野川を経て日本海へ至る森下川が流れている。このように水陸交通の要衝である当地域には、街道沿いに多くの集落遺跡・城館跡が残っており、以下にその概略を記す。

中世遺跡の分布を北国街道（推定中世北陸道）に沿って北から順にみると、まず花園八幡遺跡がある。古墳時代中期の遺物が大半であるが、中世の遺構は土坑などを検出しており、遺物は外面鍔連弁文の青磁碗が出土している。遺跡東方の丘陵上には式内社の波自加弥神社が所在する。同社は鎌倉時代の作とされる「木造隨身像」、室町時代の作とされる「麦喰獅子」（共に市指定文化財）を所蔵する。さらに南下すると縄文時代から近世に至る複合遺跡の梅田B遺跡がある。中世の梅田B遺跡は12世紀末頃～14世紀前半の集落遺跡であり、掘立柱建物、井戸、溝などが検出されている。近世・近代溝に15・16世紀の遺物が散見できることから、15世紀以降にはその上流である谷典に集落が移動している可能性が指摘されている。谷典には「アミダジ」や「テランヤチ」という小字名をもつ畑地があり、14世紀～16世紀代の遺物が採集されていることから、その可能性は高いであろう。梅田B遺跡の南西側丘陵には観法寺古墳群がある。鎌倉時代頃の土師器皿と掘立柱建物数棟、堀切が見ついている。建物は1×1間が2～3棟、堀切は幅2m、深さ1m前後で断面U字形を呈し、尾根を切るように掘削されている。堀切は中世後期とされているが、遺物の出土はなく、鎌倉時代頃の簡単な防御施設と考えている。同丘陵の南裾には観法寺谷遺跡がある。丘陵の谷間に立地し、掘立柱建物、溝、土坑、沢と考えられる溝が見ついている。時期は鎌倉時代頃とされる。木製品が豊富に出土しており、箸や漆器のほか下駄、鳥形、板絵などが出土している。地域の水源や山間信仰の場が屋敷地の一角に取り込まれた可能性が指摘されている。また、さらに南側の北西方向に突き出た丘陵の南裾周辺にも中世遺跡が存在するようである。やや推定北陸道から外れたが、北国街道沿いには南森本町に室町時代とされる亀田大隅信宿館跡がある。塚崎町・吉原町には中世の墓域とされる塚崎中世遺跡や珠洲焼甕を蔵骨器とする火葬墓が見つかった吉原大門遺跡があり、また吉原大門遺跡と隣接する百坂町地内では加賀焼の壺が出土している。その出土地近隣の墓地には中世期とみられる五輪塔が現代の墓に混ざって現在も残っている。吉原町七ツ塚一号墳上では経塚が確認されており、山間部にはオヤシキ遺跡が所在する。大きな平坦面をもっているが、防御性が弱く、城跡であるかは不明という。

北国街道と今町付近で分岐する田近越沿道には加賀朝日町に朝日山城跡があり、主郭の発掘調査によって16世紀後葉の土師器皿や越前焼と共に多量の茶臼と粉挽臼が出土している。

北国街道と吉原町で分岐する小原越沿道には西から順にみると、まず吉原町には群家跡と推定される式内社の群家神社があり、井上館の一部とも推定される。東に進み岩出町の岩出うわの遺跡は溝から15世紀頃の土師器皿がまとも出土しており、儀礼的行為を行った痕跡が認められる。堅田町には、弥生、古墳、鎌倉、戦国の各時代の遺物が出土した堅田城跡と鎌倉から南北朝時代にかけての有力居館である堅田B遺跡が所在する。堅田B遺跡は方1町四方に相当する範囲を堀で囲まれたと推定される館跡であり、北堀と西堀を検出している。建長3年(1251)と弘長3年(1263)の紀年銘をもつ般若心経を書写した巻教板という木簡が多くの土師器皿や国産・中国産陶磁器、漆器などと共に出土しており、鎌倉時代の館のあり方を考える上で欠かせない遺跡と評価される。河原市には日蓮宗寺院である円乗寺の境内周辺で17世紀末～18世紀とされる一字一石経塚がみつまっている。また同町には河原市館跡が所在する。一辺約40m、幅3～3.5m、遺構検出面からの深さ1m前後の堀で囲まれた館と推定され、内部には掘立柱建物が建っている。しかし、建物や遺物からは一般の集落遺跡との差が認められず、確かに堀といえる溝は存在し、広域流通品である石鍋は出土するが、館であるかはおお検討が必要と考えられる。中心時期は13～14世紀と考えられる。粟師町には土塁の一部が僅かに残る上野館跡がある。梨木町には郭、土塁、櫓台、虎口が残る梨木城跡がある。梨木城跡は城主として一向一揆旗本の奥近江守政堯の名が残る。トレンチ調査では16～17世紀前半の遺物が出土している。また城跡の北側には寺院の伝承が残っており、塚があることから、その可能性は考えられる。宮野町・桐山町には切山城跡が所在する。そして、小矢部市との県境には松根城跡(市史跡)がある。城跡からは朝日山城跡がよく見える。文献では南北朝時代からその名が知られるが、現在の形態は天正年間に佐々成政が大改修したときの姿を残すとされる。

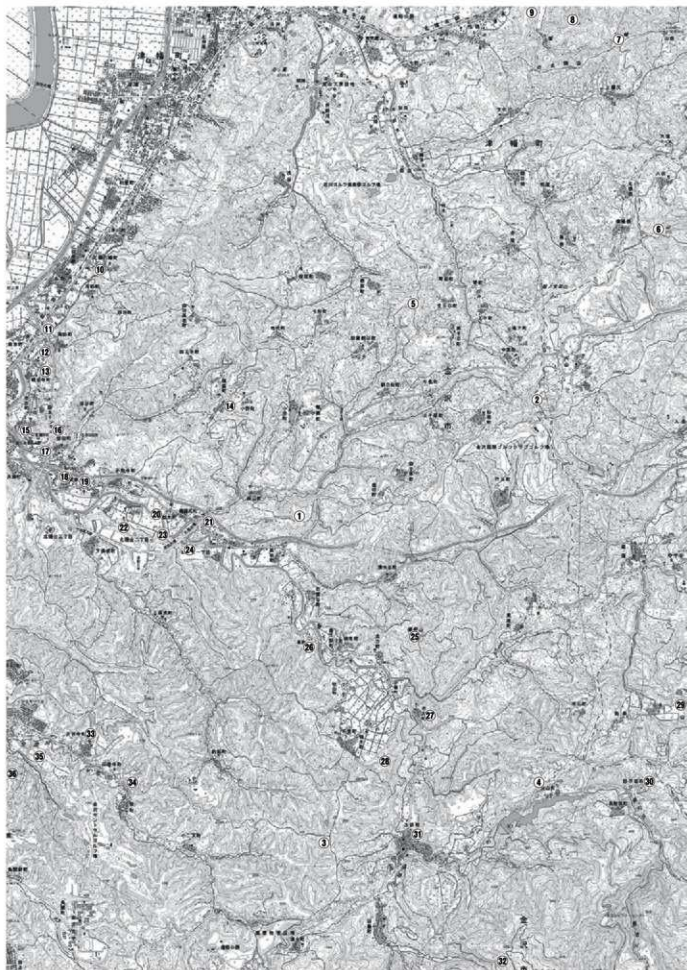
これらの他、三ノ坂道・朴坂越には高峠城跡、荒山城跡などがあり、その北方で小原越との間には、北方城跡、市ノ瀬城跡、柚木城跡などが所在する。

第3節 加越国境城郭群の歴史

森本地区に所在する山城の多くは木曾義仲や源義経が布陣したなどの源平合戦の頃の伝承をもつものが多い。北陸道の俱利伽羅が著名であるが、北陸道の他、小原越などの複数の脇街道が存在したことから、それらの道を各軍が侵攻していたのであろう。続いて南北朝期の争乱によるものがある。応安2年(1369)の軍忠状には松根城が「松根の陣」として見え、これが初見となる。そして、一向一揆勢や上杉謙信との抗争などで文献に表れることが多いようである。

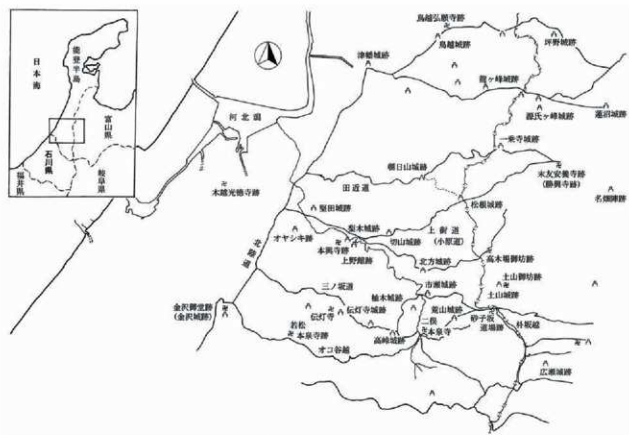
そして、本調査のテーマでもある前田利家と佐々成政の合戦が天正12年(1584)に勃発する。

本能寺の変から2年後の天正12年、織田信長亡き後の天下統一へ向け、羽柴(後の豊臣)秀吉と信長の次男である織田信雄・徳川家康連合軍が尾張(現在の愛知県)の小牧・長久手で争った。秀吉が柴田勝家に勝利した賤ヶ岳合戦の後、秀吉に降伏することで越中に留まった成政であったが、この合戦を機に反秀吉へと方針転換したのである。成政は同年8月に秀吉方である前田利家家臣の村井長頼が守る朝日山城を攻撃するも失敗する。そして、9月には奥村永福が守る末森城(宝達志水町)を攻撃するが、これも利家の援軍によって失敗する。天正13年になると、両者が国境付近への侵入を繰り返す中、前田勢が優勢になりつつあったが、秀吉遠征軍の登場によって成政は降伏した。この後、越中の西半分が利家の長男利長に与えられたことで、加越国境付近の緊張状態は解消され、城郭群は不要になったと考えられる。



①切山城跡 ②松根城跡 ③高野城跡 ④光山城跡 ⑤朝日山城跡 ⑥一乗寺城跡 ⑦鹿・蜂城跡 ⑧原城跡 ⑨竹筒城跡 ⑩花間八幡道跡 ⑪梅田目道跡 ⑫観法寺古墳群
 ⑬観法寺古墳跡 ⑭福富たたら跡 ⑮引出うわの道跡 ⑯原田城跡 ⑰原田目道跡 ⑱河原市跡城跡 ⑲河原市道跡 ⑳柳木城跡 ㉑宮野町エウケンドウ道跡 ㉒伝元本興寺跡
 ㉓上野城跡 ㉔正部一乗道跡 ㉕北方城跡 ㉖中町エウケンヤシキ道跡 ㉗市原城跡 ㉘柳木城跡 ㉙土山跡坊跡 ㉚妙子取道場跡・伝音徳寺跡 ㉛二役本泉寺 ㉜千尾(本泉寺)道跡 ㉝夕日寺跡 ㉞長井谷伝灯寺跡 ㉟長尾城跡 ㊱東長江イナノタニ城跡

第1図 遺跡分布図 [S=1/50,000]



「正部・業師遺跡」（金沢市教育委員会2000）より転載



第2図 加越国境城郭群の分布と古道（城館と寺院〔上段〕）（天正12年頃の想定分布〔下段〕）

第3章 切山城跡の調査

第1節 概要

切山城跡は金沢市城北部三谷地区の山間部、加賀と越中の国境からやや加賀よりに位置する森下川と切山川、清水谷川に挟まれた標高 139m の尾根頂部を中心に造成されており、国境付近や南方の森下川への眺望が良好である。近世の書上帳や地誌類には、不破彦三（前田家家臣）の城と記載されているが、同時代史料は見つかっていない。

城は南北 250m、東西 200m の規模があり、平坦面、切岸、堀切、塹壕、横堀、土塁、櫓台、虎口などから構成されている。主郭は南北約 25m、東西約 30m の不整形な平坦面で、松根城に比べてコンパクトな造りであるが、16 世紀終わりの特徴がよくみられる。松根城側（越中側）に大規模な堀を設置していることから、越中側からの侵攻を強く意識した構造と考えられる。城跡の南側に位置する作業道は、加賀と越中を結ぶ古道「小原越」と伝わるが、今回の調査によって、横堀の可能性が浮上した。中世段階の小原越は切山城が造られた尾根筋を通っていた可能性があり、城によって遮断されていたものと考えられる。現在小原越と伝えられる作業道は城廃絶後に横堀などの堀底を利用したものであろう。従来、城はこの古道を城内に取り込むことで道の掌握を行っていたと解されていたが、実際は戦時封鎖を行っていた可能性が高い。

小原越は金沢市今町付近で北国街道から分岐し、尾根道やその脇を通り、小矢部市の五郎丸・末友にいたる脇街道である。俱利伽羅峠を通過する北陸道よりも短い距離で加賀―越中間を結ぶために、軍事的に非常に重要なルートであった。第4章の松根城も同様に小原越を戦時封鎖していた可能性が高く、発掘調査によって明らかとなった。

発掘調査は平成 23 年 11 月 8 日～同年 12 月 16 日に実施した。その間、同年 11 月 19 日には金沢市文化財探訪月間として切山城と松根城の見学会、同年 12 月 3 日には地域住民を対象に現地説明会を実施した。

調査は主郭、曲輪、櫓台、虎口、土塁、堀切、横堀などに 13ヶ所の調査区を設定し、計 170㎡について発掘調査を実施した。なお、平成 25 年度に小原越の調査を実施する際にも、周辺の小原越推定ヶ所や横堀で発掘調査を実施したが、その成果については第5章で解説している。

第2節 遺構と遺物

本節では、城郭の構造と発掘調査成果について解説する。

1. 城郭構造（第3・4図）

主郭Ⅰを中心に北側の曲輪Ⅱや南側の帯曲輪Ⅲによる中枢曲輪群とそれらの東側に広がる曲輪Ⅳ・Ⅴ周辺の曲輪群で構成されており、東端は横堀（堀切に近い）が両端を切断していないので横堀とする、西端は堀切によって城域を限っている。中枢曲輪群は馬出と連続する外枳形、高切岸と横堀を採用しており、コンパクトながら、高い防御力を備えている。東側の越中方面には規模の大きな堀を設けていることから、越中の佐々成政の攻撃に備えた前田利家方が築城もしくは改修した城郭である可能性が高い。

2. 遺構（第5～10図）

主郭、櫓台、馬出虎口、外枳形虎口、曲輪、堀切、横堀で調査を実施した。出土遺物は少なく、土師器皿片と粉挽臼、鉄砲玉などが出土している。

主郭と主郭虎口ではA～C、H、J～Lトレンチを設定した。

Aトレンチ（第6図）は主郭の平坦面に設定した。主郭には平成13年度の測量調査によって方形の基礎状遺構が見つかっており、その長辺に沿って調査を行った。平坦面を整地した際の盛土とピット、土坑、溝、集石が検出された。盛土は中央は少なく、東西に位置するほど深くなる傾向があり、周辺部を盛土造成したことが良くわかる。盛土は褐色砂質土を基本とし、地山ブロックを含むものが多く、東側の上位層では炭化物も含んでいる。溝と集石は後世によるものである可能性が高いが、集石は当時城内に運び込まれたものを後世の耕作時等に片付けたものである可能性が考えられ、つぶてなどの用途が考えられようか。

Bトレンチ（第6図）は主郭西側の外枳形虎口1との境で、土塁際に設定した。土塁際の溝が検出されたが、その他の遺構は認められなかった。

Hトレンチ（第6図）は主郭南側に張り出した櫓台に設定した。建物基礎の検出を目指したが、見つからなかった。調査区中央付近では焼土や炭化物が多く検出されている。調査区の東半中央に略方形の石があるが、岩盤ブロックによるものである。次章で述べる松根城では、このような岩盤ブロックが門の礎石に使用されていると考えており、この岩盤ブロックによる塊が礎石になる可能性がある。鉄砲玉（第11図3）と砥石（第11図4）が出土している。鉄砲玉は表土直下から出土しているために、城跡の時期のものと考えられる。詳細は第6章第3節に詳しいが、同位体比分析によってタイのゾントー鉱山産の鉛を用いていることが判明している。

Cトレンチ（第5～7図）は主郭東側の馬出虎口1との境に設定した。礎石建物と石敷きが検出され、礎石は東側の一石は見つからなかったが、柱間約2.3mの正方形を呈する門遺構と考えられる。見つかった3礎石は全て焼けており、赤褐色に変色している。北側の礎石は平らな面が上を向いていないので、若干動いている可能性がある。馬出から主郭へ続く土橋から直線的に進めるのではなく、若干南寄り（主郭への進行方向では左寄り）に折れ曲がる構造になっている（第5図）。Jトレンチで検出された柵列・塀跡と共に、具体的な作事を示す遺構として注目される。また、土塁の盛土とその下位には整地層と思われる土層があり、部分的には暗褐色もしくは黒褐色を呈する非常にしまりが良く、固い地層が検出され、土間のようなものである可能性が考えられる。

Jトレンチ（第7図）はCトレンチに隣接する土塁に設定した。土塁は黒褐色系と暗褐色系の砂質土が互層になっており、版築状の造りとなっている。土塁上では柱穴が検出されており、柵もしくは杭列の存在が明らかになると共に、土塁の残存状況の良さも証明された。また土塁裾部で集石が検出された。Aトレンチ同様に後世のものとも思えるが、堀に沿って並んでいるようにも見える。しかし、表土中から直下での検出であるために、時期などの詳細は不明である。

Dトレンチ（第8図）は主郭北側の曲輪IIに設定した。比較的大きな曲輪であり、兵舎などの検出を目的に調査を行った。建物跡は検出できなかったが、焼土坑や盛土造成を確認した。主郭側では地表面から20cm程度で地山が検出できるが、北側になるほど盛土量が多くなると考えられ、調査区の北端では1.7mを超える盛土造成を確認している。土師器皿（第11図1）や火打ち石と考えられるメノウ質の石（第11図2）、土師器片が複数出土しており、建物跡の検出には至らなかったが、粗末な建物と炊事場などが存在した可能性が考えられる。

Kトレンチ（第8図）は外枳形虎口1の内部に設定した。門遺構を求めての調査であったが、溝や落ち込みを確認したのみであった。溝は落ち込みの下から見つかっており、土塁の裾付近にあたることから、塀などの痕跡である可能性はあるが、土層観察などからはその詳細が不明であった。粉引白（第11図5）が出土している。

Lトレンチ（第9図）は外柵形虎口1から曲輪D方面への坂（道）に設定した。階段状の遺構など、登り下りするための施設を確認するために設けたが、目立った遺構は見つからなかった。斜面裾で溝が検出されており、Bトレンチで見つかった土塁裾部の溝などと同様に水処理を意識した構造になっていることがわかった。

Mトレンチ（第9図）は城に南接する小原越とされる掘り割り部に設定した。地表面から約50cmで岩盤面に到達し、掘り割りの底部には幅約40cm、深さ約30cmの溝が掘り割りと並行して延びていることがわかった。その覆土はその上位層のものとは異なり、緻密でしまりが良いものであった。道の底に設けることは考えにくいことから、掘り割り自体が薬研の横堀と考えられ、溝は堀の中央に塀などを建てた遺構と推定できる。

Eトレンチ（第9図）は城の西端と考えられる加賀側の堀切1に設定した。東側が城内部となる。地表面から約70cmで幅約1.7mの箱堀の堀底が検出された。9層は地山ブロックを多く含んでおり、城内部側の堀底に溜まっていることから、土塁崩落土の可能性はある。

Fトレンチ（第10図）は城の東端と考えられる横堀1に設定した。現況で箱堀の形態を留めているが、はっきりとは堀の形が判別できなかった。Gトレンチ（第10図）も同様である。

Iトレンチ（第10図）は、F・Gトレンチの調査で堀の形状が判断できなかったので、現作業道が横堀1を通過する箇所を道脇壁面を削って調査したものである。①は北側の壁面で、3層、4層あたりが堀の形状を示すと考えられる。②は南側の壁面で、この調査区が最も良く堀の形状を示しており、2層、3層が薬研状の堀を示している。概ね幅約3m、深さは約1.1m程である。

3. 出土遺物（第11図、第1表）

1はDトレンチの焼土坑SX01から出土した土師器皿の口縁部片である。その他にも土師器皿の細片が出土している。口縁は直線的に延び、端部は丸い。内外面共にナデ調整を施す。

2はDトレンチの拡張区で検出した盛土整地層中から出土した石英質の石である。剥離痕がみられ、火打ち石の可能性を考えている。

3はHトレンチの整地土層直上から出土した鉄砲玉である。同位体比分析によってタイソントー鉱山産の鉛製であることがわかっており（第6章第3節参照）、16世紀後半から17世紀初頭の製品である可能性が高い。表面に小さな凹凸は認められるが、球形を呈しており、未使用と考えられる。

4はHトレンチの表土中から出土した砥石である。全ての面に使用痕が認められ、短辺方向に並行する擦痕が多い。近世以降の製品である可能性が高い。

第3節 小結

切山城跡に関する1次史料は知られていない。近世に入ってからの地誌類で登場するが、次章の松根城などの他の越前国境域郭群と比して多くはなく、18世紀以降の絵図に登場することもほとんどない。つまり、この城郭の実態を知る上では縄張りや発掘調査の成果が貴重な情報源となる。以下に発掘調査成果及び第7章第2節の千田氏の考察も踏まえて、切山城跡の調査成果について述べる。

発掘調査によって、平坦地を広くするための盛土造成が多く確認された。特に主郭東側のCトレンチや曲輪IIのDトレンチ北側で顕著であった。

城郭の内部と外部を区切る施設としては、越中側に該当する東端の横堀1は薬研堀状、加賀側に該当する西端の堀切1は箱堀状であった。

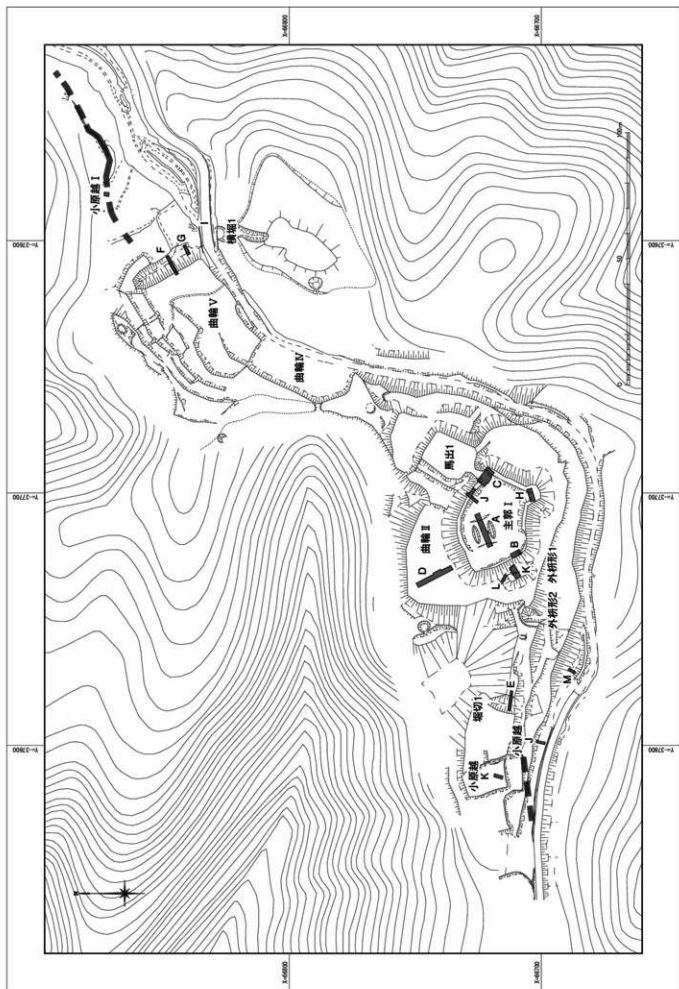
小原越との関係では、これまで城に南接して延びる小原越を掌握していると考えられていたが、小原越

とされる掘り割り箇所が横堀である可能性が高いことが判明し、また第5章で述べるが、城郭へ向かう尾根上で道跡が検出されたことで（小原越Ⅰトレンチ）、次章の松根城同様に小原越を掘切などによって遮断していた可能性が指摘できる。これは加越国境城郭群と街道の関係性を考えるうえで非常に重要な発見であり、戦時中の緊張状態が伝わってくる。城郭が不要となった後は、城郭の横堀を道として利用したために、現在に小原越と伝わったのであろう。

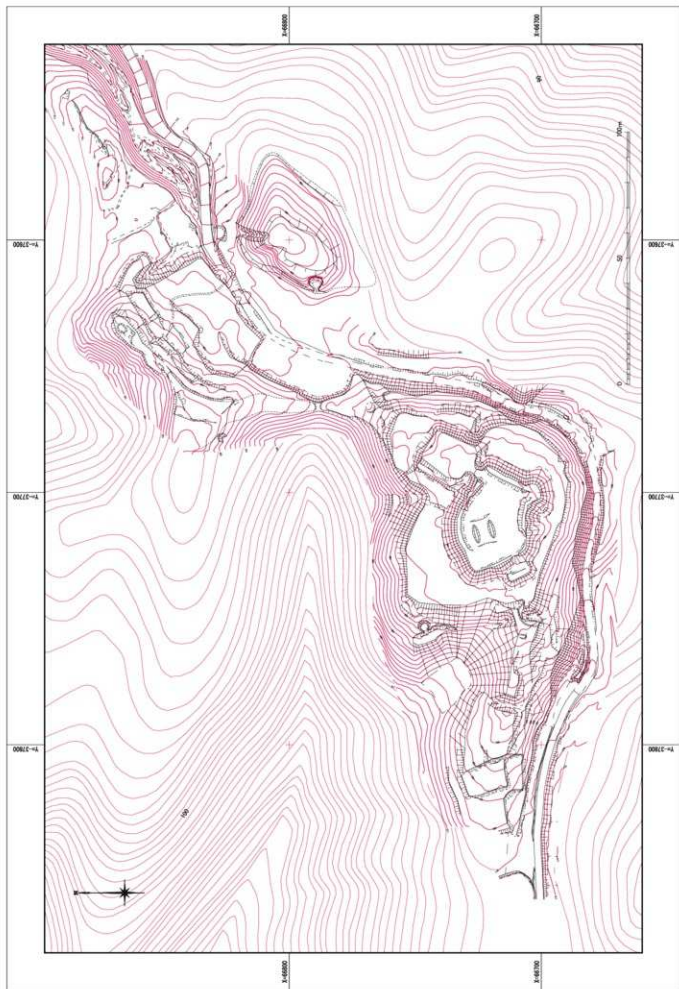
馬出1から主郭へ至る土橋際に礎石建物による門遺構と石敷きが見つかった。そして、門脇の土塁には柵列もしくは塀があることも判明した。土塁上の柵列などは土塁の盛土が雨などによって流出したり、破城もしくは後世の耕作などによって崩されたりすることが多いのか、検出されることはほとんどない。この柱穴列の正体が柵であるのか塀であるのかは定かではないが、通常あったであろうと推定されていたものが、実際の遺構として検出できた意義は大きい。しかも門遺構とセットであることは、戦国時代末期に緊張状態の際に築造されたと考えられる箭的城郭の建築遺構を復元する際に大いに参考になると考える。門扉については、第7章の千田氏の論考に詳しいが、左右開きの扉では狭いために、片開きか突き上げ戸が推定されている。

檜台のHトレンチ表土直下で出土した鉄砲玉は、タイのソントー鉱山産の鉛が示す同位体比と合致することが分析で判明した。現在のところ鉄砲伝来以後の出土品等に関する分析結果では、タイ・ソントー鉱山産の同位体比と合致している事例は16世紀後半から17世紀前葉頃に限られている。切山城出土の鉄砲玉は出土状況によって、城が機能していた頃のものとして推定可能であることから、城跡の年代を決める指標の一つになり得るであろう。土師器皿の小片が曲輪Ⅱから出土しているが、いずれも時期を押さえるには小片過ぎる。虎口形態などから、16世紀末頃の時期に築造もしくは改築されたことは推定可能であるが、科学分析によって、物的証拠も得られたことになろう。ただし、17世紀後半以降の製品についても、銅鉱山産の鉛を用いた製品が今後見つかる可能性もあるので、事例の増加を注視していく必要がある。

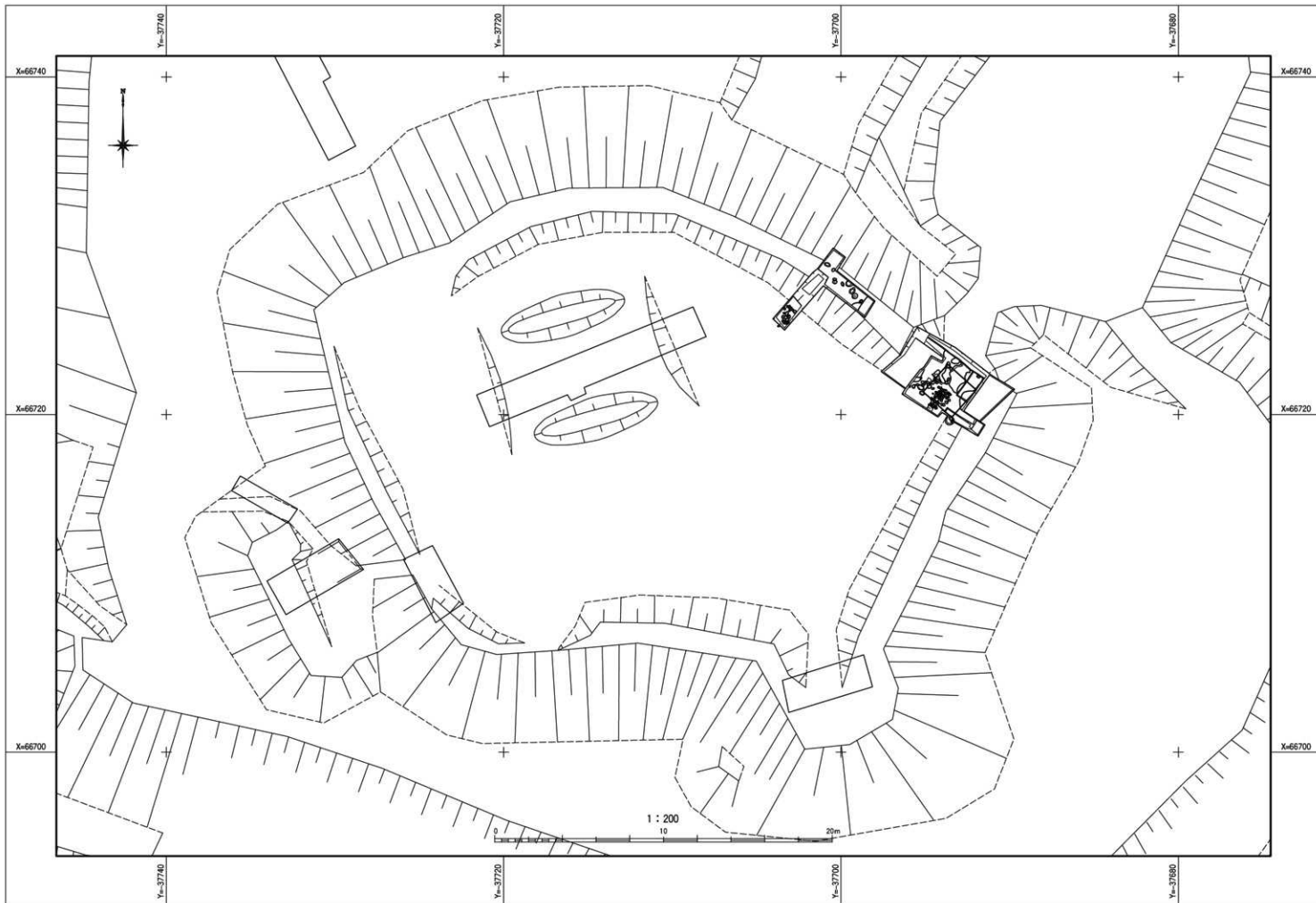
以上、城郭プランから馬出や外柵形を機能的に採用した織豊系城郭であることが明らかとなった（第7章第2節参照）。そして、その馬出から主郭へ至るルートには礎石建物による城門が整備されており、石敷きや土間状の整地面が付随していることも明らかとなった。更に城門の脇を固める土塁上には、柵列もしくは塀が存在したことも判明し、緊張状態時に臨時的に築かれたと考えられる箭的織豊系城郭の具体的な城門の姿が明らかとなった意義は大きいと考えられる。そして、出土した鉄砲玉の鉛同位体が示す産地はタイのソントー鉱山産であり、16世紀後半～17世紀前葉頃に流通していたことから時期比定が可能になると共に、九州を中心に分布する同鉱山産鉛がこの北陸の地にまで流通していたことが判明した点でも重要な歴史的事実を示すことができたと考えられる。



第3図 遺構全体図・調査区配置図 (S=1/1,500)

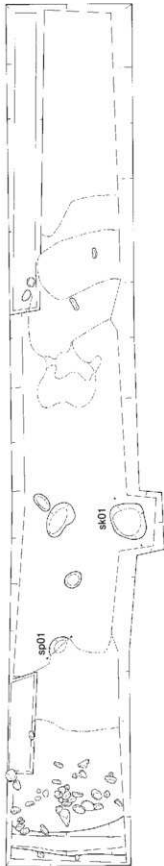


第4図 遺構・地形図 [S=1/1,500]



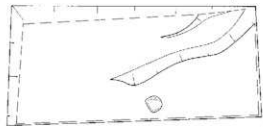
第5図 礎石建物（門）と周辺遺構図 [S=1/200]

Aトレンチ



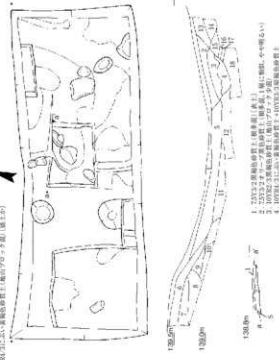
8. 107923-2 築城土層(黒土) (黒土)
 9. 107924-4 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 10. 107924-5 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 11. 107924-6 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 12. 107924-7 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 13. 107924-8 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 14. 107925-5 築城土層(黒土) (黒土)

Bトレンチ



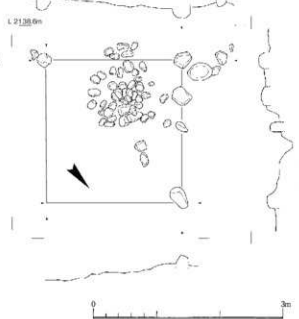
11. 107923-2 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 12. 107924-4 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 13. 107924-5 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 14. 107925-5 築城土層(黒土) (黒土)
 15. 107925-2 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 16. 107925-3 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 17. 107925-4 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 18. 107925-5 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)

Hトレンチ



1. 107923-2 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 2. 107924-4 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 3. 107924-5 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 4. 107924-6 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 5. 107924-7 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 6. 107924-8 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 7. 107925-2 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 8. 107925-3 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 9. 107925-4 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 10. 107925-5 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)

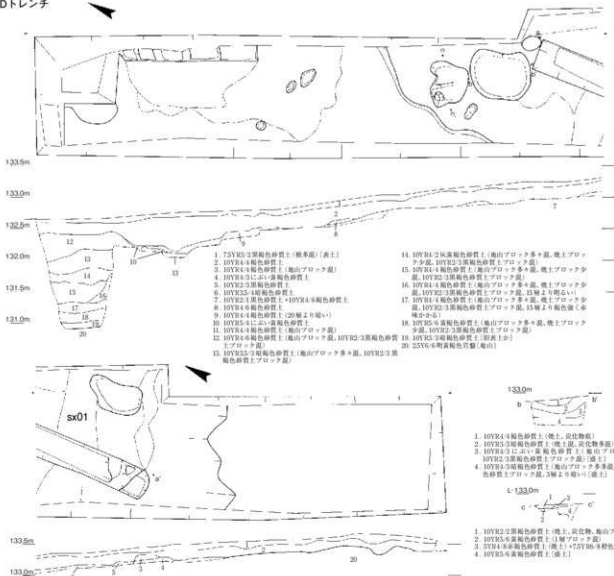
Cトレンチ 礎石建物



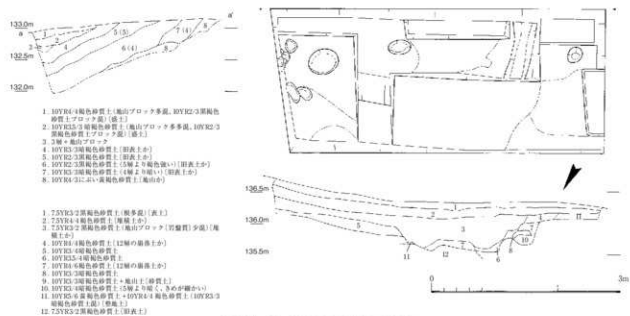
1. 107925-2 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)
 2. 107924-4 築城土層(黒土) (黒土) (黒土)

第6図 A・B・C・Hトレンチ [S=1/60]

Dトレンチ

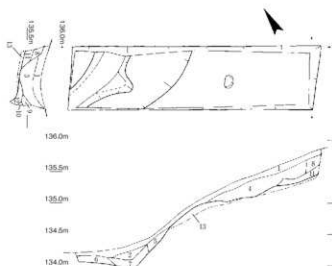


Kトレンチ



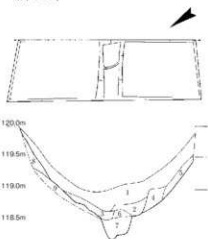
第8図 D・Kトレンチ [S=1/60]

Lトレンチ



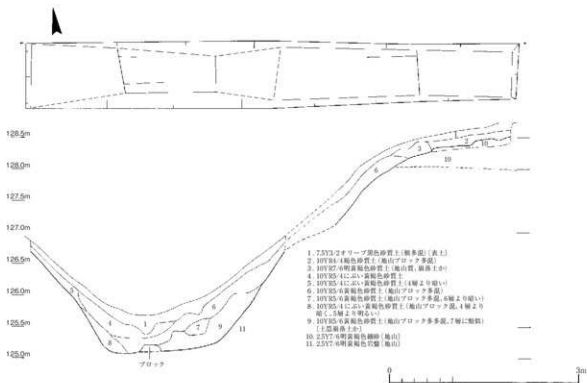
1. 7.5Y3.2黄褐色砂質土 (樹多量) (表土)
2. 10YR2.2に多い黄褐色砂質土 (1層) (腐植土)
3. 10YR2.3暗褐色砂質土 (堆山ブロッケ) (腐植土) (少量)
4. 10YR2.5暗褐色砂質土
5. 10YR4.4褐色砂質土
6. 10YR4.4褐色砂質土 (2層より薄い)
7. 10YR2.2に多い黄褐色砂質土 (5層と類似) (土)
8. 7.5Y3.2黄褐色砂質土 (1層より薄い)
9. 10YR2.3暗褐色砂質土 (4層と類似)
10. 10YR4.4褐色砂質土 (1層)
11. 10YR2.3暗褐色砂質土 (1層)
12. 10YR2.5暗褐色砂質土 (11層と類似)
13. 10YR5.6黄褐色砂質土 (堆山)

Mトレンチ



1. 7.5Y3.2黄褐色砂質土 (樹多量) (表土)
2. 10YR2.3暗褐色砂質土
3. 10YR4.9に多い黄褐色砂質土
4. 7.5Y3.2黄褐色砂質土
5. 10YR2.2に多い黄褐色砂質土 (3層に類似、やや薄い)
6. 10YR4.4褐色砂質土 (土量多く、やや薄い)
7. 10YR5.4に多い黄褐色砂質土 (土量多く、薄い)
8. 10YR4.6褐色砂質土 (堆山土)
9. 10YR5.8黄褐色砂質土 (1層) (堆山)

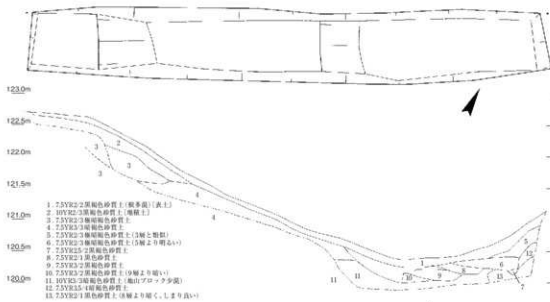
Eトレンチ



1. 7.5Y3.2オリーブ黄褐色砂質土 (樹多量) (表土)
2. 10YR4.4褐色砂質土 (堆山ブロッケ多量)
3. 10YR2.6明褐色砂質土 (堆山ブロッケ多量)
4. 10YR2.4に多い黄褐色砂質土
5. 10YR5.4に多い黄褐色砂質土 (4層より薄い)
6. 10YR5.6黄褐色砂質土 (堆山ブロッケ多量)
7. 10YR5.6黄褐色砂質土 (堆山ブロッケ多量、6層より薄い)
8. 10YR5.4に多い黄褐色砂質土 (堆山ブロッケ多量、4層より薄い、5層より薄い)
9. 10YR5.6黄褐色砂質土 (堆山ブロッケ多量、7層に類似) (土量多量)
10. 10YR7.6暗褐色砂質土 (堆山)
11. 2.5Y7.6明黄褐色砂質土 (堆山)

第9図 E・L・Mトレンチ [S=1/60]

Fトレンチ

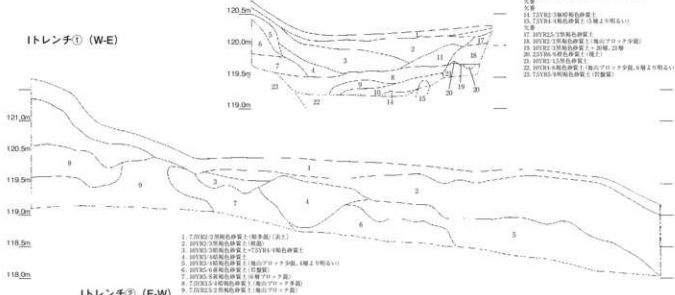


Gトレンチ

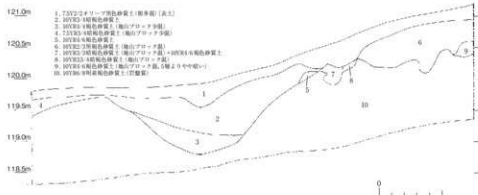


1. 7.5YR2/2 黒褐色砂質土 (敷多層) (表土)
 2. 7.5YR2/2 黒褐色砂質土
 3. 10YR3/4 暗褐色砂質土 (黒山アロックス層)
 4. 7.5YR2/2 黒褐色砂質土 (黒山アロックス層)
 5. 7.5Y1/4 褐色砂質土
 6. 10YR3/4 暗褐色砂質土
 7. 10YR3/3 暗褐色砂質土 (黒山アロックス層)
 8. 7.5YR2/2 黒褐色砂質土 (黒山アロックス層、5層より暗い)
 9. 10YR2/2 暗褐色砂質土 (黒山アロックス層、1層より暗い)
 10. 7.5YR2/2 黒褐色砂質土 (黒山アロックス層)
 11. 7.5YR3/3 暗褐色砂質土 (黒山アロックス層)
 欠層
 欠層
 14. 7.5YR2/2 黒褐色砂質土
 15. 7.5YR2/2 黒褐色砂質土 (5層より暗い)
 欠層
 17. 10YR2/2 暗褐色砂質土
 18. 10YR2/2 暗褐色砂質土 (黒山アロックス層)
 19. 10YR2/2 暗褐色砂質土 (黒山アロックス層、2層、23層)
 20. 2.5YR6/4 暗褐色砂質土 (黒山アロックス層、1層より暗い)
 21. 10YR2/2 暗褐色砂質土
 22. 10YR2/2 暗褐色砂質土 (黒山アロックス層、5層より暗い)
 23. 7.5YR3/3 暗褐色砂質土 (鉄屑層)

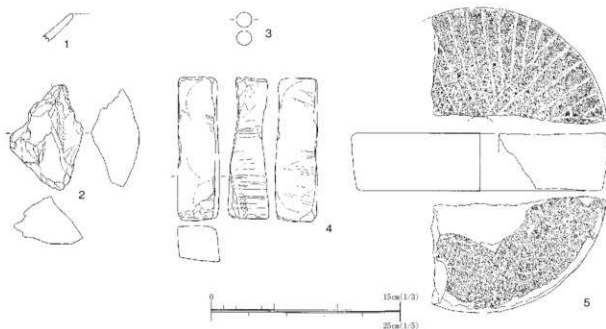
Iトレンチ① (W-E)



Iトレンチ② (E-W)



第10図 F・G・Iトレンチ [S=1/60]



第11図 出土遺物〔S=1/3・5〕

第1表 出土遺物観察表

番号	遺構	器種	法量				遺存 /12	胎土				調整				色調		備考	実測 番号
			口径 (長)	器高 (幅)	胴径 (厚)	底径 (底)		口縁外	胴部外	口縁内	胴部内	底部外	外面 (輪)	内面 (底)					
1	D	土師器 皿					口以下	量	少	量	ナ?	ナ?	ナ?	ナ?	7.5YR7/ 6 黄	7.5YR/ 6 黄	SX01	T1	
2	D	石製品 火打ち 石?	83	56	38	145											拡張区 暗褐色土中 石莖瓦	T3	
3	H	鉛 鉄砲玉	12	12	11	0.09											5/1 フォーレスト山麓 北サブトレ 段地主直上	N1	
4	H	石製品 磁石	114	32	28	177									10YR7/ 2 コア黄 黄		表土中	T2	
5	K	石製品 粉引臼	340	76		3800									2.5GY7 /1 明約- 2灰			Q1	

【引用・参考文献】※第1～5、7章 第3節分

石川県教育委員会 1996『加賀の道Ⅰ』歴史の道調査報告書 第3集

石川県教育委員会 2002『石川県中世城館跡調査報告書Ⅰ（加賀Ⅰ・能登Ⅱ）』

石川県金沢城調査研究所 2012『金沢城跡—二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門被櫓Ⅱ—』

金沢市 2004『市内城館跡調査報告書—朝日山城跡・切山城跡・堅田城跡・堅田B遺跡—』

金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会 1979『金沢市松根城址緊急調査報告書』

佐伯哲也 2000『天正十二・三年における前田・佐々両氏の攻防—加越能国境城郭を中心として—』『石川考古学研究会々誌』第43号 石川考古学研究会

佐伯哲也 2013『加越国境城郭について』『越中中世城郭図面集Ⅲ』桂書房

田中照久・木村宏一郎 2005『越前』『中世産業の諸相—生産技術の展開と福年—（資料集）』

平尾良光他 2012『鉛同位体比法を用いた東アジア世界における金属の流通に関する歴史的研究』

宝達志水町教育委員会 2007『末森城等城館跡群』

南久和 1985『松根城・朝日山城』『金沢の古城跡』金沢市教育委員会

宮本哲郎 1999『北加賀にある城館跡の概観』『北陸の考古学Ⅲ』石川考古学研究会

山下峰司 1995『灰桶陶器・山茶碗』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

第4章 松根城跡の調査

第1節 概要

松根城は金沢市城北部三谷地区の山間部、富山県小矢部市との県界に位置し、金沢市松根町、竹又町、小矢部市内山町地内に所在する。加賀と越中の国境、砺波丘陵の最も高い尾根筋である標高308mの山頂部を中心に造成されており、加賀平野や砺波平野への眺望がとて良好である。

文献史料では、南北朝時代の貞治2年(1363)と応安2年(1369)の古文書に「松根之陣」などとあり、江戸時代の書上帳や地誌類には、源平合戦に登場する源義仲や加賀一向一揆の武将である洲崎兵庫、戦国時代末期の武将である佐々成政の城と記載されている。

城は南北440m、東西140mの規模があり、平坦面、切岸、堀切、横堀、土塁、櫓台、虎口などから構成されている。主郭は南北約30m、東西約30mの不整形な平坦面を呈す。加賀側に大堀切を設置していることから、加賀側からの侵攻を強く意識した構造と考えられる。

城跡の南側に部分的に残る掘り割り遺構は加賀と越中を結ぶ古道「小原越」と伝わるが、今回の調査によって横堀である可能性が判明し、中世期の小原越は城南西端の大堀切によって遮断されている尾根筋に存在していることが発掘調査によって明らかとなった。つまり、城郭の出現によって、小原越は遮断されていたのである。城廃絶後も大堀切は全てが埋まることなく、なおも遮断された状態であったので、城郭南端の横堀を利用して現在小原越と伝わる道筋に変化したものと考えられる。小原越は金沢市今町付近で北国街道から分岐し、尾根筋やその脇を通り、小矢部市の五郎丸・末友にいたる脇街道である。俱利伽羅峠を通過する北陸道よりも短い距離で加賀-越中間を結ぶために、軍事的に非常に重要なルートであった。第3章の切山城も、松根城の発掘調査成果を受けて、尾根筋の発掘調査を実施した結果、小原越を遮断していた可能性が高くなった。

なお、昭和49年に金沢市指定史跡に指定され、同54年には主郭にて発掘調査が実施されており、ピットが検出されているが、遺物の出土は見られなかった。しかし、調査前の同45年には、櫓台付近での植林の際に珠洲焼と越前焼の破片が出土しており、これが唯一の遺物であった。

発掘調査は平成24年10月3日～同年12月6日に実施した。その間、同年11月1日には調査指導委員会による現地視察、同年11月3日には金沢市歴史探訪月間と小矢部市の「小原道ウォーキング」の共催イベントとして調査成果の現地説明会を実施した。調査は主郭虎口や土橋、櫓台、馬出虎口、横堀、大堀切、大堀切横の尾根筋など15カ所の調査区を設定し、計135㎡について発掘調査を実施した。なお、平成25年度に小原越の調査を実施する際にも、大堀切より西側に所在する堀切や周辺の小原越推定ヶ所が発掘調査を実施したが、その成果については第5章で解説している。

第2節 遺構と遺物

本節では、城郭の構造と発掘調査成果について解説する。

1. 城郭構造 (第12・13・15図、別図)

主郭Iと土橋等で接続する曲輪II～VIとそれらを囲む横堀、曲輪間を分断する堀切、城郭の北端と西端を遮断する大堀切によって構成され、外柵形虎口や馬出を随所に配置している。主郭I南西隅の張り出しは内柵形状になっており、その南側には定型化前の馬出が配されている。曲輪IIの南端にも外柵形2を設け、曲輪IIIの南東には馬出2を設けて防御力を向上させている。大堀切が加賀側に認められることから、加賀側からの侵攻を意識した佐々成政方の築造を示しているものと考えられる。

なお、城外と考えられるが、松根城へ延びる小原越が通過する尾根に加賀側、越中側共に堀切が設

けられている。

2. 遺構 (第 14～22 図)

主郭や曲輪への虎口、外升形虎口、馬出虎口、土橋、櫓台、横堀、大堀切、大堀切横の尾根筋で調査を実施した。馬出 2 から曲輪Ⅲへ至る虎口や横堀から遺物が定量出土しており、古代の灰釉陶器や中世の土師器皿、珠洲焼、越前焼、金属製品などが出土している。

A トレンチ (第 16 図) は主郭南西隅の虎口に設定した。主郭南西隅は主郭平地より一段低く、張り出していることもあり、内升形状を呈していると考えられる。主郭は昭和 54 年に発掘調査が実施されているので、今回は主郭の平坦地には調査区を設けなかった。主郭へ入るための門の検出を試みたが、そのような遺構は見つからなかった。調査区全域が盛土によって造成された平坦地であり、ピットや平らな面が上を向いた岩盤ブロックが複数検出されたが、建物と関係するかは不明である。中でも調査区中央東寄りの岩盤ブロックは、後述する E トレンチで見つかった門遺構と考えられる建物の礎石に類似しており、その約 1.8m 北側にもやや小ぶりながら岩盤ブロックが所在することから、建物の礎石である可能性は考えられる。なお、図面上の一点破線は土層の違いを示しており、様々な土壌を用いて盛土したことがわかる。

B トレンチ (第 16 図) は A トレンチ同様に内升形状を呈する空間から主郭平地へ接続する斜面上に設定し、門遺構の検出を試みたが、見つからなかった。全域が盛土であり、北側がより低いと考えられる。

C トレンチ (第 16 図) は主郭南側に位置する馬出 1 の前面土橋に設定し、東西から延びている堀切が続いているかどうかを確認することを目的とした。地表面から 15～30 cm の深さで整地層と考えられるよくしまった土層が検出され、それより下層は黒色砂質土であるが、元からの地盤であり、地山である可能性が高い。よって、東西の堀切が延びていたものを、盛土造成したのではなく、もともとある地盤を若干整地して土橋として用いていたことがわかった。

E トレンチ (第 14・17 図) は曲輪Ⅲとその南東側に取付く馬出 2 の土橋から曲輪Ⅲ側上がった箇所を設定した。調査区は西側の土塁部分と東側の平坦地に分かれるが、土塁側では最大 2.4m 程の盛土を確認している。平坦地側では 1.3m 以上の長方形に並ぶ岩盤ブロックを検出しており、石ではないが、周辺では石が採取できないことや規則的に並んでいるように見えること、門が想定される位置であることから建物の土台である礎石と考えている。長辺が約 2m、短辺が約 1.3m の長方形を呈し、土橋から直進するのではなく、若干北寄りに進路を変えて侵入する形となり、また本遺構を通過してからは、左に折れないと曲輪を直進できないような構造となっている (第 14 図)。本調査区からは多くの遺物が出土しており、古いものでは灰釉陶器、13・14 世紀頃の土師器皿が盛土中から出土しており、表土中や表土直下、盛土中から 16 世紀後葉と考えられる土師器皿や越前焼、鉄釘などが出土している。中世以前に遡る小原越は本調査区を設定した曲輪Ⅲの南端を通過すると考えられ、当地周辺に様々な時代の遺構が形成されていた可能性が考えられる。

F トレンチ (第 17 図) は E トレンチに隣接して土塁の頂部に設定した。ピットが複数検出されたが、穴状の掘方を持つものではなく、根痕などであり、切山城跡の調査で見つかった柵・塀の痕跡は不明であった。

G トレンチ (第 18 図) は馬出 2 の南西隅に位置し、後世の改変によって不明な点はあるが、土塁が切れているために城門の存在を確かめるために設定した。ピットや礎石は見つからなかったが、幅 50 cm 前後の岩盤に類似した土壌が細長く伸びるものが検出された。また、恐らく中世段階だと思われ

るが、17～29層及び30～39層の土塁状盛土の間に、しまりが強く固いことから整地土と考えられる16層によって構成される段階があって、次に2～15層までが盛土された段階が存在したようである。細長い岩盤類似土層は4層と36・37層であり、平面図上にも図化している。建物の土台であるかは不明であり、また36・37層は盛土30～35層の下にあるために、4層と同時期かもわからない。同じような岩盤類似土層であり、検出レベルもほぼ同じであるために、同時期に存在した可能性は考えられるが、説明が難しい状態にある。

Oトレンチ（第18図）は曲輪Ⅳとその北側土橋が取りつく位置に設定した。盛土や溝、ピットなどは検出されたが、建物に関する遺構については不明であった。一点破線は土層の違いを示しているが、中央で南北に延びる範囲は溝の検出線で、東半のものは土塁盛土の土層ラインを示している。

Dトレンチ（第19図）は曲輪Ⅲの西側に張り出す櫓台に設定した。櫓に関する遺構は見つからなかったが、全域で盛土を確認しており、サブトレンチによって1.2m以上の盛土を確認している。盛土中から越前焼甕の胴部片や金属製品が出土している。

Lトレンチ（第19図）は城郭南端の掘り割り遺構であり、小原越跡と伝えられてきた場所に設定した。地表面から約0.7mの深さで岩盤を削り出した幅1.5m程の堀底を検出している。中世の小原越は、曲輪Ⅲの南側に想定されるので、本遺構は横堀でかる可能性が高い。

Hトレンチ（第19図）城郭西側の横堀に設定した。岩盤を削り出して築造しており、幅約2.8mの堀底をもつ箱堀と切岸を確認している。

Jトレンチ（第20図）は城郭西側の横堀と現在道として利用している場所が隣接するような位置関係にある位置に設定した。調査区東半では地表面から約1.7mの深さで幅2.2m以上の略葉研状の堀跡、西半では岩盤ブロックを含む40層が地山ということであれば小さな平坦地、地山でなければ掘り込みが検出され、横堀が続いていることが確認された。

Iトレンチ（第20図）はJトレンチに隣接して、横堀部分に設定した。岩盤を削り出した箱堀状の幅約1.5mの堀底を地表面から約1.5mの深さで検出している。

Mトレンチ（第20図）は、Jトレンチのやや南西側で現在は通路として利用している場所に設定した。地表面から約2.3mの深さで幅1.8m以上の岩盤を削り出した平坦面を確認しており、西側に立ち上がりは確認できなかったが、H・I・Jトレンチで確認した横堀が巡っている可能性が明らかとなった。こちらも城南端の小原越とされてきた掘り割り状の遺構同様に横堀が後世に道として利用されてきたものであろう。

Kトレンチ（第21・22図）は城郭南西端の大堀切1に設定した。東側が城郭側であり、現況は東西トレンチを境にして北側が一段低い。調査によって東西方向に延びる岩盤削り出しの土塁が堀底を南北に分断していることが判明し、現況の段が遺構によって形成されたものであることがわかった。堀幅は約14m、地表面から堀底までの深さは約2.6m以上あり、土塁の高さは堀底から約2.5m、幅は約5mある。土塁据には北側で幅約07m、深さ約1.1m、南側で幅約1m、深さ0.9mの堀底をもつ地山削り出しの箱堀が土塁と並行して延びている可能性があることも判明した。障子堀や畝堀のように連続した施設は確認できなかったが、大堀切堀底の南北移動を阻害するための設備と考えられる。

Nトレンチ（第22図）は大堀切1西側の尾根筋に設定した。大堀切によって遮断された尾根筋に道跡が残っていないかを確認する目的で調査を行い、2条の道跡を検出した。道跡は6・7・9層の下ラインと11・12層の下ラインが該当すると考えられ、上幅1.5m前後の緩やかな凹みが道跡と考えられている。調査区から西側の尾根筋でも第6章の小原越調査で調査区を設定しており、道跡を確認しているので、可能性は高いと考えている。この調査結果によって、本来尾根筋を通過していた小原越が城

郭の出現によって遮断され、城郭が破城の後は大堀切の脇を通過し、城郭南端の横堀を利用した可能性が高くなったと考えられる。

3. 出土遺物（第23・24図、第2表）

1～4はDトレンチから出土している。1・2は越前焼の甕胴部片であり、1には自然軸が垂れている。3・4は金属製品であり、釘の可能性を考えている。

5～20はEトレンチから出土している。5は灰釉陶器で、9世紀後半頃のものと考えられる。6～14はてづくね土師器皿である。7は口縁部と底部の境が鋭く屈曲しており、14と類似している。8～12は口縁端部に水平面をもつものであり、9・10は先端を若干つまみ上げている。1580年代に位置づけられる金沢城橋爪ノ門下層整地土01出土の土師器皿に形態が類似しており、それに近い年代を示すものと考えられる。ただし、金沢城出土の製品は胎土の観察によって、能登産の可能性が考えられており、松根城跡出土品の方が胎土は精良である。

13は厚めの底部に短い口縁部がつくもので、13世紀代の製品の可能性が高いと考えられる。14は通常の小皿になるかはわからないが、13～14世紀頃の製品であろうか。15は越前焼甕の口縁部片であり、口縁端部に内傾する面を持ち、口縁端部下内面には段、外面には稜が認められることから、越前焼編年V期で、16世紀代に位置づけられる。19は鉄釘であり、門の礎石周辺から出土しており、城門に関するものかもしれない。18はすり鉢であるが、土器質であるため、陶器の生焼け品であるのか土器すり鉢であるのか判別がつかない。

21はIトレンチから出土した越前焼甕の胴部片である。表面に墨書きのような「一」が見える。Iトレンチ南側上部の檜台に設定したDトレンチでも越前焼が複数見つかったので、同一個体の破片が落ちた可能性がある。

22はKトレンチ出土の石英質石材であり、火打石の剥片である可能性を考えている。

23はGトレンチで出土した急須であり、近代以降の製品であり、耕作などに伴って持ち込まれたものであろう。

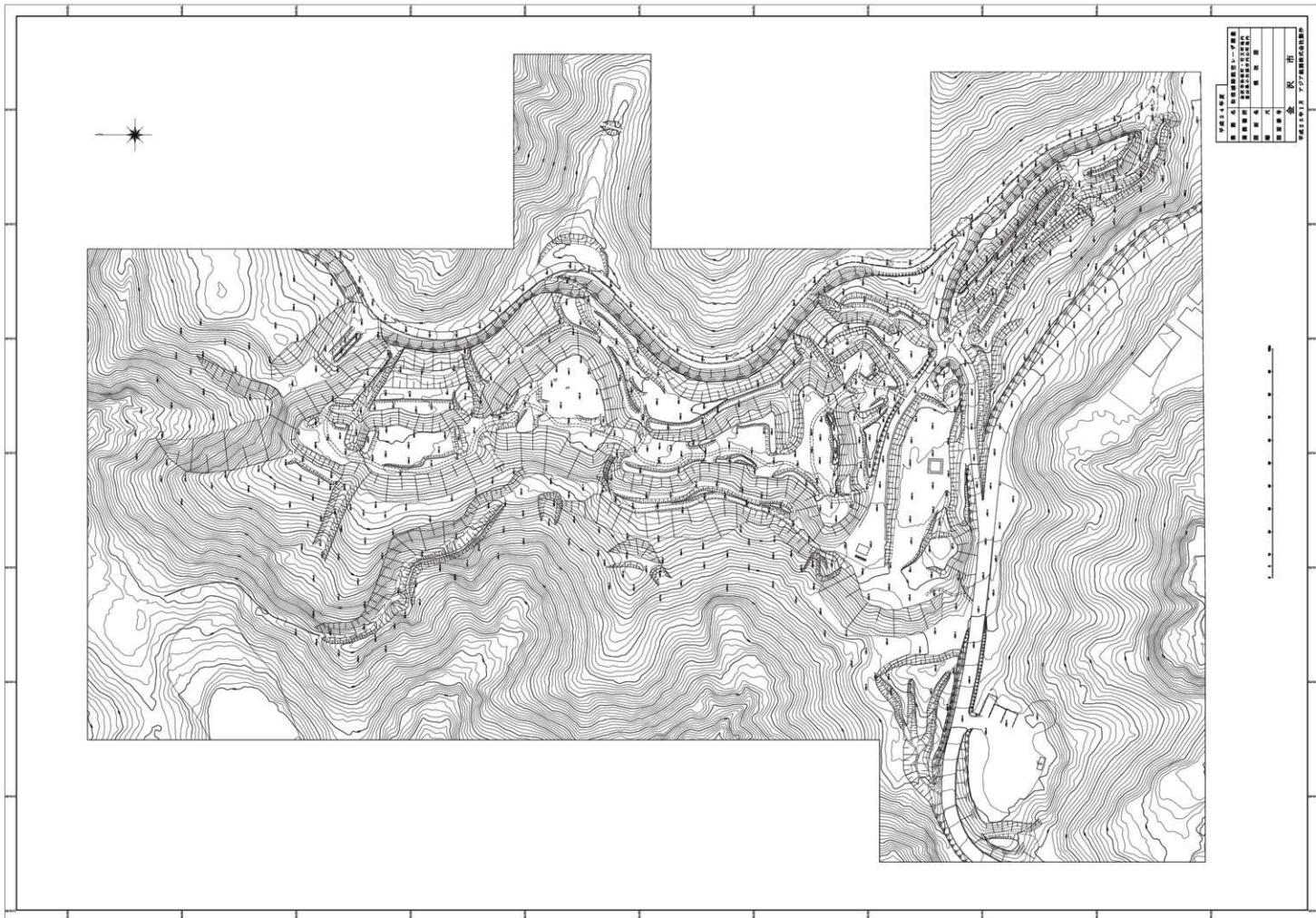
24は曲輪VIで表採された砥石であり、時期は不詳である。

第3節 小結

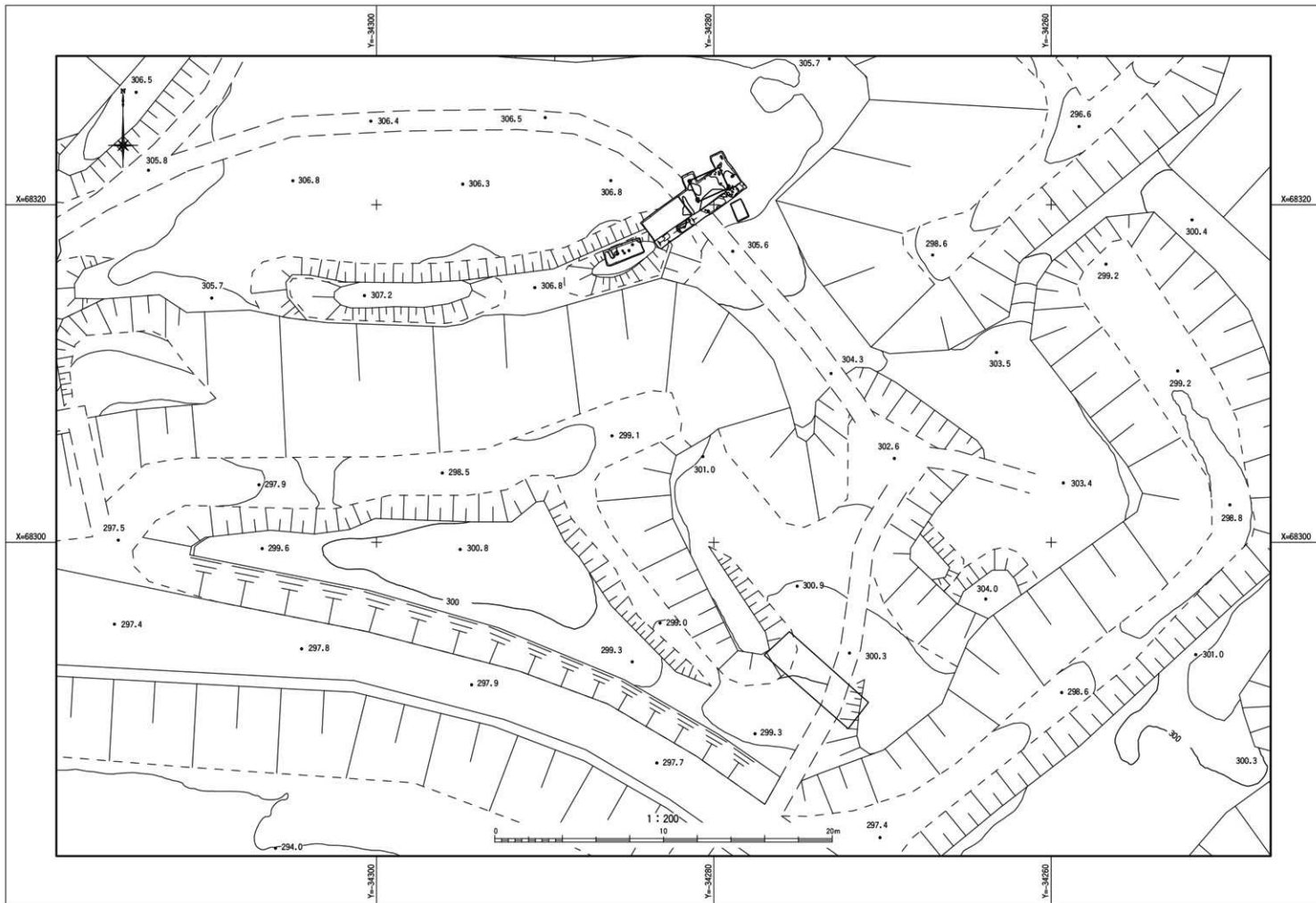
今回の調査では、まず航空レーザ測量を実施して、城郭の形状把握に努めた。文化財への利用としては北陸で初めての実施である。この測量によって、新たな遺構を確認すると共に、広い範囲で周辺地形を把握することができるなど多くの利点があることがわかった。

発掘調査によって、門跡や小原越跡、堀底、盛土跡などが確認され、16世紀後葉の土師器皿や越前焼甕、珠洲焼甕の他、9世紀頃の灰釉陶器や13～14世紀頃の土師器皿、鉄釘なども出土している。このことによって、多時期に使用された複合遺跡であることが判明すると共に、現在残る遺構は16世紀後葉のもので、後世の史料に佐々方の城として登場するが、発掘で確認された年代と概ね一致していることがわかった。

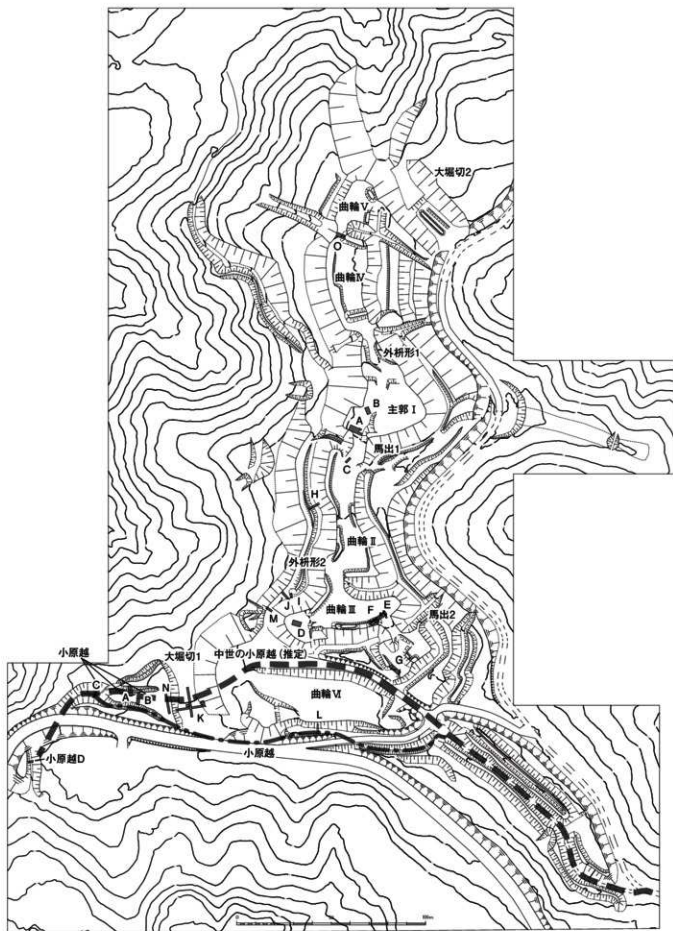
また、旧小原越を初めて発掘で確認できた。大堀切で遮断されていることから、戦国時代末を遡る道跡と考えられる。これは、山城が軍事的に道路を切断したことを初めて確認した事例といえ、加賀側からの侵攻を防ぐために小原越を切断し幅約25mの堀を構築していることから、小原越を戦時封鎖した可能性が考えられる。従来は大堀切を迂回して城の南端部を通過する道跡が中世以来の小原越と考えられていたが、今回の調査結果を受けて、廃城後にその道筋になった可能性が高いと考えられる。



第12图 遺構全体図 [S=1/1,500]

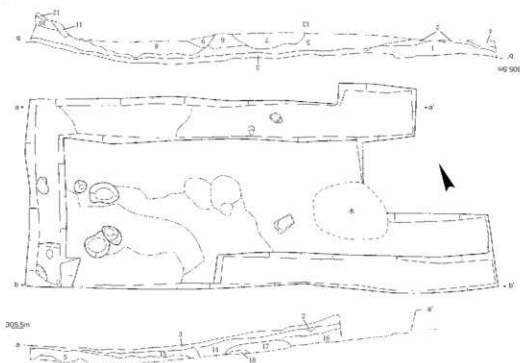


第14図 礎石建物（門）と周辺遺構図（S=1/200）

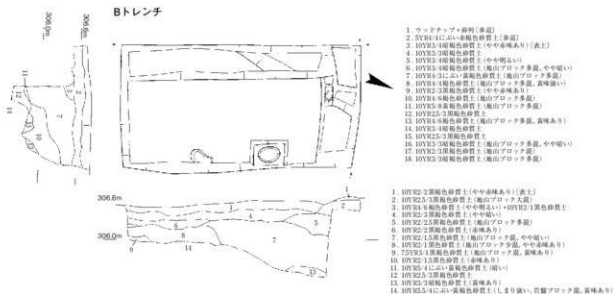


第15図 調査区配置図 [S=1/2,000]

Aトレンチ



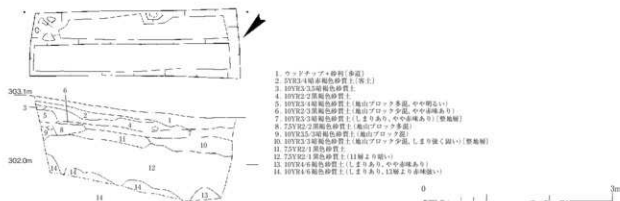
Bトレンチ



1. ウッドチップ+砂利(多量)
2. 10YR3/1赤褐色砂質土(多量)
3. 10YR3/4暗褐色砂質土(やや赤味あり)(表土)
4. 10YR2/2黒褐色砂質土
5. 10YR2/3暗褐色砂質土(やや暗い)
6. 10YR3/3暗褐色砂質土(黒山ブロッケ多量、やや暗い)
7. 10YR4/1濃い赤褐色砂質土(黒山ブロッケ多量)
8. 10YR4/4暗褐色砂質土(黒山ブロッケ多量、赤味強い)
9. 10YR2/2黒褐色砂質土(やや赤味あり)
10. 10YR4/4暗褐色砂質土(黒山ブロッケ多量)
11. 10YR3/3暗褐色砂質土(黒山ブロッケ多量)
12. 10YR2/2黒褐色砂質土
13. 10YR4/4暗褐色砂質土(黒山ブロッケ多量、赤味あり)
14. 10YR2/2黒褐色砂質土
15. 10YR2/2黒褐色砂質土
16. 10YR3/3暗褐色砂質土(黒山ブロッケ多量、やや暗い)
17. 10YR2/2黒褐色砂質土(黒山ブロッケ多量)
18. 10YR3/3暗褐色砂質土(黒山ブロッケ多量)

1. 10YR2/2黒褐色砂質土(やや赤味あり)(表土)
2. 10YR2/3暗褐色砂質土(黒山ブロッケ多量)
3. 10YR4/4暗褐色砂質土(やや暗い)+10YR2/2黒褐色砂質土
4. 10YR2/2黒褐色砂質土(やや暗い)
5. 10YR2/2黒褐色砂質土(黒山ブロッケ多量)
6. 10YR2/2黒褐色砂質土(赤味あり)
7. 10YR2/1黒褐色砂質土(黒山ブロッケ多量、やや暗い)
8. 10YR2/1黒褐色砂質土(黒山ブロッケ多量、やや暗い)
9. 7.5YR3/3暗褐色砂質土(黒山ブロッケ多量、赤味あり)
10. 10YR2/1黒褐色砂質土(赤味あり)
11. 10YR2/1黒褐色砂質土(暗い)
12. 10YR2/3暗褐色砂質土
13. 10YR3/3暗褐色砂質土(赤味あり)
14. 10YR3/5(4)濃い赤褐色砂質土(しまり強い、赤黒ブロッケ多量、赤味あり)

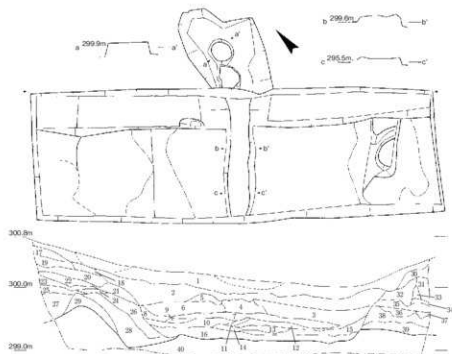
Cトレンチ



1. ウッドチップ+砂利(多量)
2. 10YR3/4暗褐色砂質土(表土)
3. 10YR2/2黒褐色砂質土
4. 10YR2/2黒褐色砂質土
5. 10YR3/3暗褐色砂質土(黒山ブロッケ多量、やや暗い)
6. 10YR2/2黒褐色砂質土(黒山ブロッケ多量、やや暗い)
7. 10YR2/3暗褐色砂質土(しまりあり、やや赤味あり)(表土)
8. 7.5YR2/2暗褐色砂質土(黒山ブロッケ多量)
9. 10YR2/3暗褐色砂質土(黒山ブロッケ多量)
10. 10YR2/3暗褐色砂質土(黒山ブロッケ多量、しまり強い)(表土)
11. 7.5YR2/2暗褐色砂質土
12. 7.5YR2/1暗褐色砂質土(11層より暗い)
13. 10YR2/3暗褐色砂質土(しまりあり、やや赤味あり)
14. 10YR4/6暗褐色砂質土(しまりあり、11層より赤味強い)

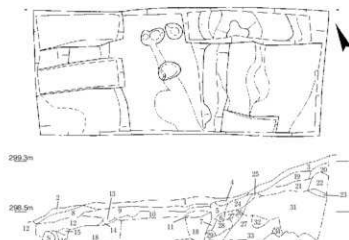
第16図 A・B・Cトレンチ [S=1/60]

Gトレンチ



- | | |
|--|---|
| 1. TSVR2-3黄褐色砂質土(表土、多量) | 22. IYR4-25灰黄褐色砂質土→IYR5-6黄褐色砂質土(嵐山土ホ) |
| 2. IYR4-4褐色砂質土 | 23. IYR2-4黄褐色砂質土(嵐山アロック少量, 17層より厚い, 21層より薄い) |
| 3. IYR4-4褐色砂質土(2層より薄い) | 24. IYR2-4黄褐色砂質土(嵐山アロック少量, 23層より厚い, 21層より薄い) |
| 4. IYR4-4褐色砂質土(1と2より強く固い, 岩盤に類似) | 25. IYR2-23黄褐色砂質土(嵐山アロック少量) |
| 5. IYR3-5黄褐色砂質土 | 26. IYR3-3黄褐色砂質土 |
| 6. IYR4-4褐色砂質土(3層に類似) | 27. TSVR4-4褐色砂質土 |
| 7. IYR4-5黄褐色砂質土 | 28. TSVR4-4褐色砂質土(27層よりやや中間的) |
| 8. IYR3-3黄褐色砂質土(21層の顕著なホ) | 29. TSVR4-4褐色砂質土 |
| 9. IYR3-5黄褐色砂質土→SY2-3黒色砂質土 | 30. TSVR5-4(21)-黄褐色砂質土 |
| 10. IYR5-6黄褐色砂質土 | 31. IYR5-6黄褐色砂質土(10層より薄い) |
| 11. IYR6-6黄褐色砂質土(1と2より強く固い) | 32. IYR2-3黄褐色砂質土(嵐山アロック少量) |
| 12. IYR6-6黄褐色砂質土(11層より薄い) | 33. IYR4-5-6褐色砂質土(7層より厚い) |
| 13. IYR4-5-6褐色砂質土(7層より薄い) | 34. IYR2-4黄褐色砂質土(やや中間的) |
| 14. IYR5-6黄褐色砂質土(1と2より強く固い, 10層より薄い) | 35. IYR4-2(21)-灰黄褐色砂質土(やや中間的) |
| 15. IYR2-2黄褐色砂質土→IYR4-4褐色砂質土 | 36. IYR4-2(21)-灰黄褐色砂質土(1と2より強く固い, 嵐山アロック混, 炭化物質, やや褐色化, 香味あり) |
| 16. IYR4-4褐色砂質土(1と2より強く固い, 4層より薄い)(岩盤状) | 37. IYR4-2(21)-灰黄褐色砂質土(1と2より強く固い, 嵐山アロック混, 炭化物質, 香味あり) |
| 17. IYR2-2黄褐色砂質土(3層よりやや中間的) | 38. TSVR3-3褐色砂質土(炭化物質) |
| 18. IYR4-4褐色砂質土(16層より厚い) | 39. IYR3-5-6黄褐色砂質土(やや中間的) |
| 19. IYR2-3黄褐色砂質土 | 40. IYR4-5-6褐色砂質土(嵐山) |
| 20. IYR2-3黄褐色砂質土 | |
| 21. IYR3-4黄褐色砂質土(嵐山アロック, 17層より厚い, 8層に類似) | |

Oトレンチ

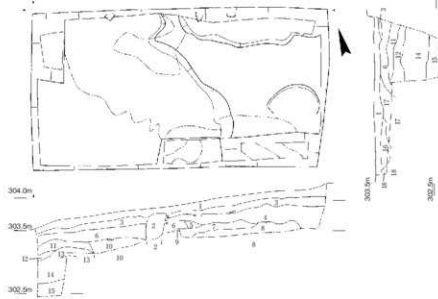


- | | |
|-----------------------------------|---|
| 1. クラッドアップ+砂利(多量) | 17. IYR6-6黄褐色砂質土 |
| 2. IYR5-6黄褐色砂質土(表土) | 18. IYR6-6黄褐色砂質土(嵐山アロック多量, やや中間的) |
| 3. IYR2-2黄褐色砂質土(表土) | 19. IYR2-2黄褐色砂質土(やや中間的, やや中間的) |
| 4. IYR2-2黄褐色砂質土(表土)→(観察ホ) | 20. TSVR2-2黄褐色砂質土(やや中間的あり) |
| 5. IYR2-23黄褐色砂質土(観察ホ) | 21. IYR2-23黄褐色砂質土 |
| 6. IYR2-2黄褐色砂質土(やや中間的)(観察ホ) | 22. IYR17-1黄褐色砂質土 |
| 7. IYR2-2黄褐色砂質土→IYR4-4褐色砂質土(観察ホ) | 23. IYR2-2黄褐色砂質土 |
| 8. IYR2-23黄褐色砂質土 | 24. IYR4-2(21)-灰黄褐色砂質土(嵐山アロック少量, やや中間的) |
| 9. TSVR2-2黄褐色砂質土 | 25. IYR2-15黄褐色砂質土 |
| 10. IYR2-2黄褐色砂質土(嵐山アロック少量, やや中間的) | 26. TSVR2-2黄褐色砂質土 |
| 11. IYR3-3黄褐色砂質土 | 27. IYR6-6黄褐色砂質土(36, 38層) |
| 12. IYR2-2黄褐色砂質土(香味あり) | 28. TSVR17-1黄褐色砂質土 |
| 13. IYR4-2(21)-灰黄褐色砂質土 | 29. IYR5-6黄褐色砂質土 |
| 14. IYR4-5-6褐色砂質土(嵐山アロック) | 30. IYR5-6黄褐色砂質土(香味あり) |
| 15. IYR3-3黄褐色砂質土(やや中間的) | 31. IYR17-1黄褐色砂質土(香味あり) |
| 16. TSVR3-3黄褐色砂質土 | 32. IYR3-3黄褐色砂質土(固い) |
| | 33. IYR6-6黄褐色砂質土(やや中間的) |
| | 34. IYR4-23灰黄褐色砂質土 |
| | 35. IYR5-6黄褐色砂質土(嵐山アロック少量) |
| | 36. IYR2-4黄褐色砂質土(岩盤, 岩盤アロック) |



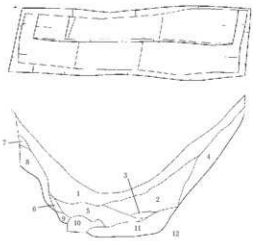
第18図 G・Oトレンチ [S=1/60]

Dトレンチ



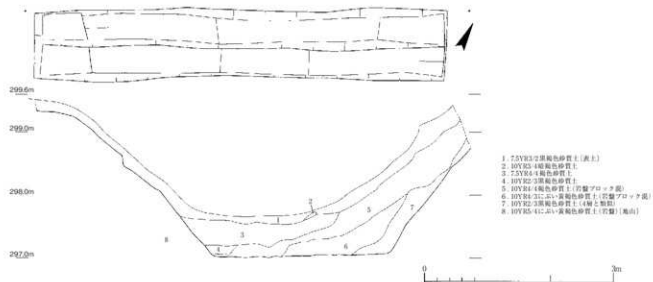
1. 7JY32-3黒褐色砂質土(表土)
2. 7JY32-2黒褐色砂質土(地盤)
3. 10Y34-3にじい黄褐色砂質土
4. 10Y34-4褐色砂質土
5. 10Y34-4褐色砂質土(4層より明ら)
6. 7JY34-3褐色砂質土(石灰質)
7. 10Y33-3褐色砂質土
8. 7JY34-2褐色砂質土(6層より褐色強い)
9. 10Y35-5黄褐色砂質土(7JY34-3褐色砂質土(6層)
10. 10Y34-3にじい黄褐色砂質土(5層より明ら)
11. 10Y34-4褐色砂質土(4層より明ら)
12. 10Y34-4褐色砂質土
13. 7JY32-2黒褐色砂質土(2層より褐色強い)
14. 7JY32-3黒褐色砂質土(1層より褐色強い)
15. 7JY34-4褐色砂質土
16. 10Y32-5褐色砂質土
17. 10Y34-5褐色砂質土
18. 10Y36-6明黄褐色砂質土

Lトレンチ



1. 10Y32-3黒褐色砂質土(表土)
2. 10Y34-4褐色砂質土
3. 10Y35-4にじい黄褐色砂質土
4. 10Y34-6褐色砂質土
5. 10Y33-3褐色砂質土
6. 7JY35-6明褐色砂質土(地山崩落土砂)
7. 3JY17-3褐色砂質土(地山)
8. 7JY35-6明褐色砂質土(6層より黄味あり)(地山砂)
9. 7JY34-6褐色砂質土(4層より黄味あり)
10. 10Y33-3褐色砂質土(3層より明ら)
11. 10Y34-6褐色砂質土(4層より明ら)
12. 10Y34-6褐色砂質土(石灰質)(地山)

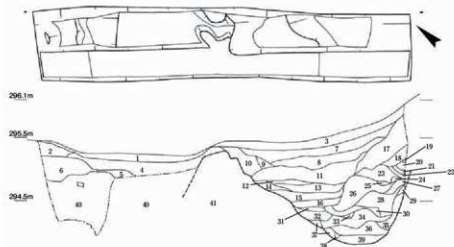
Hトレンチ



1. 7JY32-3黒褐色砂質土(表土)
2. 10Y32-3褐色砂質土
3. 2JY34-4褐色砂質土
4. 10Y32-3黒褐色砂質土
5. 10Y34-4褐色砂質土(石灰質プロット面)
6. 10Y31-2にじい黄褐色砂質土(石灰質プロット面)
7. 10Y32-3黒褐色砂質土(4層と地盤)
8. 10Y35-4にじい黄褐色砂質土(石灰質)(地山)

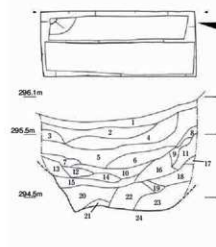
第19図 D・H・Lトレンチ [S=1/60]

Jトレンチ



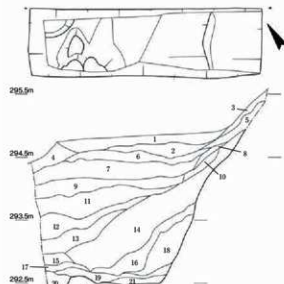
1. 砂利〔基準〕
2. IYR4-4褐色砂質土〔表土〕
3. IYR4-2灰黄褐色砂質土〔やや暗い〕〔表土〕
4. IYR4-2灰黄褐色砂質土〔しまりあり、3層より暗い〕〔即表土上〕
5. IYR4-3に多い黄褐色砂質土〔やや暗い〕
6. IYR4-3に多い黄褐色砂質土〔堆山ブロック多量〕
7. IYR4-3に多い黄褐色砂質土〔やや暗い〕
8. IYR4-5-4褐色砂質土
9. IYR4-3に多い黄褐色砂質土
10. IYR4-5-6褐色砂質土〔堆山ブロック多量、堆山崩落土上〕
11. 2.5Y5.6青〜青褐色砂質土〔7.2YK3-2黄褐色砂質土層、赤味強い〕
12. IYR4-5-4褐色砂質土〔赤味強い〕
13. IYR4-3に多い黄褐色砂質土〔やや暗い〕
14. IYR4-5-4褐色砂質土〔やや赤味あり〕
15. IYR4-3に多い黄褐色砂質土〔やや暗い〕
16. IYR4-3に多い黄褐色砂質土〔やや赤味あり〕
17. IYR4-3に多い黄褐色砂質土〔やや赤味あり〕
18. IYR4-3に多い黄褐色砂質土〔堆山ブロック少量、赤味あり、やや暗い〕
19. IYR4-3に多い黄褐色砂質土
20. IYR4-3に多い黄褐色砂質土〔堆山ブロック少量、18層より暗い〕
21. IYR4-2.5黄褐色砂質土
22. IYR4-5.3に多い黄褐色砂質土
23. IYR4-2.5黄褐色砂質土〔17層よりやや暗い〕
24. IYR4-5-4褐色砂質土〔赤味あり〕
25. IYR4-5-4褐色砂質土〔赤味強い、24層とは12階じ〕
26. IYR4-3暗褐色砂質土〔赤味強い〕
27. IYR4-5.3黄褐色砂質土〔赤味あり〕
28. IYR4-2.5黄褐色砂質土+IYR4.5.4褐色砂質土
29. IYR4-5-6褐色砂質土〔赤味強い、やや暗い〕
30. IYR4-5-6褐色砂質土〔赤味強い、やや暗い、20層より暗い〕
31. IYR4-4褐色砂質土〔やや暗い〕
32. IYR4-4褐色砂質土〔やや暗い〕
33. 20層+31層
34. IYR4-3暗褐色砂質土〔やや赤味あり、やや暗い〕
35. IYR4-2.5黄褐色砂質土〔堆山ブロック多量〕
36. IYR4-3黄褐色砂質土〔堆山ブロック少量、36層より暗い〕
37. IYR4-3に多い黄褐色砂質土
38. IYR4-2.5黄褐色砂質土
39. IYR4-3暗褐色砂質土〔やや暗い〕
40. IYR4-5-4褐色砂質土〔即表土上〕
41. 2.5Y5.6黄褐色砂質土〔7.2YK3-2黄褐色砂質土層、赤味強い〕

Iトレンチ



1. IYR4-4褐色砂質土〔表土〕
2. IYR4-4に多い黄褐色砂質土
3. IYR4-6褐色砂質土〔堆山ブロック多量、やや赤味あり〕
4. IYR4-6褐色砂質土〔しまりあり、やや赤味あり〕
5. IYR4-4に多い黄褐色砂質土〔堆山ブロック少量、やや赤味あり〕
6. 2.5Y5-6黄褐色砂質土
7. IYR4-4褐色砂質土〔堆山ブロック多量〕
8. IYR4-5に多い黄褐色砂質土〔堆山ブロック多量、やや赤味あり、暗い〕
9. IYR4-5-6黄褐色砂質土〔やや赤味あり〕
10. IYR4-5-6黄褐色砂質土〔やや赤味あり〕
11. IYR4-3に多い黄褐色砂質土〔堆山ブロック多量、やや赤味あり〕
12. IYR4-6褐色砂質土〔堆山ブロック多量、やや赤味あり〕
13. IYR4-6褐色砂質土〔堆山ブロック多量、12層よりブロック大、やや赤味あり〕
14. IYR4-5-6黄褐色砂質土〔堆山ブロック多量〕
15. IYR4-5-6黄褐色砂質土〔堆山ブロック多量、やや赤味あり〕
16. IYR4-4褐色砂質土〔堆山ブロック多量〕
17. IYR4-4に多い黄褐色砂質土〔やや赤味あり〕
18. IYR4-2.5黄褐色砂質土
19. IYR4-7黄褐色砂質土〔やや暗い〕
20. IYR4-5-4褐色砂質土〔やや赤味あり〕
21. IYR4-5黄褐色砂質土
22. IYR4-5-6褐色砂質土
23. IYR4-3暗褐色砂質土
24. 2.5Y7-7黄褐色砂質土〔7.2YK3-2黄褐色砂質土層、赤味強い〕

Mトレンチ

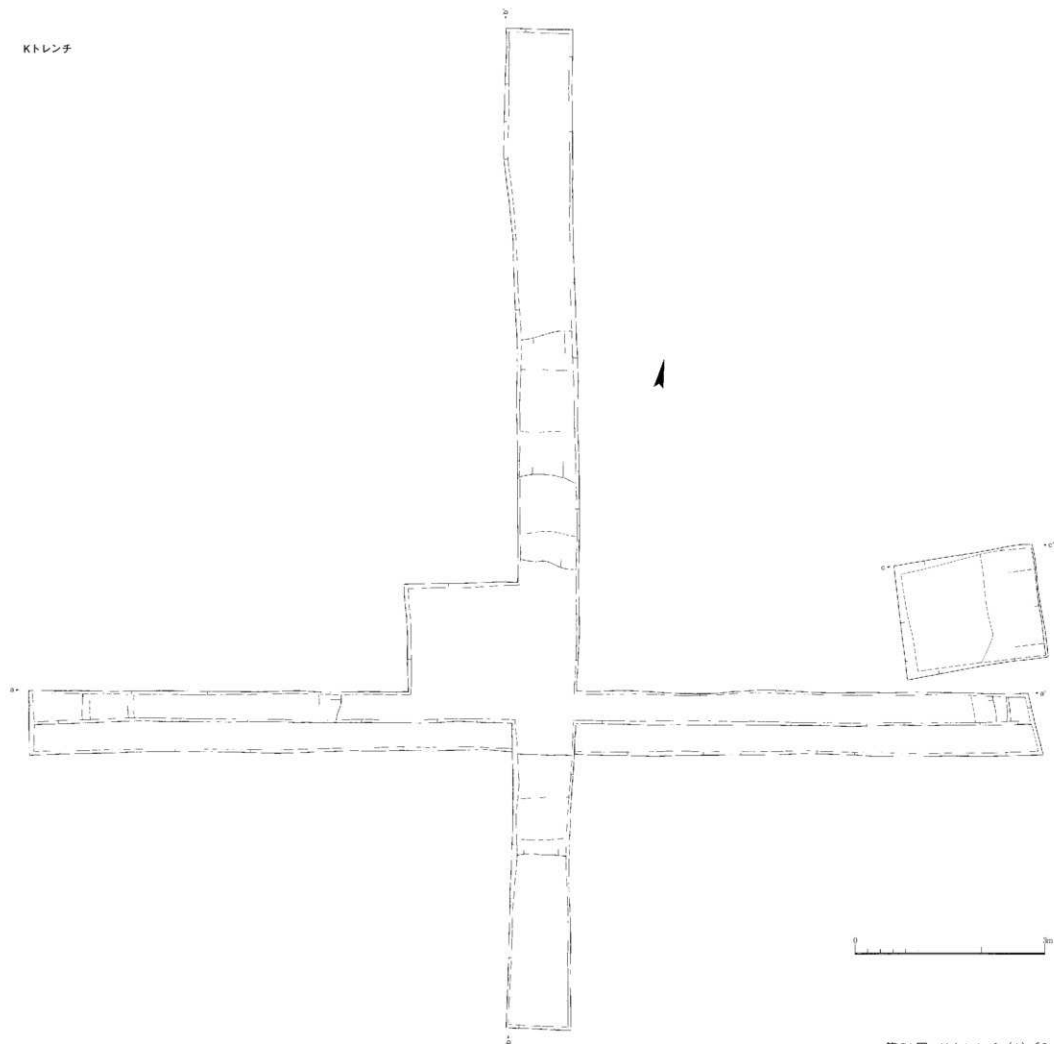


1. ウッドチップ+砂利〔基準〕
2. IYR4.2に多い黄褐色砂質土〔やや赤味あり〕〔表土〕
3. IYR4.2に多い黄褐色砂質土〔赤味強い〕
4. IYR4.2に多い黄褐色砂質土〔やや赤味あり〕
5. IYR4.2に多い黄褐色砂質土〔赤味強い、13層より暗い〕
6. IYR4.2に多い黄褐色砂質土〔暗い〕〔即表土上〕
7. IYR4.2に多い黄褐色砂質土〔赤味強い〕
8. IYR4.2に多い黄褐色砂質土〔赤味強い〕
9. IYR4.2に多い黄褐色砂質土〔赤味強い、13層より暗い〕
10. IYR4.2に多い黄褐色砂質土〔赤味強い〕
11. IYR4.2に多い黄褐色砂質土〔赤味強い〕
12. IYR4-6褐色砂質土〔やや赤味あり〕
13. IYR4-6褐色砂質土〔赤味強い〕
14. IYR4-6褐色砂質土〔赤味強い、14層より暗い〕
15. IYR4-6褐色砂質土〔赤味強い、13層より暗い〕
16. IYR4-2黄褐色砂質土〔やや赤味あり〕
17. IYR4-2黄褐色砂質土〔赤味強い〕
18. IYR4-6暗黄褐色砂質土〔赤味強い〕
19. IYR4-6暗黄褐色砂質土〔赤味強い〕
20. IYR4-2黄褐色砂質土〔暗い〕
21. IYR4-2黄褐色砂質土〔赤味強い〕
22. IYR4-4に多い黄褐色砂質土〔11層、赤味強い〕



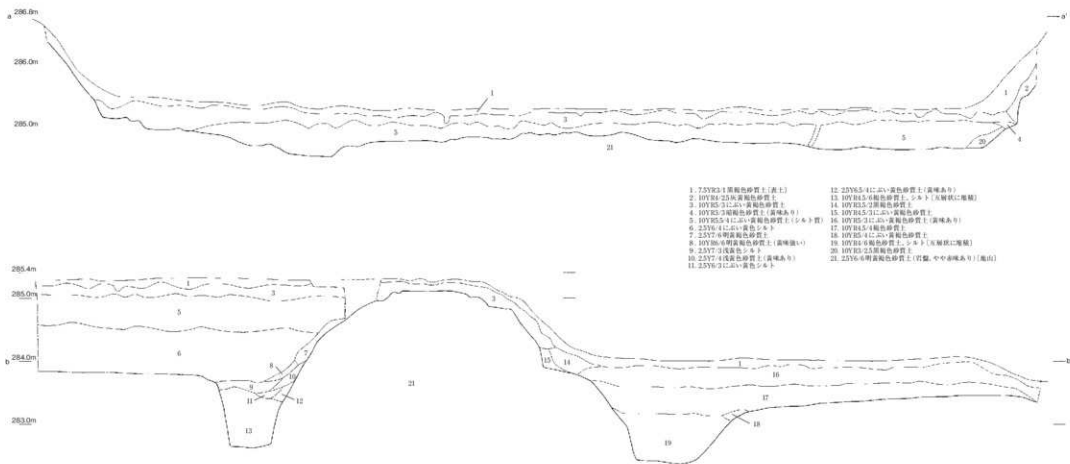
第20図 I・J・Mトレンチ [S=1/60]

Kトレンチ

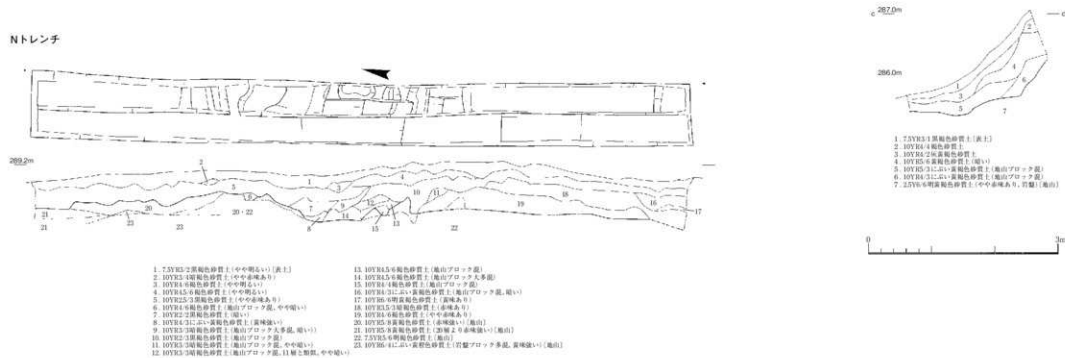


第21図 Kトレンチ (1) [S=1/60]

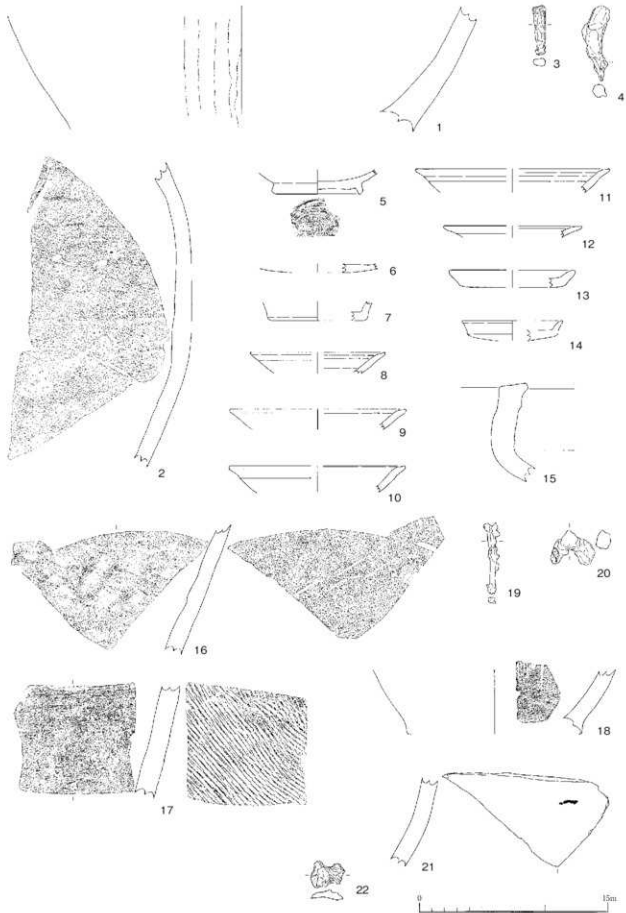
Kトレンチ



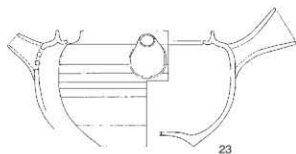
Nトレンチ



第22図 Kトレンチ (2)・Nトレンチ [S=1/60]



第23図 出土遺物 (1) [S=1/3]



23



24



第24図 出土遺物(2) [S=1/3]

第2表 出土遺物観察表

番号	遺構	種類 器種	法量				通存 /12	胎土			器 型					色調		備 考	実測 番号	
			口径 (長)	器高 (幅)	胴径 (厚)	底径 (埋)		砂	骨	礫	赤	口縁外面	胴部外面	口縁内面	胴部内面	底部外面	外面 (輪)			内面 (胎)
1	D	越前焼 壺					胴1	並					++'		++'	5Y7/4 淡黄 5YR7.5/2 淡黄	Y7/1灰	自然釉 №4直下	T18	
2	D	越前焼 壺					胴1 以下	並	並				++'・施釉		++'	2.5YR/3 4暗赤 褐色	5YR5/4 ゴイ赤 褐色	№4・№4直下	T19	
3	D	金属 釘か	39	10.5	6	5.8												№6	N2	
4	D	金属 釘か	60	10	10	17.12												埴土中	N3	
5	E	灰釉陶器 碗				72	底1 以下	少					++'	++'	++'	糸切	2.5YR/1 灰白	2.5YR/1 灰白	埴土中、№14	F4
6	E	土師器 皿				(80)	底1	少					++'		++'	++'	7.5YR/6 褐色	7.5YR/6 褐色	土器側表土中	T8
7	E	土師器 皿?				78	底2	少		少			++'		++'	++'	4 淡黄褐色 透黄褐色	4 淡黄褐色 透黄褐色	表土直下、№2	T15
8	E	土師器 皿					口1 以下						32++'	++'	++'	++'	7.5YR/6 褐色	7.5YR/6 褐色	土器側表土直下、№15	T13
9	E	土師器 皿					口1 以下						32++'		32++'		7.5YR/6 褐色	7.5YR/6 褐色	土器側表土中、№3	T17
10	E	土師器 皿					口1 以下						32++'	++'	++'	++'	7.5YR/6 褐色	7.5YR/6 褐色	土器側表土中、№4	T16
11	E	土師器 皿					口1 以下						32++'	++'	++'	++'	7.5YR/6 褐色	7.5YR/6 褐色	埴土中(中位)、№10	T10
12	E	土師器 皿					口1 以下						32++'	++'	++'	++'	7.5YR/6 褐色	7.5YR/6 褐色	52層	T12
13	E	土師器 皿					口1 以下	少	少	少			32++'	++'	++'	++'	7.5YR/6 褐色	7.5YR/6 褐色	土器側土器側土中 (中位)	T11
14	E	土師器 皿	80			64	口1	少					32++'	++'	++'	++'	7.5YR/6 淡黄褐色 透黄褐色	7.5YR/6 淡黄褐色 透黄褐色	土器側表土中(下 位)、№11	T9
15	E	越前焼 壺					口1 以下	少	少				++'		++'		5YR5/4 ゴイ赤 褐色	5YR5/4 ゴイ赤 褐色	埴土中、№8	F5
16	E	越前焼 壺						並	少				++'		++'		10YR/1 灰白	10YR/1 灰白	埴土中、№5 南西低地、№13	T6
17	E	珠洲焼 壺						少	少				99+		99+		№1 灰	№1 灰	北東低地表土下、 №12	T7
18	E	陶器 字引鉢					底1 以下	並	少				070++'		070++'	節目	7.5YR/6 褐色	10YR/4 ゴイ赤 褐色	埴土中、サブトレ	T5
19	E	金属 釘	55	10	12	4.08													埴土中、礎石4付近	F6
20	E	金属 不明	34	20	11	8.18													埴土中(中位)、№9	T14
21	I	越前焼 壺						並	少				数輪		数輪		5YR5/3 ゴイ赤 褐色	10YR/1 灰白	№1	F1
22	K	石製品 火打ち 石	16	13	5	1.10													埴土中、石実質	F2
23	G	石製品 急須	104	110	140	74	口5						070++'	070++'	070++'	070++'	070++'		表土中	T4
24	馬場	石製品 礎石	67	28	18	64.85													表層	F3

第5章 小原越の調査

第1節 概要

小原越は金沢市今町付近で北国街道から分岐し、尾根道やその脇を通り、小矢部市の五郎丸・末女にいたる脇街道である。これまで小原越と伝わってきた道筋は、現道や作業道に姿を変えた道筋やそれらに隣接して残っている掘り割り状の遺構を指していた。しかし、今回の調査によって、元々の小原越は尾根筋を通過していた可能性が高くなり、また小原越の大まかな変遷が想定可能となった。

調査は切山城から松根城に至る小原越で、作業道やその脇に掘り割り遺構が残っている箇所について重点的に測量調査を実施し、残り具合の良い箇所と切山・松根の両城周辺で発掘調査を実施した。

発掘調査は平成25年7月9日～同年8月2日に実施し、掘り割り道や尾根筋、松根城の堀切、切山城の推定横堀の約41㎡を対象としている。

第2節 遺構

1. 踏査・測量調査（第25～33図）

第27図は切山城跡周辺城である。図右上の切山城横堀から東側に2条の掘り割り道が確認でき、尾根筋には一部浅い段が認められる。

第28図は切山城跡の東側から切山城へ登る作業道際までの範囲で、通称オトシ坂を含んでいる。第27図で見えていた掘り割り道の延長が認められるが、途中で不明瞭となっている。尾根筋にはそれと似た遺構は認められないが、後述する発掘調査によって道の存在が推定可能となっている。

第29図は通称ナンド坂周辺である。幅広の非常に深い掘り割り道が東西に伸びているのが良くわかる。図東半の作業道付近では尾根筋に道筋があったというのが、現況では確認できなかった。

第30図は通称イシナ坂から通称バンドコ周辺である。図西端では幅広と幅狭の掘り割り道が並行して南北に伸びているのがわかる。その南端に接続する東西に伸びる作業道の北側尾根筋には尾根道が推定されるが、痕跡は認められなかった。図東半では現作業道から南に折れた後に蛇行しながら北東方向に伸びる幅広の掘り割り道が確認でき、その上段に幅狭の掘り割り道も並行して伸びている。

第31図は通称ドンバ峰周辺である。図中央には幅広の掘り割り道が確認できる。図東半では尾根上で部分的に浅い凹みが確認できており、道跡と考えられる。その尾根道は西には進まず、図東半中央あたりで等高線の緩やかな南側に下りていき、現作業道周辺を西に進んだ可能性を考えている。

第32図は通称ドンバ峰から通称山番所跡周辺の範囲である。尾根筋には部分的に凹みがあり、発掘調査で古道の存在が推定できるようになった。また南北に伸びる幅狭の掘り割り道が複数確認できる。

第33図は通称山番所跡から貫成小学校跡地周辺の範囲である。図南半は現作業道が尾根筋を通過しているので、同じ箇所にも古小原越も想定できる。北半からは東側の尾根筋が推定できるが、現況では痕跡が確認できない。ただし、公図では尾根筋に該当する箇所にも道が存在する。

2. 発掘調査（第3・15・27・28・31・32・34・35図）

Aトレンチ（第15・34図）は松根城の大堀切から西側の尾根筋北側の平坦地に設定した。大堀切によって遮断された尾根頂部から尾根筋の北側を降りていく狭い平坦地があり、道跡の存在を想定して調査を実施した。層位観察で幅1.6m程の浅い落ち込みが確認でき、2～6層が該当する。

Bトレンチ（第15・34図）はAトレンチの南東側で、松根城の大堀切によって遮断された尾根頂部から西側に約20m下った場所に設定した。調査区南半で3～5層の幅1.2m以上の掘り込みが確認さ

れた。このことによって、尾根筋と尾根筋脇の低い箇所での2ルートの道筋が想定されるようになった。

Cトレンチ(第15・34図)は松根城西側に残る掘り割り遺構で、小原越とされている場所に設定した。幅1.5m前後の浅い落ち込みが確認できたが、路盤構造は無く、地山を削り出した状態であった。

Dトレンチ(第15・34図)は松根城の最西端の堀切に設定した。城内に位置づけることは難しいが、松根城関係の防衛施設としては最西端である。岩盤削り出しの略葉研状の断面形態が確認された。

Fトレンチ(第32・34図)は通称山番所跡とされる平坦地から西に延びる掘り割り遺構に設定した。幅1.5m前後の浅い落ち込みが確認できた。

Gトレンチ(第32・34図)は通称山番所跡から通称ドンノ峰へと延びる尾根筋に設定した。尾根筋には、現況で部分的に若干の凹みが確認できている。道跡は平面では判別しにくかったが、層位では2層や4・5層の落ち込みが道跡に該当すると考えられる。

Hトレンチ(第31・32・35図)は通称ドンノ峰周辺で、Gトレンチから尾根筋を約70m南西方向に進んだ場所に設定した。比較的広い平坦地となっており、現況で二筋ほどの道跡が推定可能である。4・5層部分の浅い凹みと6~10・12層部分の浅い凹みが該当すると考えられる。岩盤ブロックを多く含んでいるが、特に調査区中央部に目立っている。道ではないところに集められたのであろうか。Gトレンチも含めて、尾根頂部付近の地盤には岩盤ブロックが多く含まれることが予想される。

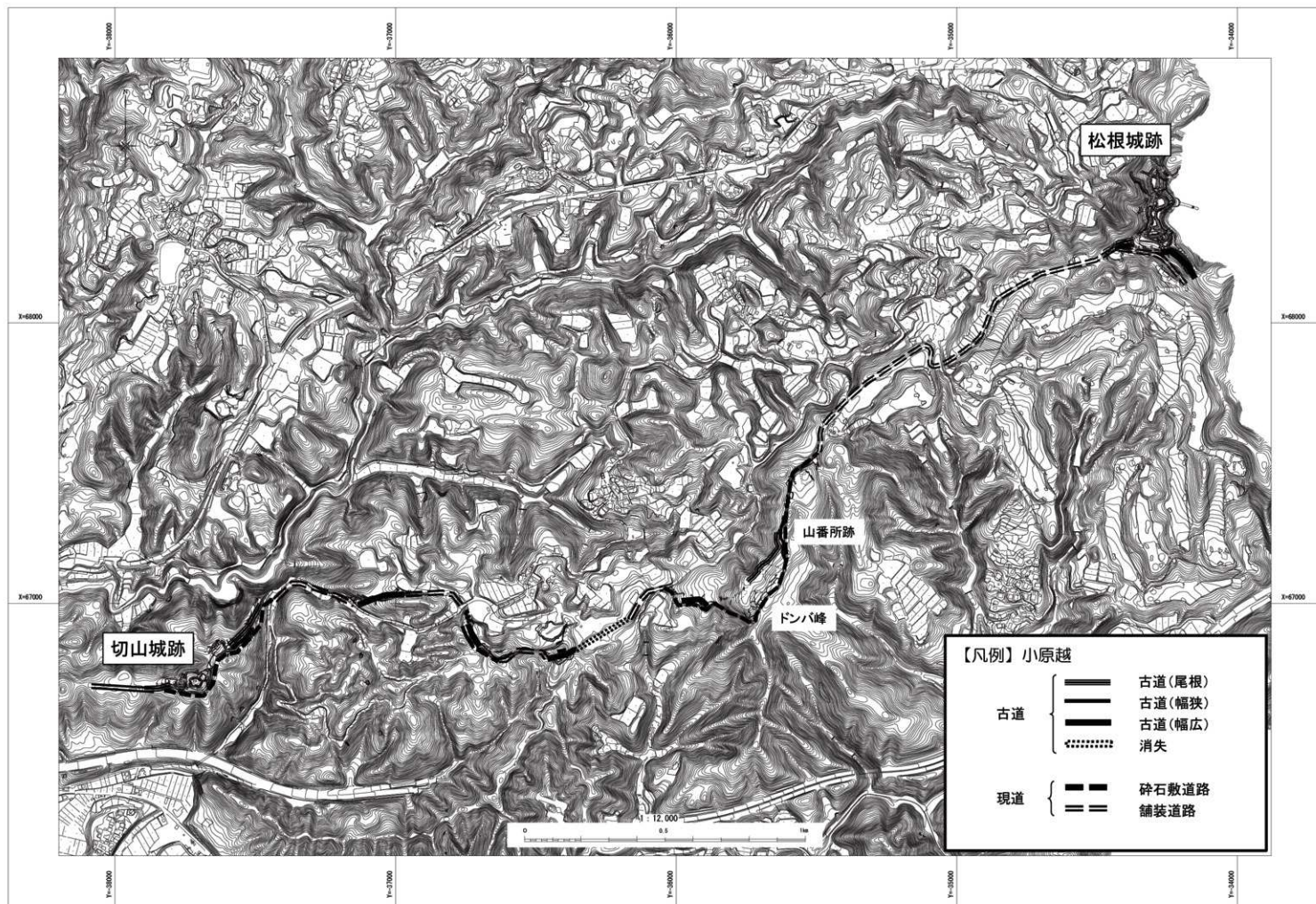
Iトレンチ(第27・28・35図)は越中側から切山城へ向かう尾根筋であり、切山城の横堀1から北東方向に向かって約30mのところに設定した。現況で凹みは確認できなかったが、表土を剥いだ段階で幅50~70cmほどの溝状遺構が確認できた。層位観察による底幅40cm程の浅い落ち込みが道跡と推定される。この結果、切山城周辺でも当初は尾根筋に小原越があったが、城郭廃城後は堀切などの影響によって、尾根筋からやや下った位置が道として利用された可能性が指摘できるようになった。

Jトレンチ(第27・35図)は切山城南側の切岸直下で設定した。切山城跡の発掘調査によって、切山城に南接する小原越と伝わっていた掘り割り遺構が、道ではなく横堀の可能性が高まったことから、他の切岸際も確認する必要性が生じたために実施した。岩盤による地山は検出されず、切山城調査のMトレンチとは様相が異なる結果となった。堀の立ち上がりは確認できなかったが、地山と考えられる7層が検出されたことよって1m以上の深さで掘り込みがあることがわかった。

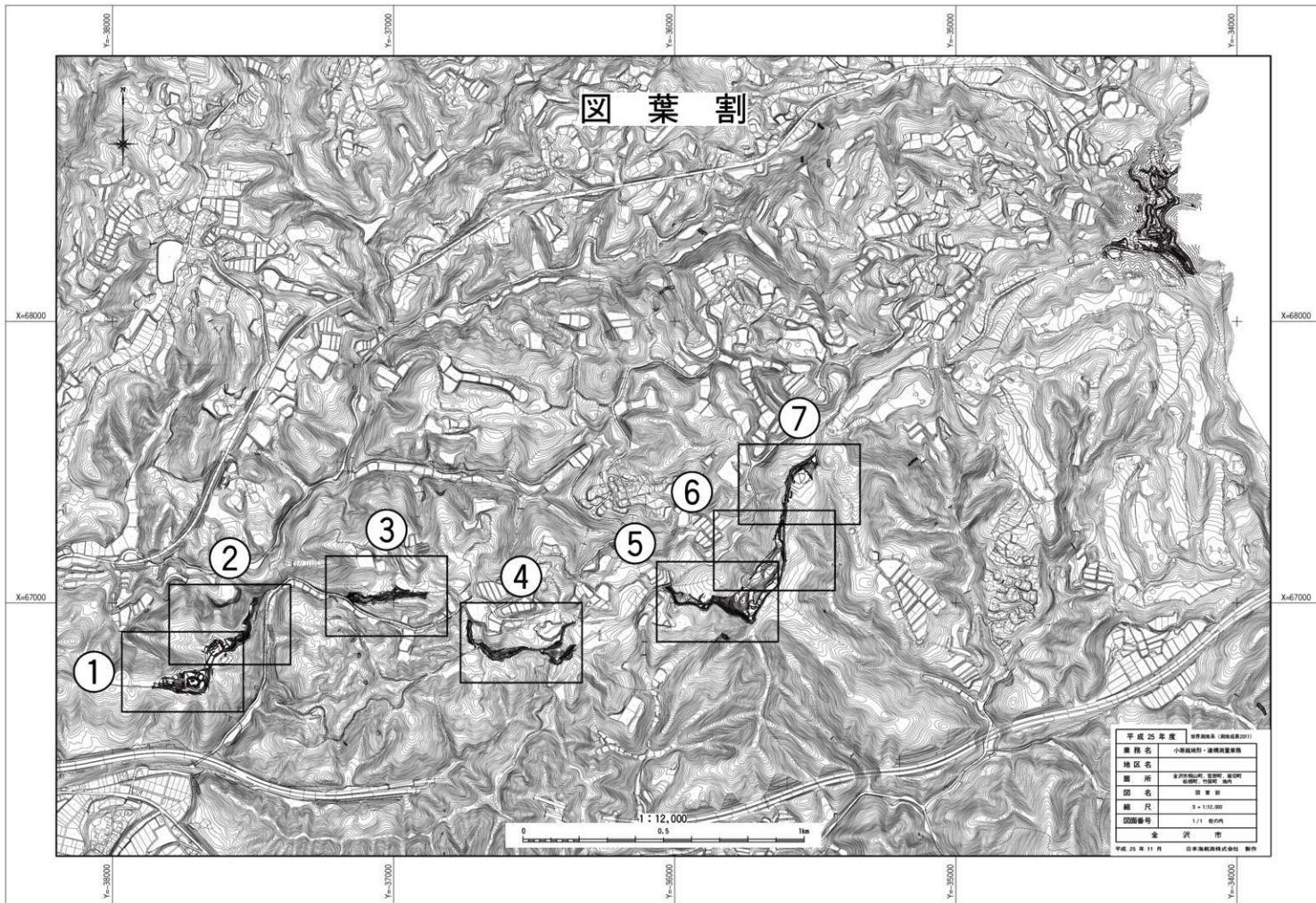
Kトレンチ(第27・35図)は切山城西端の堀切から尾根筋を西側に30m程向かったところに設定した。小原越が尾根筋を延びていることを推定して実施したが、結果として道跡は検出されなかった。明治頃の公園を確認すると、堀切の西際から現在の作業道方向に下りていく道が見えるので、現在は崩落等で不明であるが、斜面を下りていく道が小原越を踏襲していた可能性が考えられる。

第3節 小結

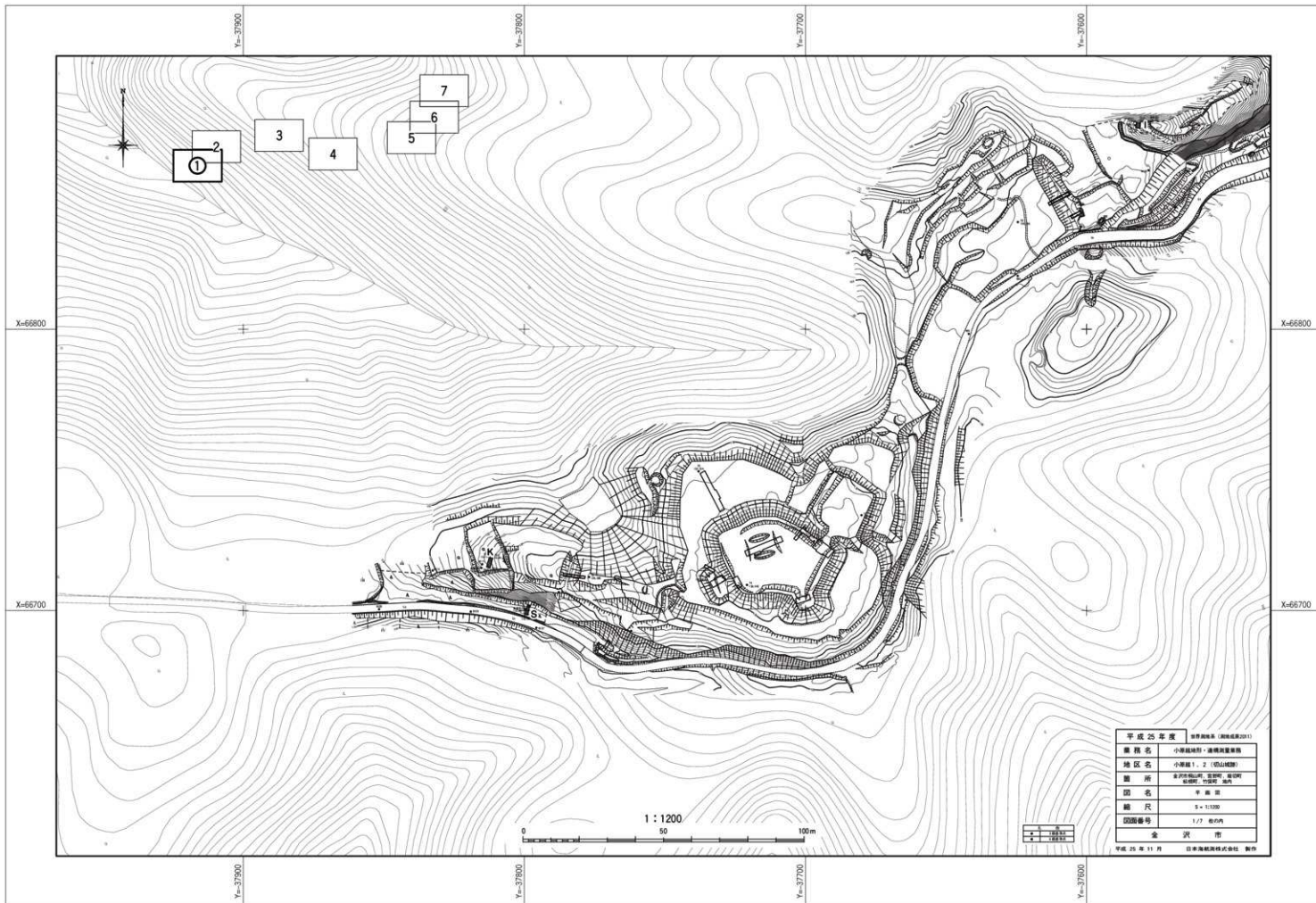
今回の測量及び発掘調査によって、尾根筋に道跡が存在することが明らかとなり、遺構としては幅1m前後の浅い凹みが確認できた。現在小原越と伝わる掘り割り道や現作業道が存在する場所に隣接する尾根で見つかっていることから、古小原越である可能性が高い。また切山城や松根城の周辺でも尾根筋に道跡が確認されており、城郭の堀切などで遮断されていることがわかっていく。つまり、中世に遡る古小原越は尾根道であることが推定可能となった。掘り割り道については幅狭と幅広のものがああり、幅広の道が荷車に対応することを考えると、当初は幅狭であったものから幅広掘り割り道への変遷が推定できる。よって、中世段階では尾根道、近世頃に尾根もしくは若干下がった位置での幅狭掘り割り道、荷車を用いた近代以降に幅広の掘り割り道を利用し、現在に至るようになったという変遷が想定できるようになった。



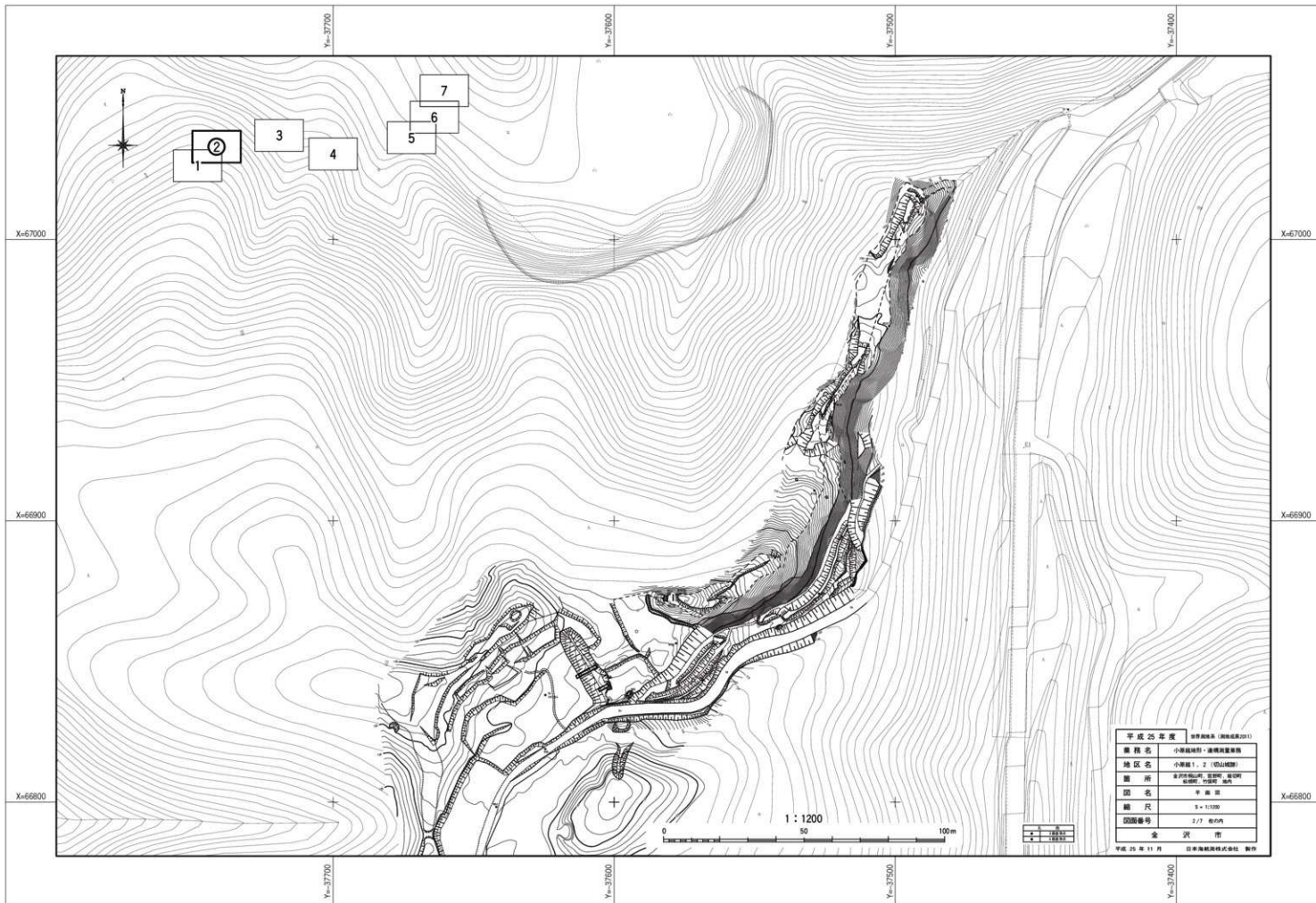
第25図 小原越路線図 (S=1/12,000)



第26図 図葉割図 (S=1/12,000)



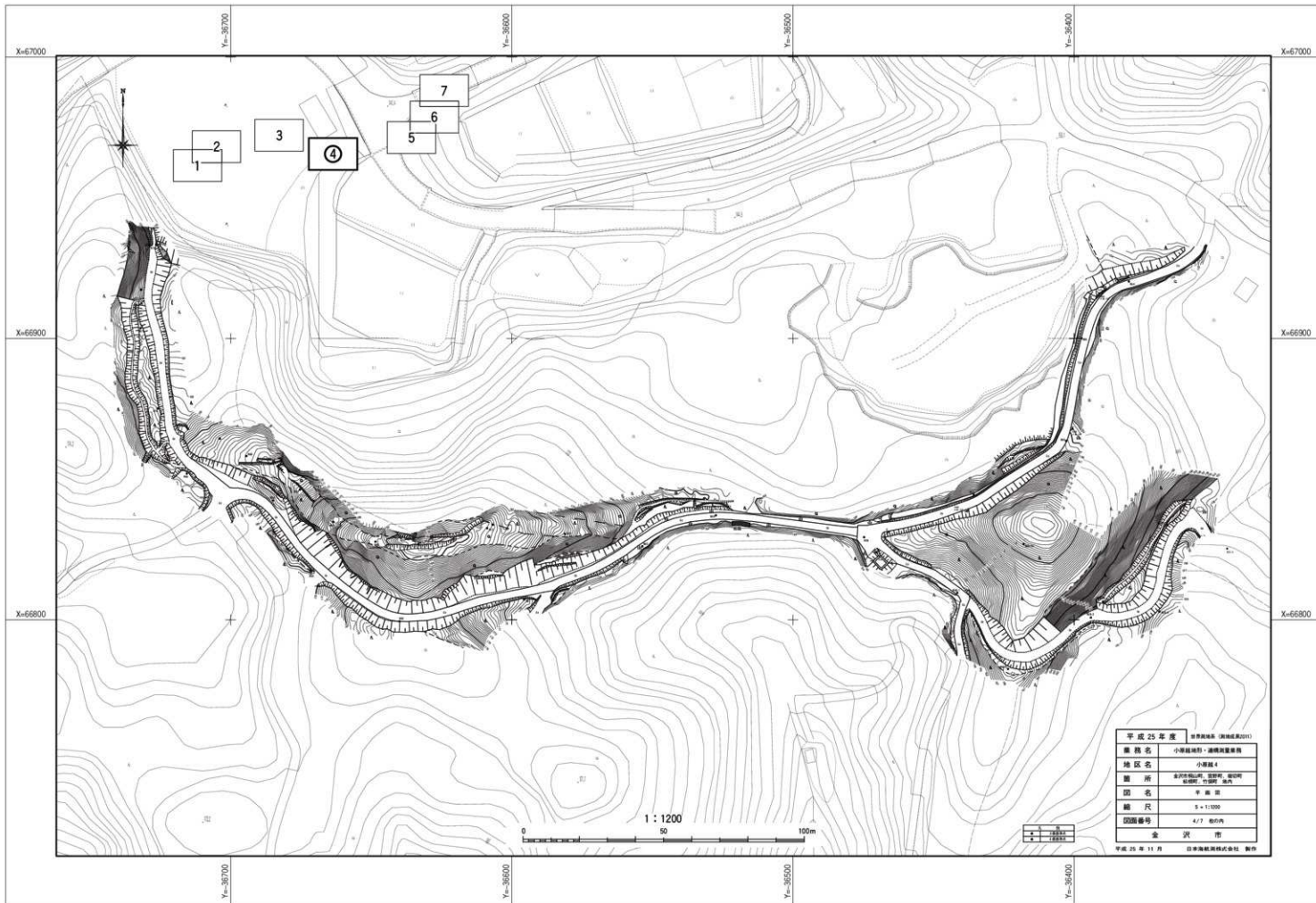
第27図 遺構・地形図(1) [S=1/1,200]



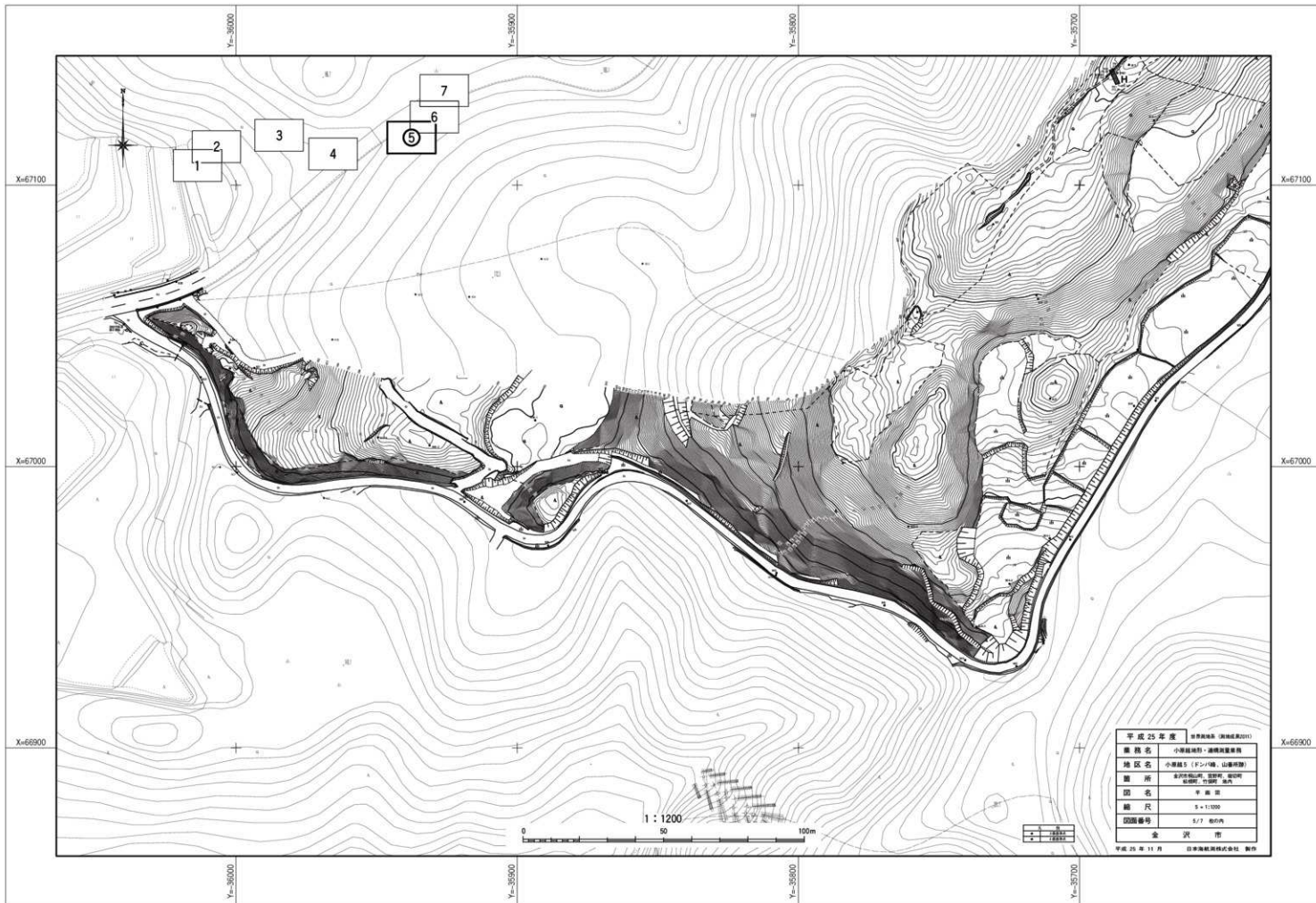
第28図 濃構・地形図 (2) [S=1/1,200]



第29図 遺構・地形図 (3) [S=1/1,200]

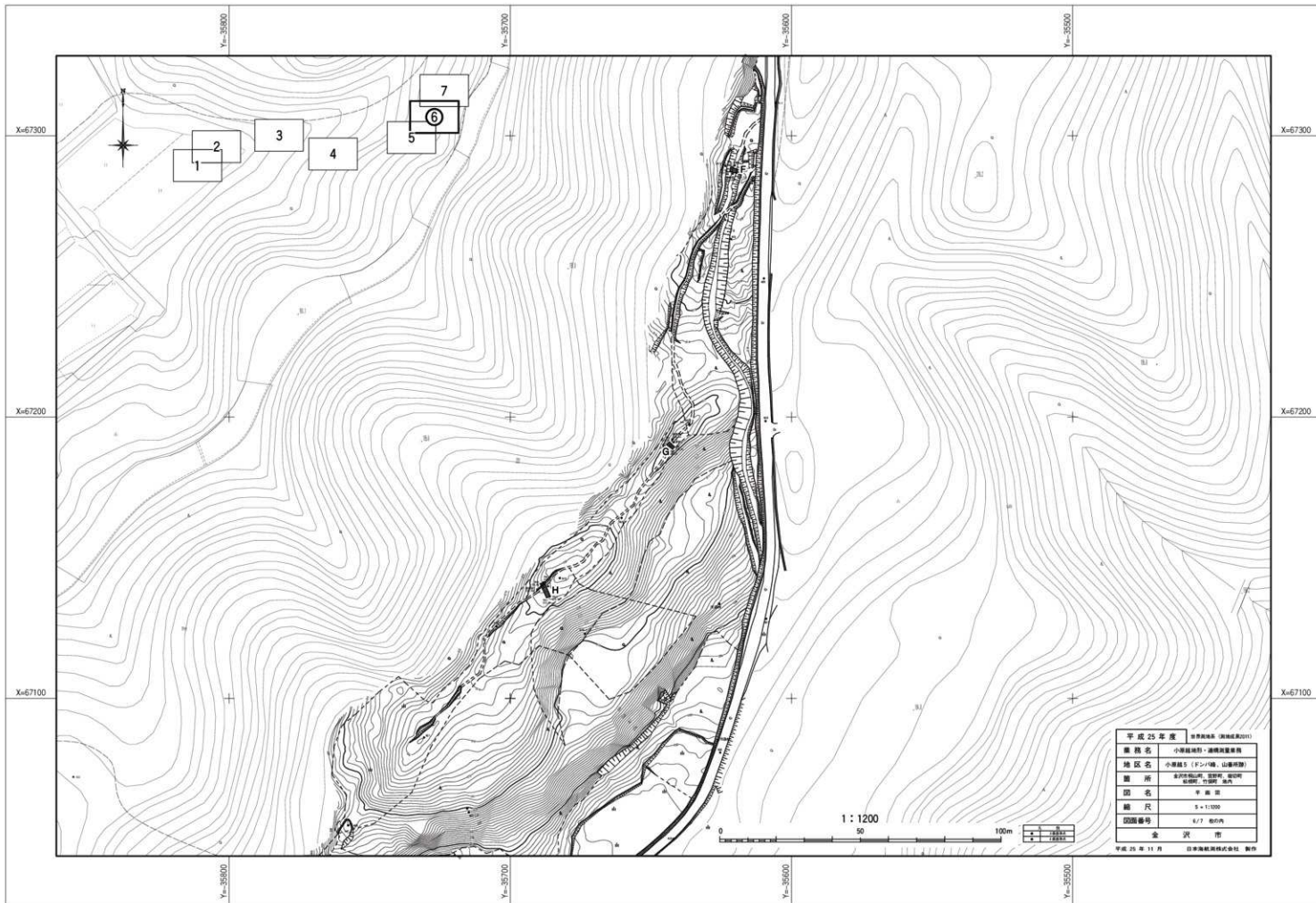


第30図 遺構・地形図(4) [S=1/1,200]



平成 25 年度	世界地図集 (海産局第211)
業務名	小津越橋形・濃尾湖調査業務
地区名	小津越 5 (F-1/橋、山邊河津)
箇所	長野県塩尻市、塩尻市、松本市、 松本市、松本市、松本市
図名	平 尾 湖
縮尺	S = 1:1200
図面番号	S/J 他管内
金 沢 市	
平成 25 年 11 月 国土情報株式会社 製作	

第31図 濃橋・地形図 (5) [S=1/1,200]



平成 25 年度	都市計画課 (測量課)
業務名	小規模地形・遺構調査業務
地区名	小原路 5 (F-1線、山邊停留所)
箇所	皇宮御所、皇居、皇明 皇宮、皇明、皇宮
図名	平面図
縮尺	S = 1:1200
図番	6/7 他区内
作成	金沢市

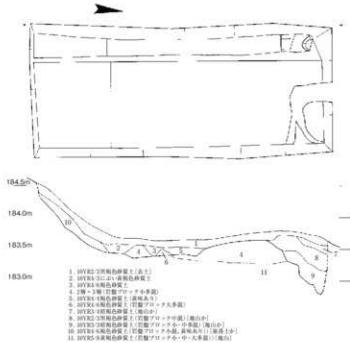
平成 25 年 11 月 国土情報株式会社 製作

第32図 遺構・地形図 (6) [S=1/1,200]

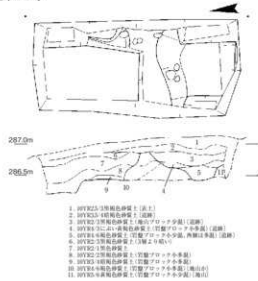


第33図 濃橋・地形図 (7) [S=1/1,200]

Aトレンチ



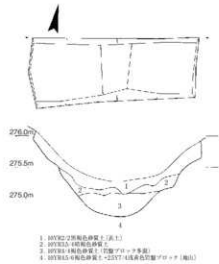
Bトレンチ



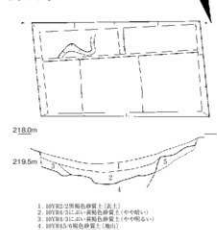
Cトレンチ



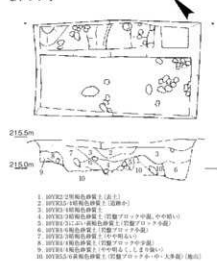
Dトレンチ



Fトレンチ

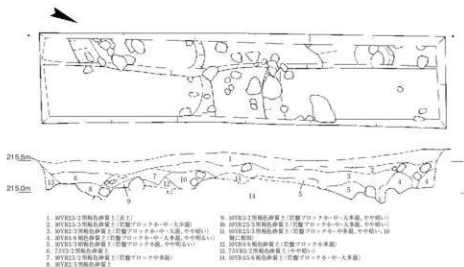


Gトレンチ



第34図 A・B・C・D・F・Gトレンチ [S=1/60]

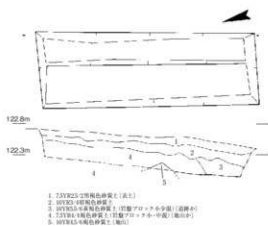
Hトレンチ



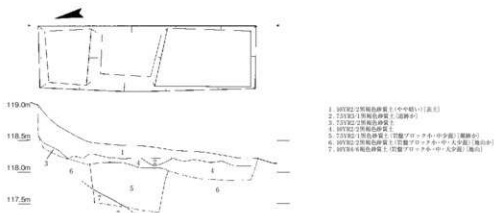
Iトレンチ



Kトレンチ



Jトレンチ



第35図 H・I・J・Kトレンチ [S=1/60]

第6章 自然科学分析

第1節 松根城跡検出土壌の花粉化石とプラントオパール分析

森 将志 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

石川県金沢市と富山県小矢部市の県境付近には、加越国境城郭群と呼ばれる山城群が築かれている。松根城はその城郭群の1つで、砺波丘陵の最も高い尾根筋である標高308mの山頂部に造成されている。松根城は平坦面や切岸、堀切、横堀、土塁、櫓台、虎口などから構成されており、今回の分析では西側大堀切から堆積物が採取された。以下では、試料について行った花粉分析とプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて大型植物遺体分析も行われている(本章第2節参照)。

2. 試料と方法

分析試料は、天正12(1582)年頃の遺構と考えられている西側大堀切の覆土の6層と13層から採取された。6層は堀底の覆土で、堀を埋める際に入れた埋め土と考えられており、13層は堀部分の覆土で、堀切が機能していた時期の堆積土と考えられている。土相については、6層はにぶい黄色(2.5Y6/3)粘土で、根痕が観察され、褐鉄鉱による赤褐色を呈する部分もある。13層は黄褐色(2.5Y5/6)シルト質粘土である。これらの試料を用い、以下の手順にしたがって花粉分析およびプラント・オパール分析を行った。

2-1. 花粉分析

試料(湿重量約3~4g)を遠沈管にとり、10%酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行なった。また、保存状態の良好な花粉化石を選んで単体標本(PLC.1040~1047)を作製し、写真を第37図に載せた。図版に載せた分類群ごとの単体標本はパレオ・ラボに保管されている。

2-2. プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトールペーパーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行なった。また、保存状態の良好な植物珪酸体を選んで写真を撮り、第38図に載せた。

3. 結果

3-1. 花粉分析

検鏡の結果、2試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉14、草本花粉13、形態分類のシダ植物胞子2の総計29である。これらの花粉・胞子の一覧表を第3表に示した。表においてハイ

フン (-) で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して

入れてある。なお、今回の分析試料では、いずれも十分な量の花粉化石が得られなかったため、分布図は示していない。

両試料とも含まれる花粉化石の量が少なく、特に13層では花粉化石をほとんど検出できなかった。6層の樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属が最も多く産出しており、次いでブナ属が多い。その他ではタニウツギ属やハンノキ属、マツ属複雑管束亜属、サワグルミ属-クルミ属、トネリコ属などが産出している。草本花粉では、イネ科の産出が最も多く、次いでヨモギ属が多い。その他では、キク亜科やタンポポ亜科、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、オオバコ属などが産出しており、栽培植物であるソバ属の産出も見られる。

3-2. プラント・オパール分析 同定・計数された各植物のプ

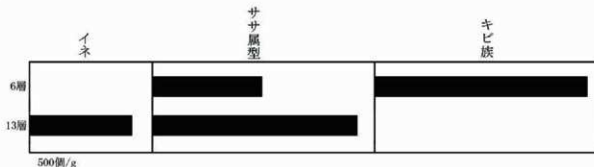
ラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から求めた試料1g当りの各プラント・オパール個数を第4表に、それらの分布を第36図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料1g当りの検出個数である。

第3表 産出花粉化石一覧表

学名	和名	6層	13層
樹木			
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	3	1
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	1	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	1	-
<i>Pterocarya</i> - <i>Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	3	-
<i>Garpinus</i> - <i>Ostrya</i>	クマシジメ属-アサダ属	1	-
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	7	1
<i>Fagus</i>	ブナ属	14	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	22	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1	-
<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	1	-
<i>Ericaceae</i>	ツツジ科	1	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	2	-
<i>Myrica</i>	タニウツギ属	7	-
草本			
<i>Gramineae</i>	イネ科	31	-
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	5	-
<i>Utriculariaceae</i>	クワ科	1	-
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> - <i>Echinochaetum</i>	サナエタデ節-ウナギツカミ節	3	-
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1	-
<i>Chenopodiaceae</i> - <i>Amaranthaceae</i>	アカザ科-ヒユ科	1	-
<i>Thalictrum</i>	カラマツソク属	1	1
<i>Brassicaceae</i>	アブラナ科	1	-
<i>Apiaceae</i>	セリ科	-	1
<i>Plantago</i>	オオバコ属	2	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	13	3
<i>Tubuliflorae</i>	キク亜科	6	-
<i>Liguliflorae</i>	タンポポ亜科	6	1
シダ植物			
emulate type spore	単条溝胞子	4	1
trilate type spore	三条溝胞子	6	-
Arboreal pollen	樹木花粉	65	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	71	6
Spores	シダ植物胞子	10	1
Total Pollen&Spores	花粉・胞子総数	146	10
Unknown pollen	不明花粉	2	3

第4表 試料1g当りのプラント・オパール個数

層位	イネ (個/g)	ササ属型 (個/g)	キビ族 (個/g)
6層	0	1,500	2,900
13層	1,400	2,800	0



第36図 松根城跡における植物珪酸体分布図

2 試料から検出された機動細胞珪酸体は、イネとササ属型、キビ族の3種類である。イネ機動細胞珪酸体は13層から検出されており、1,400個である。ササ属型機動細胞珪酸体は両試料で検出されており、6層で1,500個、13層で2,800個である。キビ族機動細胞珪酸体は6層で検出されており、2,900個である。

4. 考察

今回の分析試料は花粉化石の含有量が少なく、植物珪酸体の産出量も比較的少ない。西側大堀切の6層の花粉化石の含有量が少ない理由については、根痕や褐鉄鉱の存在が手掛かりを与えてくれる。すなわち、根痕の存在は堆積物の上面における植物の繁茂を示唆しており、褐鉄鉱の存在からは堆積物が酸素に晒されていた環境が推測される。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され消失してしまう。今回の試料については、根痕や褐鉄鉱の存在から堆積物が酸化的環境に晒されていた可能性が考えられ、酸化的環境であったために、花粉化石が分解、消失してしまったと思われる。あるいは、埋め土が一気に大堀切に投げ込まれたために、花粉や機動細胞珪酸体が入り込む余地がなかった可能性なども理由として考えられよう。ただし、13層については上記の条件がいずれもあてはまらず、花粉化石および機動細胞珪酸体の産出が少ない明確な理由は不明である。少ないながらも6層から産出した花粉化石群集および植物珪酸体から遺跡周辺の古植生を以下のように推定した。ただし、6層は大堀切の埋め土であるため、6層から産出する花粉化石群集および植物珪酸体群集は、人為的な影響を受けている可能性がある点を断っておく。

6層で最も多く産出しているのがコナラ属コナラ亜属であり、次いでブナ属の産出が多い。よって、山城周辺にはコナラやブナなどからなる落葉広葉樹林が広がっていたと思われる。また、タニウツギ属の産出が見られ、森林の低木層を構成していたであろう。プラント・オパール分析ではササ属型機動細胞珪酸体が産出しており、山城周辺に広がる落葉広葉樹林の下草としてミヤコザサのようなササ属型のササ類が生育していたと思われる。また、湿地林要素のハンノキ属やトネリコ属の産出が見られるため、沢沿いなどの水分条件の良い場所、あるいは山裾の低地などに生育していたであろう。草本花粉ではイネ科が最も多く産出しており、次いでヨモギ属が多い。その他ではキク亜科やタンポポ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、オオバコ属などが産出しており、こうした草本類が城郭周辺の開けた場所に生育していたと思われる。プラント・オパール分析ではキビ族の産出が見られるが、キビ族にはキビヤアワ、ヒエなどの栽培種と、エノコログサやイヌビエなどの野生種の両方が含まれる。機動細胞珪酸体の形態でこれらを区別するのは難しいが、今回の分析試料は山城の堀切から採取されており、山城周辺で植物が栽培されていたとは考え難く、6層から産出したキビ族機動細胞珪酸体は、城郭周辺に生育していた野生種からもたらされた可能性が高いと思われる。また、6層ではソバ属花粉の産出も見られるが、城郭周辺よりも山裾に近い場所で栽培が行われていたか、あるいは一般にソバ殻内には花粉が多く含まれるため、何らかの要因でソバ殻が堀切内に入り込んでいた可能性などが考えられる。

13層では花粉化石がほとんど産出していないため、詳細は不明であるが、6層と同じ時期の堆積物であれば、6層と同様な古植生が推測されよう。プラント・オパール分析では6層と同じくササ属型機動細胞珪酸体の産出が見られ、落葉広葉樹林の下草としてミヤコザサのようなササ属型のササ類が生育していたと思われる。また、13層ではイネ機動細胞珪酸体の産出が見られるが、山麓で稲作が行われていたか、あるいは何らかの要因で堀切に稲葉が入り込んでいた可能性などが推測される。なお、



1



4



6



8



2



3



5

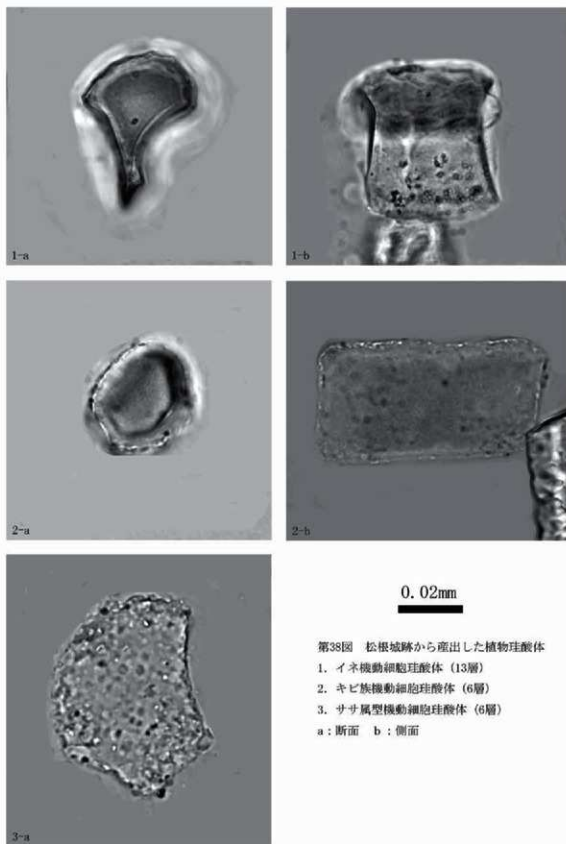


7

第37図 松根城跡 (6層) から産出した花粉化石

1. マツ属複維管束亜属 (PLC. 1040)
2. コナラ属コナラ亜属 (PLC. 1041)
3. ハンノキ属 (PLC. 1042)
4. ブナ属 (PLC. 1043)
5. ニレ属-ケヤキ属 (PLC. 1044)
6. タニウツギ属 (PLC. 1045)
7. ソバ属 (PLC. 1046)
8. カヤツリグサ科 (PLC. 1047)

0.02mm



第38図 松根域跡から産出した植物珪酸体

1. イネ機動細胞珪酸体 (13層)
2. キビ族機動細胞珪酸体 (6層)
3. ササ属型機動細胞珪酸体 (6層)

a: 断面 b: 側面

13層では非常に花粉の保存状態が悪いため、堆積物が酸化的環境に晒されていたと予測でき、大堀切内に水が滞水するような環境ではなかったと思われる。

第2節 松根城跡検出土壌の大型植物遺体と昆虫化石分析

佐々木由香・バンダリ スダルシヤン (パレオ・ラボ)

森 勇一 (金城学院大学)

1. はじめに

石川県金沢市と富山県小矢部市の県境付近には、加越国境城郭群と呼ばれる山城群が築かれている。その城郭群の1つである松根城跡は、砺波丘陵の最も高い尾根筋である標高308mの山頂部に築城されている。ここでは、松根城跡の大堀切から得られた大型植物遺体と昆虫化石を分析し、周辺の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて花粉分析とプラント・オパール分析も行われている(本章第1節参照)。

2. 試料と方法

分析試料は堆積物2試料である。試料は、天正12(1582)年頃の遺構と考えられている西側大堀切の覆土の6層と13層から採取された。6層は堀底の覆土で、堀を埋める際に入れた埋め土と考えられており、13層は堀部分の覆土で、堀切が機能していた時期の堆積土と考えられている。土相については、本章第1節を参照されたい。

それぞれの試料について、試料のほぼ全量にあたる250ccを計量し、最小0.5mm目の篩を用いて水洗した。その後、実体顕微鏡下で大型植物遺体と昆虫化石の抽出・同定・計数を行った。試料は、金沢市埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定した結果、大型植物遺体では木本植物のアカメガシワ種子1分類群、草本植物のキク科果実とカヤツリグサ果実の2分類群の、計3分類群が見いだされた。この他に、科以下の識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。

昆虫化石では、ヒメナゴゴムシの一種頭部とドウガネブイブイ脚節片、フトカドエンマコガネ

頭節片の、計3分類群が見いだされた。同定結果を第5表に示す。

以下に、産出した大型植物遺体と昆虫化石について記載する。

6層：同定不能炭化種実が少量得られた。

13層：大型植物遺体ではアカメガシワとキク科、カヤツリグサ属が各1点、昆虫化石ではヒメナゴゴムシの一種とドウガネブイブイ、フトカドエンマコガネが各1点得られた。

次に、産出した大型植物遺体と昆虫化石の記載を行い、第39・40図に写真を示して同定の根拠とする。

[大型植物遺体]

(1)アカメガシワ *Mallotus japonicus* (L. f.) Müll. Arg. 種子 トウダイグサ科

第5表 松根城跡から出土した大型植物遺体 (括弧内は破片数)

分類群	遺構 層位	西側大堀切	
		6層	13層
	水洗量(cc)	250	250
アカメガシワ	種子		(1)
キク科	果実		1
カヤツリグサ属	果実		1
同定不能	炭化種実	(15)	
ヒメナゴゴムシの一種	頭部		(1)
ドウガネブイブイ	脚節片		(1)
フトカドエンマコガネ	頭節片		(1)

茶褐色で、完形ならば基部がやや平たい球形。本来はY字形の小さな着点があるが残存していない。表面には隆線状突起が密生する。種皮断面の柵状組織は内側で屈曲する。残存長0.8mm、残存幅1.3mm。

(2) キク科 Asteraceae sp. 果実

黒褐色で、側面観は非対称の狭倒卵形。頂部はやや切形になり、冠毛着点の隆起がある。長さ2.8mm、幅0.9mm。

(3) カヤツリグサ属 Cyperus spp. 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、上側面観は狭倒卵形、断面は三稜形。頂部と基部が突出する。表面には微細な網目状隆起があり、やや光沢がある。長さ1.3mm、幅0.6mm。

[昆虫化石]

(1) ヒメナガゴミムシの一種 Pterostichus sp. 頭部:長さ2.0mm

黒褐色でつやのある、やや長い円筒形の頭部である。両複眼および触角などは脱落している。前頭溝は斜め後方へのびて複眼の側溝に達し、前方は頭楯に達する。これとは別に、頭頂部に浅い台形頂部に似た溝状紋を有する。こうした特徴より、ナガゴミムシ亜科のフトクビナガゴミムシ *P. thorectes* Bates に同定される可能性が高いが、ここではヒメナガゴミムシの一種にとどめる。ヒメナガゴミムシの仲間は他の虫を捕食し、ときに植物質をも食べる雑食性の地表性歩行虫である。平地にも山地にも棲むが、乾燥した地面を好む傾向があり、主に石の下などに隠れて生活する。

(2) ドウガネブイブイ Anomala cuprea Hope 腿節片:長さ1.0mm

光沢のある赤銅色の湾曲した体節片である。体節の全面に大型の円形に似た点刻が密布される特徴から、食葉性昆虫のドウガネブイブイに同定される。ドウガネブイブイは、自然林に生息することがなく、人間が植栽した果樹や畑作物の葉を食害する人里昆虫(森, 1999)である。主にカキやブドウ類などの樹葉を好んで食べる。

(3) フトカドエンマコガネ Onthophagus fodiens Waterhouse 頭楯片:最大幅2.8mm

つやのある黒色の頭部の前端部である。コガネムシ科などでは頭部前方部を頭楯といい、本標本では頭楯のほぼ全体が保存されている。前縁は裁断状で強く上反し、前頭頭楯縫合線は欠き、中央で鈍く隆起する。頭楯には横しわ状に粗大点刻が密布される。こうした特徴により、食葉性昆虫のフトカドエンマコガネに同定される。中央部に横隆起が認められないため、フトカドエンマコガネの♂個体と考えられる。本種は、エンマコガネ属 *Onthophagus* の中でも大型種に属し、新鮮な獣糞や人糞に集まる。日当たりのよい開けた森林から開けた土地で見られるが、現在の分布では西日本に多く、関東や東日本では分布は限られる(岡島・荒谷, 2012)。

4. 考察

天正12(1582)年頃の遺構と考えられている西側大堀切の覆土の6層と13層から得られた大型植物遺体と昆虫化石を検討した結果、6層からは同定可能な種実や昆虫が得られず、同定不能の炭化種実のみ少量得られた。6層は堀底の覆土で、堀を埋める際に入れた埋め土と考えられており、生の種実や昆虫が残存するような堆積環境ではなかったと考えられる。花粉分析とプラント・オパール分析の報告にもあるように、堆積物中には褐鉄鉱が多く含まれており、堆積物が酸素に晒される環境であったと推測される(本章第1節参照)。したがって、炭化種実であっても良好な状態では残存しにくかったと推測される。

13層からは、陽樹で落葉高木のアカメガシワ、草本のキク科とカヤツリグサ属が得られた。13層は



第39図 松根城跡西側大堀切から出土した大型植物遺体

スケール 1-3:1mm

1. アカメガシワ種子 (13層)、2. キク科果実 (13層)、3. カヤツリグサ属果実 (13層)



第40図 松根城跡西側大堀切から出土した昆虫化石

4. ヒメナガゴミムシの一種頭部：長さ2.0mm (13層)、5. ドウガネブイブイブイ属節片：長さ1.0mm (13層)、6. フトカドエンマコガネ頭覆片：最大幅2.8mm (13層)、7. フトカドエンマコガネの現生標本に産出昆虫を重ねて撮影

堀部分の覆土で、堀切が機能していた時期の堆積土と考えられている。アカメガシワは堀周辺の開けた場所、キク科は乾いた草地に生育していたと考えられる。カヤツリグサ属には多くの種があり、水湿地に生育する種もあるが、乾燥した草地や田畑に生育する種もあり、生育地は特定できない。このように、13 そうには大型植物遺体がほとんど含まれておらず、また確実な水生植物もなく、花粉やプラント・オパールもほとんど産出していない。したがって、大堀切は水が滞水するような環境ではなかったと推定される。

昆虫化石の分析では、乾燥した地表面を好み、主に石の下に隠れて生活するヒメナガゴミシの仲間が産出した。このため、遺跡周辺には乾燥した砂礫質の地表環境が存在したと考えられる。また、同じ分析試料より食植性昆虫の一種で、人間が植栽した果樹や畑作物などを加害するドウガネブイが見つかったことは、遺跡付近の植生がきわめて人為度の高い植生空間であったことを示している。カキやブドウなどの果樹が遺跡一帯に植えられていた可能性が考えられる。一方、地表性の食糞性昆虫で、獣糞や人糞などに来集するフトカドエンマコガネが含まれていた。本種は、日当たりの良い森林や開けた草原環境の指標種であり、遺跡付近の景観を復元するのに有効である。この時期、人糞はトイレ内に存在したと推定されるため、フトカドエンマコガネが依存した獣糞は馬糞の可能性が考えられる。

引用文献

- 岡島秀治・荒谷邦雄(2012)日本産コガネムシ上科標準図鑑, 444p, 学研。
 森 勇一(1999)昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史。歴博国際シンポジウム「過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史」, 国立歴史民俗博物館研究報告, 81, 311-342。

第3節 切山城跡出土火縄銃弾丸の理化学的分析結果

齋藤努、永嶋正春(国立歴史民俗博物館)

1. はじめに

金沢市埋蔵文化財センターより依頼のあった切山城跡出土の火縄銃弾丸について、蛍光X線分析法による主成分組成分析、表面電離型質量分析法による鉛同位体比分析を行った。

2. 資料

分析対象としたのは、加越国境域群の一つである切山城跡のHトレンチ北サブトレンチ整地土直上から出土した火縄銃の弾丸1点である。

3. 分析方法

3. 1. 主成分分析

主成分組成分析は、資料を非破壊のままで、エネルギー分散型検出器付蛍光X線分析装置(日本電子 JSX-3201M、Si(Li)半導体検出器)を使用し、大気中においてX線管球電圧50kVで分析を行った。分析の際は、スタンダードレス・ファンダメンタルパラメーター法によって検出された元素の濃度を求めた。励起X線のコリメーター径7mmφで広範囲の組成を、またコリメーター径1mmφで白色部と黒色部の組成を調べた。蛍光X線計数時間はライブタイム100秒、蛍光X線の総計数値は15000カウントである。

3. 2. 鉛同位体比分析

鉛同位体比分析は、刃を使い捨てにするマイクロナイフを使って表面から微少粉末を採取して分析試料とした。試料から、高周波加熱分離法で鉛を単離して硝酸溶液とし、鉛 200ng 相当量の試料溶液を分取して、リン酸・シリカゲルとともにレニウム・シングル・フィラメント上に塗布した。表面電離型質量分析装置 (Finnigan MAT 262) を用いて、フィラメント温度 1200℃ で鉛同位体比を測定した。

4. 分析結果

主成分組成分析によれば、3回の測定いずれからも、資料が鉛 (Pb) できていることがわかった。コリメーター 7 mm φ と、1 mm φ による黒色部の分析結果でわずかに鉄が検出されたが、1 mm φ による白色部分の分析結果には認められていないことから、これらは資料本来のものではなく、土に由来する成分と判断された。スペクトル図を、第 41～43 図に示す。

鉛同位体比分析の結果は第 6 表に示した。馬淵・平尾は弥生時代から平安時代までの多くの青銅器について鉛同位体比のデータを蓄積した結果、その変遷を下記のようにグループ分けできると報告している (馬淵・平尾、1982、1983、1987)。

A: 弥生時代に将来された前漢鏡が示す数値の領域で、華北の鉛。弥生時代の国産青銅器の多くがここに入る。

B: 後漢・三国時代の舶載鏡が示す数値の領域で、華中～華南の鉛。古墳出土の青銅鏡の大部分はここに入る。

C: 日本産の鉛鉱石の領域。日本産鉛は現在までのところ、飛鳥時代以降の資料にしか見出されていない。

D: 多鈕細文鏡や細形銅剣など、弥生時代に将来された朝鮮半島系遺物が位置するライン。

測定結果の表示には通常 207Pb/206Pb 比と 208Pb/206Pb 比の関係 (a 式図) が使用されることが多く、それだけで識別が困難な場合などには、必要に応じて 206Pb/204Pb 比と 207Pb/204Pb 比の関係 (b 式図) が併用される。今回の測定結果では a 式図のみで表示を行った。

上記のうち A、B、D の各領域とともに測定結果をあらわしたところ、いずれからも外れていた (第 44 図)。しかし、魯ほか (2006、2007、2008 a、2008 b、2009) によって、大分県大友遺跡のキリスト教関連遺物や鉄砲玉、熊本県田中城跡出土鉛玉、長崎県原城遺跡出土の鉛玉・キリスト教製品などの分析結果から見出され、その後、タイのソントー鉛山産であることが確認された「N 領域」(平尾ほか、2012) の中に含まれていることがわかった。

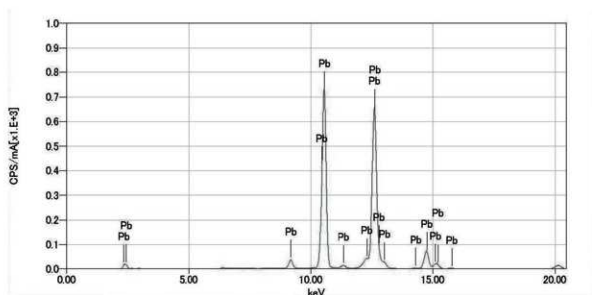
参考文献

- 齋藤努 (2001) 「日本の銭貨の鉛同位体比分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』86, pp. 65-129.
平尾良光、山口将史、Waiyapot Worakanok (2012) 「タイ ソントー (Song Toh) 鉛山の鉛」『鉛同位体比法を用いた東アジア世界における金属の流通に関する歴史的研究』科学研究費補助金・新学術領域研究研究成果報告書 (2009-2011 年度、代表: 平尾良光、課題番号: 21200028) pp. 187-210
馬淵久夫、平尾良光 (1982) 「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』68 (1), pp. 42-62.
馬淵久夫、平尾良光 (1983) 「鉛同位体比による漢式鏡の研究 (二)」『MUSEUM』382, pp. 16-26.
馬淵久夫、平尾良光 (1987) 「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比-青銅器との関連を中心に-」『考古学雑誌』73 (2), pp. 199-245.
魯視玟、後藤晃一、平尾良光 (2006) 『豊後府内 4』大分県教育庁埋蔵文化財センター, pp. 205-212

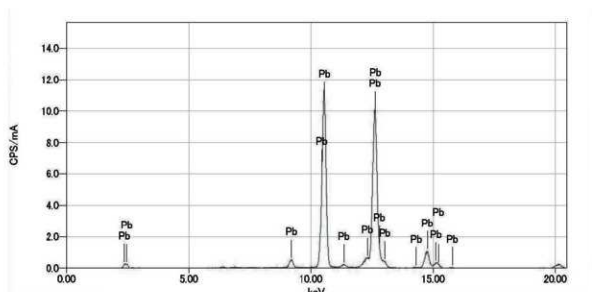
魯視球、後藤晃一、平尾良光 (2007) 『豊後府内6』大分県教育庁埋蔵文化財センター、pp. 303-309
 魯視球、後藤晃一、平尾良光 (2008a) 『豊後府内7』大分県教育庁埋蔵文化財センター、pp. 324-331
 魯視球、後藤晃一、平尾良光 (2008b) 『豊後府内8』大分県教育庁埋蔵文化財センター、pp. 291-298
 魯視球、西田京平、平尾良光 (2009) 「南蛮貿易と金属材料」『キリシタン大名の考古学』別府大学文化財研究所・九州考古学会・大分県考古学会編、pp. 131-141

第6表 切山城跡出土火縄銃弾丸の鉛同位体比分析結果

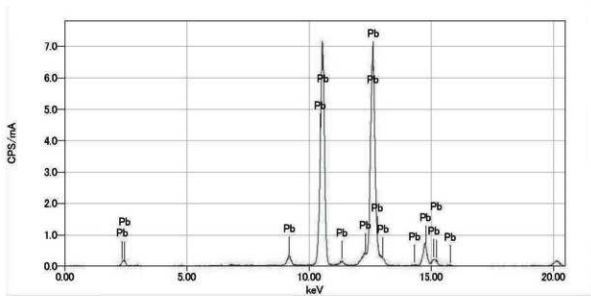
資料	分析番号	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{209}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{209}\text{Pb}$
火縄銃の弾丸	B12501	0.8632	2.1084	18.222	15.730	38.419



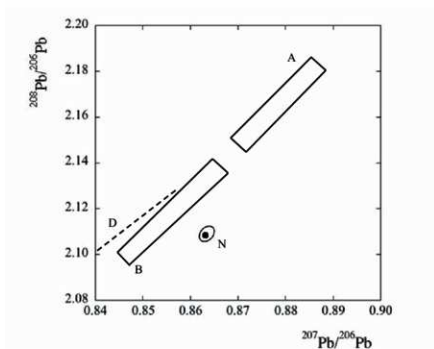
第41図 切山城跡出土火縄銃弾丸の蛍光X線分析結果 (コリメーター径7mm φ)



第42図 切山城跡出土火縄銃弾丸の蛍光X線分析結果 (コリメーター径1mm φ [白色部分])



第 43 図 切山城跡出土火縄銃弾丸の蛍光X線分析結果（コリメーター径 1mm φ（黒色部分））



第 44 図 切山城跡出土火縄銃弾丸の鉛同位体比分析結果（a 式図）

第7章 総 括

第1節 「前田・佐々戦争」に関する文献史料について

木越隆三（石川県金沢城調査研究所）

はじめに

平成23年度に始まった「加越国境城郭群と古道」調査に関わる中で、天正12・13年の北陸の政治情勢に関する文献史料を系統的に調べる必要を感じ、刊行史料を中心に調査した成果の一部をここに掲げたい。といっても、加越国境城郭群と古道指導委員会で発言をするため自主的に進めた不十分な調査にもとづくものであることをお断りしておきたい。

上記委員会では、系統的な文献史料調査の必要性が話題になっていたが、文献調査に関しては今回見送られ、今後の課題とされた。それゆえ文献史料から加越国境城郭群に言及するのは、本論のみということになったのは些か寂しい気もするが、すべては今後に期待したい。今回の埋文調査を踏まえ、更なる歴史的意義を考究するとき信頼に足る古文書・記録や関係する二次史料の系統的な収集が不可欠となろう。そのための基礎データの一つとしてこの寄稿が役立てば幸いである。

加越国境城郭群を理解する上で、天正12・13年の「前田・佐々戦争」がエポックとなることは、これまでの研究史を振り返れば多言は要らない。そこで、これまで閲覧した「前田・佐々戦争」に関する信頼のおける古文書・記録の一覧を末尾に掲げてみた。なぜこのような古文書一覧を作成したのか、その理由説明と合わせて、この古文書一覧の背景となる天正12・13年の政治情勢について、ここで解説し、今後に備えたいと思う。

1 「前田・佐々戦争」期の史料調査について

この報告書が調査対象とする松根城跡・切山城跡・小原越に関する文献史料は、本論末に掲げた「前田・佐々戦争」に関する古文書等一覧に止まるものでなく、鎌倉時代から近世初頭に至るまで広汎にわたる調査が必要である。また「加越国境城郭群」という概念を再検討し、対象となる城跡の分布範囲を議論すれば、能登・越中境の城跡も入れざるを得ず、金沢市域に限定した史料調査で済まなくなるであろう。さらに戦国期～近世初頭の古道や流通路と城郭との関連を解明するという視点も加えると、調査対象を小原越という不確定なルート筋に限定するわけにいくまい。まず中世～近世初頭の小原越のルートそれ自体を確定するという難問があり、加賀金沢―能登七尾間、金沢―越中守山間、金沢―越中富山間、金沢―五箇山間など、16世紀に政治上・経済上の拠点であった場所（都市的な場）相互の間を人・物資が移動した実態を調べることから始めなければならない。つまり、16・17世紀の加賀・能登・越中の陸上交通網を析出するような広汎な文献調査を実施しないと、小原越の意義は浮き彫りにできないであろう。それゆえ、対象史料の範囲は狭くとるべきでなく、大きな視野をもって調査対象を設定し、調査方法について議論を重ねる必要があるように思われる。

今回の調査で80点余の古文書・記録を「前田・佐々戦争」に関する基幹史料として厳選し末尾に表示したが、今回、発掘調査の対象となった松根城跡・切山城跡・小原越に言及した古文書は極めて限られ少なかった。ところが『金沢市松根城址緊急調査報告書』（金沢市教委・金沢市埋蔵文化財調査委員会、1979年）は、松根城・朝日山城に関する文献史料を30点以上網羅し掲載する。主に金沢市立玉川図書館に所蔵される近世中期以後の地誌、古城・古跡の来歴書上、雑記録等のほか、刊行された地誌・歴史書など、もっぱら二次史料ばかり載せている。参考のため代表的なものを列記す

ると以下の通りである。

(A) 加越能文庫所蔵史料 (金沢市立玉川図書館蔵)

*宝暦14年南森下村金右衛門著「河北郡山川旧跡等書上申帳」(「加越能山川旧跡旧蹟志」のうち)、*寛政13年田辺吉平編「加越能三州古城考」、*文化14年「城址書上申帳」、*「加越能古城考」「三州古城跡」(「古城考五種」のうち)、*吉岡宏編「加能城址集覧」、*増田半助編「加越能城跡略記」「奥村氏記録」「肯構泉達録」など16点

(B) 郷土史料 (金沢市立玉川図書館蔵)

「加越能古城城主之記」、「越中古城記」の2点

(C) その他刊行史料等

『越登賀三州志』『加能越金砂子』『加能越三州地理志稿』『重修加越能大路水経』、「亜相公御夜話」「末森記」「村井家伝」、『三壺閑書』『加賀志微』『越中志微』など10点余

A・Bの多くは地誌・地理書と藩の旧蹟調査に係る書上・旧記雑録であり、どれもよく似た地誌的記述がなされる。おそらく共通した底本があり、それに依拠し、それぞれ個性的に潤色を加えた雑記録とみてよい。執筆動機は藩からの依頼に応えたものもあれば、郷土史への関心や文人としての興味から書かれたものもあった。Cの刊行史料には「越登賀三州志」「三州地理志」のような秀逸な地理書・地誌が含まれ、軍記もあるが、史実検証という点ではどれも難点をもつので、天正12・13年もしくはそれ以前の史実を証明する史料としては利用できない。しかし、近世中期以後の庶民や地方文人・知識層が地元の城址をどのようなものとして認識していたか、彼らの歴史意識を知るうえで貴重な史料である。そのような視点からこうした史料を利用すべきであるが、そのため書誌的検討を進め、上記史料A・Bの中から良質のものを選ぶ必要がある。

浅野清『佐々成政関係資料集成』(新人物往来社、1990年)も玉石混交とはいえ、収集資料としては白眉のもので、上記の『金沢市松根城址緊急調査報告書』と並び「前田・佐々戦争」の重要史料集である。重要な古文書や記録も随所に盛り込み編年に編集した点は便利である。しかし、あまりに広く二次史料を収録しているため、どの史料が信頼できるのか迷う。掲載資料のうち明治以後の研究書・史料集と近世期の二次史料については、はっきり区別し、それぞれの資料の書誌や特性を明確にすることが課題ではないか。一次史料については、原本・写本の区別を明確にし、より信頼の置ける写本を載せるといった改善を行えば、史料集としての価値はもっと高まるし、江戸時代以後、人々が佐々成政に関わってどのような歴史意識を抱いてきたか検討可能となる史料集となろう。

近世初期に成立したとされる村井長明著「亜相公御夜話」(別名「陳善録」)や岡本慶雲著「末森記」についていえば、天正12・13年の前田・佐々戦争の細部を知るには垂涎の史料といえる。成立時期も慶長以前とみられるので、縦横に利用したい所であるが、それぞれの執筆動機を踏まえたうえで史料批判が必要である。すでに日置謙編『御夜話集』(石川県図書館協会 1934年)と『前田氏戦記集』(石川県図書館協会 1935年)で両書の翻刻と解説がなされ、それぞれの史料としての特性や著者についての説明がある程度なされている。日置によれば「亜相公御夜話」は「その記事の史的価値は極めて豊かであるが、畢竟座談であるから事実の年月などは書いてないことが多い」とし、「たどたどしいとでもいふべき筆路で、意味も亦徹底しない点があるが、素僕古雅誠に愛すべく、原本の面影を如実に伝える」という評価をしている。利家を中心に村井又兵衛・篠原出羽・寺西宗与などの古参の近臣が知辺談話した様子を筆記した素朴な記録、そのよすがを残す書物として評価している。但し知辺談話であり、記憶違いや面目を保つための誇張や作為を含むものと見なければならぬし、伝来する過程での潤色についても留意する必要がある。

これに対し日置の「末森記」に対する評価は厳しく、病気の老人（越前織田にて隠居中の岡本慶雲）の執筆記録としては「余りに能く整理安排せられて居るではないかといふのが余の疑惑である」とし、「慶雲手記のものが後人によって潤色された点が多い」とみる。ここに注目すれば、史料価値は「亜相公御夜話」つまり「陳善録」のほうにあるといえる。

青山克弥『「末森記」序説—「亜相公御夜話」との関係について—』は、日置以後本格的に両書の文献批判を行った貴重な成果である。青山は「末森記」と「亜相公御夜話」の詳細なテキスト比較を行い、「末森記」前半部は「亜相公御夜話」（もしくはその根拠となった聞書・覚書）に依拠しつつ、言葉を補い文章を整序しこれを文芸作品化させたものと論じた。後半については、著者である慶雲が集めた伝聞記録ないし戦場での覚書をもとに編纂されたとしたが、「亜相公御夜話」は修飾的記述が少ない素朴な聞書記録であるという日置の理解を承認している。しかし、「亜相公御夜話」の成立は「末森記」に遅れ、慶長中期以後とみられるのにたいし、「末森記」は「亜相公御夜話」に先行し文禄・慶長初期と判断されるので、「亜相公御夜話」編集の基礎資料とされた覚書・聞書類の存在を想定し、それらを参照し「末森記」原著が成立したが、のちに文芸的な修正が加えられた現在の伝本へ変化したと指摘する。

「末森記」「亜相公御夜話」や「奥村家伝」などの戦記・家譜類は、主題となる大名・武将を顕彰する役割を負い、記述態度に偏りがあることは従来からも指摘されているところであるが、それらに内在する文芸的性質を的確に考証したのは青山の重要な成果である。青山や日置の考証を踏まえ、軍記・実録等に対しこうした文献批判を重ねていく必要がある。文芸性の強い「末森記」に対し素朴な雑記録としての「亜相公御夜話」という評価を踏まえ、史料としてこれらを今後どう使うべきなのか、我々はそこを問われているのである。

こうした二次史料の記述内容を客観的に批判考証するには、確かな同時代の古文書・記録をまずは精選し収集することが重要で、それをもとに「前田・佐々戦争」の個別事実に即し粘り強く検証を重ねることが不可欠である。そのため今回、天正11～13年に時期を絞り信頼のおける古文書・記録に限定した古文書一覽を作成し、掲げた次第である。

なお『大日本史料』11編は天正12・13年の前田・佐々戦争に関する二次史料を数多く載せる点で貴重である。しかし、20件を越える二次史料が、一次史料とともに収録されており、『金沢市松根城址緊急調査報告書』『佐々成政関係資料集成』とともに、今後文献調査を行う際に必須の資料といえる。

2 「前田・佐々戦争」とはどのような戦いか

天正12・13年の加賀と越中での起きた対立・抗争を、本論であえて「前田・佐々戦争」としたのは、小牧・長久手戦争の北陸版という意味を強調するためであるが、他方で小牧・長久手戦争について、近年新たな視点から研究が進展しており、そのことも意識している。小牧・長久手合戦はこれまで、天正11年4月の賤ヶ岳合戦のあと、覇権樹立を目指す秀吉が天正12年4月、小牧・長久手で家康と戦い苦戦したが、同年11月に織田信雄・徳川家康と和睦し、天正13年7月に秀吉が関白に就任したのと前後して四国・越中を軍事的に制圧し政権基盤を固めたので、豊臣政権確立を促した戦い、と理解されてきた。しかし、最近の研究では、秀吉の覇権はそれほど簡単に樹立されたわけではなく、もつと苦渋に満ちたものであったこと、あるいは小牧・長久手合戦は東海地方に限定された局地戦ではなく、当該期の秀吉政権に内在する脆弱性ゆえに全国的に反秀吉勢力の軍事行動を誘発し、全国規模の大規模戦争という様相を呈していたことも指摘されている（藤田達生2001・2006など）。そ

れゆえ本論では小牧長久手戦争と呼ぶことにしたい。

この反秀吉行動の中核にいたのが徳川家康であり、家康とともに天正12年3月に反旗を翻した織田信雄は、同年11月に早くも秀吉と和睦し、家康や佐々成政との交渉役に徹し秀吉に利用されていくが、家康のほうは和平交渉を進めながらも不服従・非従属の姿勢を執拗に貫き、天正14年5月(朝日姫の入嫁約束)もしくは10月(家康上洛)まで秀吉政権にとって不安要因となり続けた。最終的に家康が秀吉政権に服属したのは天正14年5~10月とみてよく、家康の上洛によって両者の和解は確実なものとなった(『愛知県史(織豊2)』)。したがって、天正13年後半まで秀吉政権は不安要因を抱えたまま紀州雑賀一揆・長宗我部氏・佐々成政との戦いを展開したのであり、これら反秀吉勢力を各個撃破していくことで、家康を追い詰めていったのである。

天正13年8月7日、予定より3か月も遅れて越中平定に出陣したのも、佐々成政の背後に家康の影響が深く影を落としていたからである。最近の萩原大輔の一連の研究は、この点を鋭く問うものであり、参照すべき重要な成果といえよう。とくに佐々成政が天正12年12月、冬のザラ峠を越え浜松の家康と面会した意義について、従来は、家康との連携を拒否され空しく帰国したとする理解が広くなされていたが、そうではなく、成政と家康の連携は上杉氏や秀吉という共通の敵を意識し継続されたと主張する。したがって、佐々・徳川連合は越中平定が完了する天正13年まで有効に機能しており、家康が天正13年に実施した信濃真田氏攻めは佐々成政支援の意味があると指摘する。さらに佐々成政降伏後も秀吉と家康の緊張状態は続き、追加人質をめぐり熾烈な交渉が続いたという(萩原2010・2012など)。

のちに掲げた前田・佐々戦争の古文書リストを詳細にみていくと、萩原の主張はおおむね首肯できる。浜松から帰国した佐々成政は、おそらく秀吉方の失策に乘じ劣勢挽回の機会を窺っていたと推定できる。秀吉は然るべき調略や準備を怠ったまま越中出陣を強行すると、越中で手痛い反撃に遭遇すると予見し、前田利家には天正12年9月の末森の勝利以後も軽率な軍事行動を繰り返し戒め、自らの居城をしっかりと防衛することに専念するよう要請している。越前の丹羽長秀の指示に従い、秀吉が出陣するまで軽率な出撃を我慢することが秀吉・前田方の一貫した戦略であった。こうした消極策を取らせたのは、家康の戦略・調略の恐さを知悉した秀吉の才覚によるものであり、また佐々・家康連合の有効性のゆえとみて間違いない。

天正13年3月以後、紀州雑賀一揆平定、四国平定を実現し7月に関白に就任したあと、秀吉は越中出陣の周到な準備に取りかかり、大軍をゆっくり北国に動かし家康との交渉を進めた。家康から成政助命の嘆願が織田信雄を通して届いていたからだ。その様相は、古文書リストの62・65・66・72などを見れば明瞭である。こうして金沢に着陣した秀吉は、先手をつとめる前田勢などが越中に進軍し戦果をあげるのを確認しながら、富山城へと向かった。その結果成政は8月26日、ついに俱利伽羅峠に着いた秀吉のもとに来て剃髪し降伏した。こうして大きな戦闘もないまま佐々成政を屈服させたが、その後これが秀吉の戦争の基本パターンとなり、九州陣・小田原陣などに継承されていく。

しかし越中出陣のあと、秀吉は成政に厳しい成敗を執行せず、越中新川郡等の領地を持たせ、生かしたまま上方に送った。さらに天正15年に肥後国の領主に取り立てたのは、一面からみると不可解な行動をといえる。秀吉をあれほど苦しめた敗軍の将佐々成政をなぜ、秀吉は取立てたのであろうか。成政の才覚を認めたからという説もあるが、それだけでは説得力に欠けるように思う。その根本原因は、秀吉政権に内在する脆弱さにあると見なければならぬ。

つまり、家康がなお関白豊臣政権に完全に服していない天正13年後半から天正14年の前半、秀吉にとって佐々成政はなお対家康交渉のカードとして価値があったという点も考慮すべきであろう。

また秀吉の配下に入った織田信雄を、確実に秀吉の部下に留めておくためにも、信雄を信望し同盟した佐々成政を生かしておく価値はあったのであろう。

さて末尾に掲げた「前田・佐々戦争」に関する古文書一覧では、天正11年のものも一部採り、天正12・13年と年紀比定できるものに限って載せた。このなかで松根城跡・切山城跡・小原越が戦場となったことを窺わせるものは4点（文書選4～7）しかなかった。いずれも末森合戦があった9月11日前後の動静を知らせる史料であるが、とくに注目したいのは、「貝塚御座所日記」の次の一節である。

「九月六日来着、能州より参詣衆申趣ハ、越中国佐々内藏助色立ニ、コレハ一定也」

「◎加州ツハタノ城、今庄トヤラン以上三ヶ所落居、金沢辺迄放火云々、此説皆雑説也」

天正12年9月6日に和泉の貝塚に到着した能登からの参詣者が、佐々成政が軍を起こしたことを伝えたとするが、8月下旬に佐々軍が朝日山城を攻めた事件を示唆するものであろう。津幡城など三つの拠点が落ちたと述べたようだが、異なる情報も伝わっているので、この日記の筆写（宇野主水）は、様々な情報が錯綜しいずれが正しいのか判断がつかないと表明している。

「亜相公御夜話」などによれば、佐々が末森城を攻略すべく越中を出陣したのは9月7～8日頃とするので、9月6日に着いた能登の真宗門徒は佐々軍が末森に向け出陣したことについては知り得なかったといえる。それゆえ上記の「貝塚御座所日記」の記録は、8月下旬の佐々方の動静を語るものと見なければならぬ。おそらく成政は、末森出陣の前哨戦として8月下旬の朝日山城攻めに続き、俱利伽羅口・小原口など加越の主要な通路において放火などの軍事的挑発行動を展開させ、津幡方面あるいは山方から金沢近辺へゲリラ的に放火などを行ったとみてよい。その拠点の1つが松根城であったとみることは十分可能である。

しかし前田方は秀吉からの厳命もあり、軽率にこうした挑発に乗ることはなかった。小勢による挑発を排除することに専念し、深追いはしなかった。天正12年9月8日付秀吉書状（利家宛：史料選2）にみえる前田利家からの「9月4日状」は、上記のごとき成政の動静をつぶさに記し、秀吉の出陣を要請していたのであろう。これに対し秀吉は、佐々方が「山取以下」に及ぼうと軽率に出撃してはならないと釘をさし、防御ラインを狭くし堅固に城を守ることを強く求めた。ここで「山取」という文言が注意される。松根城など国境付近の山城を占拠し軍事行動をたくましくしたという意味に解される。しかし、前田方はあえてこれに反応せず防御に徹したと思われる。前田軍がなかなか挑発に乗らないのを確かめた成政は、俱利伽羅口から末森へ進軍する決断を固め、本軍を末森城に送り出し包囲したのである。この時点で利家は危機を察知し、末森城将を救うため急ぎ金沢城から出撃し、津幡に前田軍の諸将が集まり「御後巻」の出陣を決断した、というのが「亜相公御夜話」の語る所であるが、末森城を失うことは能登と加賀の連絡通路が遮断されることをも意味する。このことが利家の決断の背景にあったとみたい。しかし、それは秀吉の禁じた「率爾なる働き」であった。だが利家は、成政の挑発に応じ危機打開に積極的に行動すると決断したのである。ここまでは成政の計略通りであった。

しかし、周知の通り利家軍の奮戦により佐々成政は末森から軍を引かざるを得なくなり、成政の計略は狂う。そこで俱利伽羅口の鳥越城に拠点を構え、再び挑発行為を9月12日以後行ったようである。このときも松根城に拠る手勢が動いた可能性があるが、程なく成政は軍を引いた。なお9月中旬は、尾張でも秀吉が家康・信雄軍との決戦を画策しており、それを察知した家康・佐々軍は機先を制すべく、北国末森城で果敢な攻勢をかけたものとみられ、それが失敗に終わり、尾張の合戦も未発となり講和交渉へと展開していった。

これに加え丹羽長秀が越前に帰陣したので、前田方にとって10月以後余裕が生じた。さらに11月に秀吉と信雄の講和が成ったため、丹羽・前田方はいよいよ腰を据えて持久戦の体制を構える。末森での攻勢に失敗した佐々は、攻勢をかける機を失い、次の策を巡らすべく浜松に赴いたのであろう。その間、戦況は前田方に徐々に有利になったので、松根城の佐々軍の行動は沈静化したとみてよい。天正13年になり、前田軍が砺波郡の佐々氏拠点に奇襲攻撃を仕掛けたことがその証左となる。秀吉は3月に5月頃の越中出陣を唆しているが、その頃以後、松根城の佐々軍の行動力や影響力は大きく低下したとみてよい。天正13年6～7月になると松根城は明けになったとみてよいと思う。佐々軍が撤退したあと前田勢は難なく松根城を手に入れ、秀吉の出陣を待っていたのであろう。そのような状況は、下記の古文書リストによれば、遅くとも天正13年の6～7月に実現したとみてよい。

下記の古文書リストに「松根」「切山」といった城砦名を認めることできなかったが、上述のごとく「金沢辺迄放火」「山取以下」という文言がみえ、加越国境付近がそうした軍事挑発の震源地と推定された。このほか「小原口」という文言を載せる2点の古文書が確認できた(古文書リスト33・34:文書選6・7)。いずれも天正12年9月18日付書状で越後上杉方の武将から前田方に宛てたものである。成政が9月上旬におこした軍事行動については、どちらも「栗柄・小原口江相働由」と述べる。おそらく上記「貝塚御座所日記」で「津幡の城などを落とす」「金沢辺まで放火」と記した挑発行動や末森合戦のあとで切り返し「クリカラの上に陣取」「加州河北郡にて放火」した行動を指すのであろう。しかし、ここから直ちに松根城と切山城で戦鬪があったとみるのは早計である。佐々軍の主力はあくまでも末森から津幡・鳥越城の間を動くので俱利伽羅口が主戦場であった。従って俱利伽羅口周辺の前田・佐々軍の競り合いに呼応し、小原口でも小規模な衝突があったと推定するのが妥当であろう。

しかし、佐々成政側は末森での敗戦を隠すため、俱利伽羅口と小原口で騒々たる戦果をあげたと宣伝したはずで、越中東部、越後国境で行動していた武将たちは、この佐々方の情報とともに前田方からの末森堅守・佐々敗退の情報も合わせ聞き、俱利伽羅・小原口方面で佐々成政が軍事行動を行ったが前田方は堅固にこれを防いだと述べたのであろう。

「栗柄・小原口江相働由」という文言から小原口が俱利伽羅口とともに重要な通路であったことが窺えるが、俱利伽羅口・田近口・福光口など他の越中ルートとの比較も必要であろう。

今後さらに「加越国境城郭群」の歴史的意義を追究するには、天正12・13年の前田・佐々戦争とはどのような戦争であったか、より確実な史料をもとづいた検証が必要となろう。その際、注意すべきは、戦国・織豊期の大名・武将の発給書状は、往々にして事実と異なることをあえて書き、針小棒大に誇張することも多いことである。政治状況の打開や機軸転換として、あるいは自己の政治的アピールとして、そのような誇張や偽計が公然となされたのである。しかも無年記の書状・古文書が多いので、それぞれ、①古文書としての真偽判定と②年記比定、を精緻に行う必要があり、政治状況に応じて③書かれた内容の批判的吟味も当然必要である。

下記の古文書一覧では一応の年記推定がなされているが、完全とはいえないものもある。また古文書として真偽に疑問のあるものに×印を付け数点載せた。省いてもよかったが例示する意味であえて載せた。一次史料のリストではあるが、①②③などの史料批判が必要であることを、この古文書一覧から看取して欲しい。提示された古文書の語ることを鵜呑みにしてはいけないことを是非了解されたい。

近年、織豊期の政治史研究はとみに精緻になっている。とくに織豊期の大名・武将の発給文書は年記のないものが多く、年記比定の検証を誤ると大きな誤解が生じる。年記比定と真偽判定に関する研

究は日進月歩であり、いつまでも戦前刊行の『加賀藩史料』『加能古文書』に示された年紀や真偽評価に頼ってはいは十分の誹りをうけよう。

ここ20年ほどの間に、従来の水準を超える織豊期の史料集が刊行されるようになった。『七尾市史(武士編)』(瀬戸薫著「1章 前田利家・利政とその時代」)などはその代表であり、同書を参照しないまま『加能古文書』などに依拠するのは問題がある。また、近年刊行された『上越市史』『愛知県史(織豊2)』なども有益な史料集であり、参照されるべきものといえる。これらの刊行史料をもとに原本にあたるのがベストであるが、今回はそこまでは行っていない。主として『七尾市史(武士編)』『上越市史』『富山県史(史料編Ⅲ)近世上』『愛知県史(織豊2)』および『大日本史料』11編に依拠し、末尾の古文書リストをまとめた。また、付録として掲げた文書選は、古文書リストの中から、とくに今回の埋文調査にとって関連あるものを13点選んだものである。

結 び

小牧・長久手戦争期に秀吉に反旗を翻したのは、紀州の雑賀一揆・根来寺、四国統一中の長宗我部氏、越中の佐々成政、東海・甲信の徳川家康であったが、越後の上杉景勝は下越で新発田氏、北信濃で徳川氏と敵対関係にあり、佐々成政と上杉氏は同盟を模索してはいるが上杉氏の秀吉寄り路線は揺るがなかった。かといって上杉氏は前田氏・丹羽氏ほど積極果敢に秀吉方に属して行動したわけではなく、自立した大名として天正13年まで秀吉と一定の距離を置いていた。家康との対抗上秀吉に属するのが賢明だと判断した上杉氏は、天正14年ようやく秀吉政権への服属姿勢を明確にした。

このように全国に割拠する大名はそれぞれ、秀吉に服属すると最終決断するまでに、様々な選択肢をもち複雑な行動をしたが、その判断の根拠は情報である。前田利家も佐々成政もそれぞれ状況好転させるべく、様々な情報を発信するため、家臣に書状を託し各地に派遣した。今残るのは書状だけであり、口頭で伝えられたことはほとんど残っていない。遺構の語る事実と古文書・書状の語る複雑さ・奥深さを総合的に勘案し、無年紀文書を個別に批判的に読み込まないと、文献史料は正しく理解されない。遺構の理解にとって即座に役立つ史料は、数少ないが、これら全体を概観し、天正12・13年の加越国境で行われた戦争がどういふ戦争であったか認識したうえで、遺構・遺物を見ることはとても重要なことだと考える。

最後に本書の表題に掲げる「加越国境城郭群」とは何か、このことも今後検討していく必要があろう。仮に「天正12～13年の前田・佐々戦争の際に新設もしくは修築・増築された国境沿いの城塞群」と定義するなら、能登・越中境におかれた石動山城、荒山城、勝山城での軍事行動や、それに伴って残された遺構・遺物も含めて考察する必要がある。さらに言えば未森合戦のことも含め「加越国境城郭群」として検証すべきと考える。文献では荒山口など能登・越中国境の動向が小原口以上に頻繁に出てくるので、この点はとくに強調しておきたい。

また今後本格的な文献調査を行うにあたり、当然のことながら、①南北朝期の応安2年、桃井氏が松根城に陣をしき吉見氏奪われた事件(得田文書)、②長享2年に越智伯善が松根に陣取りしたという伝承、③天文19年に佐佐統光が松根城の洲崎兵庫に援軍を要請したこと、④天正8年に柴田勝家が「松根」城を攻略したとする軍記記録なども、調査対象とすべきである。

【主たる参考文献】

岩澤憲彦 1966『前田利家』吉川弘文館
奥田淳爾 1983『佐々成政』桂書房

- 堀 宗夫 1992 「加越国境佐々系陣城の形態」『越中の中世城郭』2号
- 高岡徹 1997 『越中中部における戦国史の展開』宮越印刷
- 藤田達生 2001 「豊臣国分論二 北国国分」『日本近世国家成立史の研究』校倉書房
- 佐伯哲也 2005 「天正十二・三年における佐々成政の動向について」『富山史壇』148号
- 青山克弥 2006 「『未森記』序説—「亜相公御夜話」—」『加賀の文学創造 戦国軍記・実録考』勉誠出版（初出 2000年）
- 藤田達生編 2006 『小牧・長久手の戦いの構造 戦場論（上）』岩田書院
- 藤田達生編 2006 『近世成立期の大規模戦争 戦場論（下）』岩田書院
- 藤田達生 2007 『秀吉神話をくつがえす』講談社現代新書
- 萩原大輔 2010 「関白秀吉越中出陣に関する基礎的考察」『富山史壇』162号
- 萩原大輔 2012 「秀吉越中出陣をめぐる政治過程」『富山史壇』167号

第7表 天正12・13年「前田・佐々戦争」に関する古文書等一覧 85点

発給年月日	古文書名(宛名)	内容	出典	(コメント)
1 (天正11)4月28日	羽柴秀吉書状 (佐々内藤助宛)	越後の敵につき相談したい。取次は佐々成政に定めたい。蒲れば秀吉から軍勢を急度出す。彼国(越後)の事は成政の覚悟に任せらる。	佐々木信綱氏所蔵文書、『大日本史料』11編4、『富山県史(史料編Ⅲ)』近世上	山田隆が天下を平定するに際して、佐々木信綱氏に成政の覚悟を問うたという伝説がある。成政はそれに応じた。成政はそれに応じた。
2 天正11年5月11日	可児才蔵筆文日記抽書	未森へ奥村助右衛門が入城する。祝儀あり。	加能越古文書39、『七尾市史(武士編)』	
3 (天正11)6月17日	佐々成政書状 (新柴田重家宛)	新たな政權において成政が越後の取次役であることを示し、上杉景勝に敵対し奮戦することを称賛する。景勝とは別に織田信雄政権に取り次ぐことを伝える。秀吉は4月21日、柴田勝家を討ち果たし、金沢に着陣したので、成政も秀吉と面会し入魂の間附である。さて伊勢国司になった織田信雄は信長の後継として「天下」を治めようとする。秀吉は万端指南するものであると囁伝する。	魚津市照領寺蔵、『富山県史(史料編Ⅲ)』近世上	
4 (天正11)9月晦日	佐々成政書状(前田利長宛)	利家留守中の見舞いとして、使者を送り、もしこ元にて似合式の御用があれば承る。卿も殊意なきように。	岩田佐平氏蔵、『富山県史(史料編Ⅲ)』近世上	
5 (天正11・12)10月16日	徳川家康書状写 (不破彦三直光宛)	佐々成政へ好みを通じたこと結構である。今後戦功を尽くし信雄に忠節を示せば取り立てる。	運放足蔵、『七尾市史(武士編)』、『大日本史料』11編9、『富山県史(史料編Ⅲ)』近世上	
6 天正12年2月5日	前田利家印判状写 (石川郡所々百姓中宛)	金沢城普請について、石川・河北両郡から誰の知行であろうと、家並役として8日の人夫を催促する。	武竹文庫『黒題 旧記』、『七尾市史(武士編)』	信雄は信雄は信雄の軍臣
7 (天正12)3月7日	織田信長書状 (香宗我部親泰宛)	(信雄書状の前状)信雄方から長宗我部氏に、秀吉の悉の仕置に反対した信雄が決起したことを伝え、北国の情勢について越前・能登・越中いずれも残らず信雄の御意次第ごまつたと吹聴した。	香宗我部家伝証文4、『七尾市史(武士編)』99	信雄は信雄は信雄の軍臣
8 (天正12)3月13日	羽柴秀吉書状写 (丹羽長秀宛)	長久手の戦場からの書状。前田利家は、背後で一段が起きて擾乱されるようになったことがあっても「毎金沢の物積」を抱えることに専念し、軽々しく合戦に及ばぬよう丹羽長秀ら両人から申し付けよ。	加能越古文書41、北越遺文など、『七尾市史(武士編)』104	信雄は信雄は信雄の軍臣
9 (天正12)3月29日	丹羽長秀書状(秀吉宛)	秀吉の和衷での戦勝を祝し、家康・信雄方の敗北を確信すると述べたあと、北国の情勢は静慮であり、前田利家方から長宗我部(一千金)を送ることを伝え、佐々成政も家来の佐々平左衛門が参陣する予定であると告げる。前田・佐々の援軍が越前を通過したときに人教等知らせる。	前田青徳会、『七尾市史(武士編)』	佐々成政はまだ秀吉の軍臣に属している。
10 (天正12)6月7日	羽柴秀吉書状写 (前田利家宛)	利家からの陣中見舞(5日状)にたいし、尾張竹鼻城での不破源六の圍城のことを知らせ、そちらが静慮なら留守を長く申し付け、2日程度数騎で来てほしいが、わざわざ来なくてもよいと返信。	加能越古文書40、『七尾市史(武士編)』	佐々成政は信雄の軍臣に属するが、不破源六は信雄の軍臣に属する。

11	(天正12)6月27日	上杉景勝書状(本庄繁長宛)	越中表の備は秀吉と申し合わせしており、先月中旬より佐々成政が「上越市史」563頁、編年史料2950	石岡美術館所蔵、『新潟県史』563頁、『上越市史』古代・中世編992、編年史料2950	長尾氏は佐々成政に降参せず
12	(天正12)8月20日	織田信張書状(香宗我部親泰宛)	北国では越中の佐々が信雄方内に通し優勢である。早くも能登を破ったと連絡があり越前・能登は一切動けないであろうと、信雄方の地位を確立。	佐々成政の居城方への内通情報に関する見	
13	天正12年8月28日	前田利家印判状写(青木善四郎宛)	石動山城の青木善四郎に兵糧米として知行給与(たね、ころさ村の内半分)	松雲公採集遺稿類纂、『七尾市史(武士編)』	前田利家の戦いで無損城を破る
14	(天正12)9月5日	前田利家黒印状(奥郡所々百姓中宛)	越中から攻撃の恐れがあるゆえ能登奥郡の村々に警戒をよびかけ、村の若者に馳走すれば知行行人への取立を約束。奥郡奉行として原田又右衛門を派遣した。	前田青徳会、『七尾市史(武士編)』215	前田利家の戦いで無損城を破る
15	(天正12)9月5日	前田利家書状(瑞泉寺頭秀宛)	佐々成政が秀吉に逆意を企てたので、瑞泉寺頭秀に京都から一騎も早く帰国するようにがす。秀吉も承知の下国であり、今後も御身上に相違はない。	瑞泉寺文書、『富山県史(史料編Ⅱ)近世上』	前田利家の戦いは前田方として戦中下向
16	天正12年9月6日	貝塚御盛所日記:天正12年条	9月6日に能登から和泉貝塚に到着した能登からの参詣者によるものと、佐々成政が軍勢を動かしたという。加賀の津幡城など3ヶ所が攻撃され、金沢辺迄放火したなど、不確実な伝聞情報飛び交う。	真宗史料集成	前田利家の攻勢に能登北加賀の情勢
17	(天正12)9月8日	羽柴秀吉書状写(前田利家宛)	利家からの9月4日状を今拝見。尾張では信雄・家康方から入賀飛出の懸望があり思案中である。いずれにしろ9月20日頃に開陣となり丹羽長秀は帰国する。越中出陣について丹羽と相談し決めている。それゆえ成政が山取以下仕候として粗忽な攻撃は無用である。おちおち備え(防)御線を縮小し、丹羽が突陣するのを待つことが肝要である。もし待たずに動けば重大な失態である。誤りを犯すべきではない。	前田青徳会、『七尾市史(武士編)』217	前田利家の戦いは、越中北加賀に降参した上、尾張の懸望に際しては、尾張の兵に降参する。成政の疑念に際しては、降参する
18	(天正12)9月8日	羽柴秀吉書状写(前田利勝宛)	佐々成政が加越国境に出たので、その方角が精進こめ働いたのは結構なことである。尾張方面は丈夫であるから援軍は不要である。丹羽は15日もすれば開陣にて、北国表に出陣するので、失態なきよう粗忽な動きを決してははいけない。	前田青徳会、『七尾市史(武士編)』218	前田利家の戦いは、越中北加賀に降参した上、尾張の懸望に際しては、降参する
19	天正12年9月11日	多聞院日記:天正12年9月22日条	去11日、佐々内藤介と前田又左衛門が合戦とんだが「越中ノ衆」が軍了115人の大替分の首を取り、首注文の写を下げた。	増補越中史料大成、『七尾市史(武士編)』	越中の戦利は上方に送る
20	天正12年9月12日	貝塚御盛所日記:天正12年条	佐々が裏切り秀吉と敵となった。そこで前田と大合戦があった。9月9日と11・12日に合戦があり佐々が打負り、良き重兵10人余、討死に千計といふ。佐々は切り返し御加賀の上に出陣取り、河北郡を放火せしめたと説くが説々不同で確かならず。	真宗史料集成、『七尾市史(武士編)』	越中の戦利は、上方に送る。前田利勝、河本郡で佐々方と合戦
x	(天正12)9月13日	前田利家書状(柴州=秀吉宛)	9月9日、成政が木森城を急に取り巻いたので、11日援軍を派遣し成政軍を打ち破った。討ち取った首注文とともに連絡した。同じ頃、七尾の味方は佐々方の荒山城を攻め取った。真偽に疑問。	昭和48年1月(弘文書古文書目録)	

21	(天正12)9月13日	前田安勝書状券 (千秋主殿助宛)	末森勝利で運を聞いたこと、利家の尾山への凱陣を喜ぶ。	千秋文書、『七尾市史(武士編)』『末森城報告書』(原本不明)
22	(天正12)9月14日	前田利家書状写 (青木普四郎・大屋助兵衛宛)	石動山城の青木・大屋からの敵将撤退の連絡を戒め、龍巻を戒める。神保・寺島が撤退し越中の有力者は討ち取ったので、聊爾の出陣は無用である。	松雲公採集遺稿類纂144、『七尾市史(武士編)』『末森城報告書』
23	(天正12)9月14日	前田利家書状写 (青木普四郎宛)	石動山城の青木に、鞍馬見馬の書状の礼をい、油断なく城を守り備し、龍巻を戒める。	松雲公採集遺稿類纂144、『七尾市史(武士編)』『末森城報告書』
24	(天正12)9月14日	前田利家長書状写 (青木普四郎宛)	末森城が包圍され本城のみ残るといふ連絡を受け、父利家とともに駆け付け、大將11人主か千以上の首を討ち取った。石動山城も、大夫に抱えられ、たれどもである。	松雲公採集遺稿類纂144、『末森城報告書』
25	(天正12)9月14日	寺西秀長書状 (千秋主殿助宛)	堅固に城を抱え、利家縁が後巻なきに御手附である。城中も併応し働いたことを称賀する。	千秋文書、『七尾市史(武士編)』『末森城報告書』
26	(天正12)9月15日	前田安勝書状券 (奥村助右衛門・千秋主殿助宛)	七尾城の安勝が末森の戦勝を喜び、そちらの普請での辛労をねぎらう。	千秋文書、『七尾市史(武士編)』『末森城報告書』(原本不明)
27	(天正12)9月15日	富田景政書状 (千秋主殿助宛)	昨日、書状を持たせた飛脚が帰らぬので、再度したためる。その城を堅固に誇りどめ天下に隠れなき手附であったと称賀。	千秋文書、『七尾市史(武士編)』『末森城報告書』
28	天正12年9月16日	前田利家判物写 (奥村助右衛門宛)	未守龍城に比類なき働きあり、加増として千依扶助し与力30人付与する。	『増訂加能古文書』『奥村文書』、松雲公採集遺稿類纂、加能越古文書、『七尾市史(武士編)』
29	天正12年9月16日	前田利家判物 (千秋主殿助宛)	未守龍城に比類なき働きあり、加増として千依押水の内にて扶助する。	千秋文書、『七尾市史(武士編)』『末森城報告書』
30	(天正12)9月16日	羽柴秀吉書状(前田利家宛)	末森の勝利と七尾城の安勝による荒山城・鶴山城奪取の情報を得てその勝利を称賀。佐々成政は俱利伽羅山に逃げたと聞いた、が俱利伽羅に長く留まれないと察する。尾張の様子を述べたあと、丹羽は20日頃越前に帰るのでよく相談し御本意を遂げるように。	前田青嶺会、『七尾市史(武士編)』232・「末森城報告書」
31	(天正12)9月16日	前田右近秀次書状 (千秋主殿助宛)	津幡城の前田右近が、鳥越城になお居陣する佐々勢も近いうちに撤退するとの見込みを報せ、末森での御普請入精をいたわる。	千秋氏所蔵、『七尾市史(武士編)』233・「末森城報告書」
32	(天正12)9月17日	前田利勝書状 (千秋主殿助宛)	佐々成政の攻囲にたいし未守に龍巻し比類なき働きあり、利家も満足しているご軍功を称揚し感謝する。	千秋文書、『七尾市史(武士編)』『末森城報告書』

33	(天正12)9月18日	須田清親書状写 (前田利家宛)	初めに書状を送る。佐々成政が(関白に)逆心せしめ、俱利伽羅・小原口に出陣し働いたの由。かねて首尾を申し合せてあった。景勝がよ上に後詰として越中境の要害に我らははし語し放火した。景勝が直書で申し入れたが、近日越中口に進軍する。今度の能登・加賀の戦い(末森合戦)は堅固な備えで誠に勇敢であった。加賀国と上杉方が相談し連携するならば佐々成政を討ち果せませしむ。	青木長之助所蔵文書、『新潟県史』4099、『上越市史』編年2977、『七尾市史(武士編)』	小原口にて佐々成政が景勝に働いたの由
34	(天正12)9月18日	神保昌国・斎藤信富・寺島信鎮等5名連署状 (前田安勝宛)	初めに書状を送る。佐々成政が俱利伽羅・小原へ出陣し働いたの由。我らと首尾を申し合せて御後詰として越中境の要害に須田・瀧親とともに押し寄せ放火した。景勝も近日出馬する。今度の能登・加賀の戦い、堅固な備えで誠に勇敢であった。加賀と我らが相談連携すれば佐々成政の滅亡は眼前である。よって前田利家殿への取り成しを頼み奉る。	前田青徳会蔵、『血戦足徴一』、『上越市史』編年2978、『七尾市史(武士編)』	前田口にて佐々成政が景勝に働いたの由
35	(天正12)9月19日	前田利勝感状写 (奥村助右衛門宛)	佐々成政の攻囲にたいし未守に籠城し比類なき働きあり、利家も満足していること軍功を称揚し感謝する。	松室公孫集遺稿類書144、『七尾市史(武士編)』『末森城報告書』	
36	(天正12)9月23日	織田信雄書状写 (保田安政宛)	織田信雄は、北国で前田が敗北したことを紀伊藩賀の土橋氏に知らせる。佐々成政の次弟に佐々勢が七尾城を包囲すると報せ、和泉表へ出陣し、離勢勢に互回することを促す。	佐久間軍記、『七尾市史(武士編)』	
37	(天正12)9月隔日	織田信雄書状 (土橋平亦種治宛)	織田信雄から秀吉との和睦交渉が進展していることを告げたあと、北国では意外の蜂起がありあったので、羽柴秀吉は尾張・伊勢も軍を引き取った。それゆえ紀州表も油断なきように。この旨を諸方に広く申し触れるように。	紀州藩賀：土橋文書、『七尾市史(武士編)』239	
38	(天正12)10月5日	前田利家書状(直江兼続宛)	丹羽長秀が9月28日尾張より越前に凱旋したので、近日加賀に出陣する。その他2万金が出陣する。越後の先手勢が越後国境の境城(宮崎城)外圍に放火し虎眼迄の由上りしかと承った。御手柄、結構である。この節なのでよく相談し佐々成政退治は目前のごとくである。	保阪清治田蔵文書、『新潟県史』4333、『上越市史』古代・中世編994、編年2981、『七尾市史(武士編)』241	保阪清治は奥平・前田利家の優勢を占し、諸方に連絡出す
39	(天正12)10月25日	本願寺御印書 (風至郎坊主衆・惣門徒中宛)	越中と能登との戦争につき、前田殿は頼如様とどくに入魂なので粗略にしてはならない。もし一戦への誘いがあったらも決して味方してはならない。	阿波本誓寺文書、『七尾市史(武士編)』241	
40	(天正12)10月26日	前田利家黒印状 (青木普四郎・大黒助兵衛宛)	荒山城に渡る佐々勢の監視を厳しく命ずる。今夜あたり佐々軍は撤退するかもしれないので、もし撤退と分れば火を付け合図せよ。それまでもに援軍を出し、合図とともに新砲を撃て。油断なく荒山口に人数を付ける。石動山には前田方が居り、勝山口は前田方の高島定吉が抑える。	前田青徳会蔵、『七尾市史(武士編)』	前田口にて加藤景春

41	(天正12)10月28日	羽柴秀吉書状 (丹羽長秀宛)	東美濃、伊勢での戦況優勢を伝え、能登の取手普請のため備く前田利家方へ援軍に出ることである、とくに「加賀表にて城普請・番以下」をしっかき申し付けることが肝要である。この書状を丹羽から前田に見せる。	藩江文書、『七尾市史(武士編)』	羽柴は能登での普請を急ぐ。加賀の動向は城の備えと密
42	天正12年11月6日	前田利家判物写 (高桑兵衛宛)	越中沢川の高桑兵衛、沢川田畑兵衛に扶持や持山を安堵し味方に付ける。	松雲公採集遺稿編第144、『七尾市史(武士編)』247	
43	(天正12)11月8日	前田利家書状写 (菊池右衛門入道禅敬宛)	越中阿尾城主菊池武勝に前田方への寝返りを誘う。	松雲公採集遺稿編第145、『七尾市史(武士編)』『富山県史(史料編Ⅲ)』近世上』	
44	(天正12)11月11日	前田利家黒印状 (石動山番手・次節)	10日交代6番編成の石動山城への詰番を定める	高島文書(玉川図書館蔵)、『七尾市史(武士編)』	石動山城の番手
45	(天正12)11月14日	佐々成政書状 (勝興寺下坊主中宛)	勝興寺運住の懇望をうけ、守山城置に寺域を申し付ける。委細は神保氏張が申し付ける。	勝興寺文書、『富山県史(史料編Ⅲ)』近世上』	勝興寺文書
46	(天正12)11月15日	神保氏張副状 (国中諸坊主中宛)	成政と勝興寺の喧嘩の儀は種々才覚に才覚により調った。それゆえ国中山の坊主中へ成政から折紙を出し仰付ける。寺地は当分守山の山置と定めたので草坊建立に馳走するがよい。詳細は尊福寺から演説する。	勝興寺文書、『富山県史(史料編Ⅲ)』近世上』	勝興寺文書
47	(天正12)11月24日	上杉景勝書状 (樋口惣右衛門尉宛)	越中境の地の仕置を手堅く申し付けて備陣した。心安かるべく候。	山形県樋口氏所蔵、『新潟県史』387、『上越市史』編年2995	樋口景勝だけの縁組。本心は315に。
48	(天正12)12月2日	佐々成政書状 (村上左衛門尉宛)	今後、相稻の御用等抑せ越えたい。疎意なく付き合いたい。さて加賀・能登の付城については存分に申し付けている。(未森の敗戦という噂があるが、...)こちらの様子に問題となることはない。	藩録追加2、『上越市史』編年2999	未森の敗戦が多少な上は備陣し、
49	天正12年12月	神保氏張補礼(勝興寺宛)	7箇条の制札。寺内諸役免許、府内一円免許、参詣人から渡舟賃徴収(馬びた2銭・人びた1銭)、犯罪者成敗(寺内追放)などの保証を与える。	勝興寺文書、『富山県史(史料編Ⅲ)』近世上』	
x	天正13年2月28日	前田利家判物写 (村井又兵衛宛)	連沼徳討の功績を褒賞し、4千俵加増。手柄の面々の名前をあげてねぎらう。真偽に疑義あり。	松雲公採集遺稿編第145、『七尾市史(武士編)』	
x	(天正13)2月29日	前田利家判物写 (村井又兵衛宛)	木船城の際を通つての夜間の焼き討ち等を称賛した感状。真偽に疑義あり。	松雲公採集遺稿編第145、『七尾市史(武士編)』	
50	天正13年2月	前田利家黒印状 (うのみ村助右衛門宛)	連沼徳討に協力した傷九汰・射水郡宇波村助右衛門に越中攻め入り際に際し、前田軍の軍勢の乱妨・狼藉・放火なきことを約束。前田軍へ馳走すれば村は安全である。	萩野一朗氏所蔵文書、『七尾市史(武士編)』『富山県史(史料編Ⅲ)』近世上』	
51	(天正13)3月7日	羽柴秀吉書状(前田利家宛)	越中表への出陣は5月頃が適当であろう。10日か15日の出馬で一人残らず成政するであろうから、それ以前は卒爾の働きは無用であり、越後の交渉も秀吉と手を合わせに行うに。	中垣文書、『七尾市史(武士編)』	
52	(天正13)3月15日	神保氏張書状 (下間右衛門尉宛)	寄進した府内の勝興寺内での土地紛争について、先の安堵状にそつて便宜をはかる。	勝興寺文書、『富山県史(史料編Ⅲ)』近世上』	

53	(天正13)3月19日	佐々成政書状写 (村上左衛門尉宛)	そなたの御身上の儀、最前申上げた通り家康に具さに申し入れ、縁談追加2、『上越市史』編年3020
54	(天正13)3月25日	前田利家印判状 (青木普四郎・大屋助兵衛宛)	白山市鶴菜博物館、『七尾市史(武士編)』
55	(天正13)4月2日	上杉景勝書状写(秀吉宛)	歴代古案10 『七尾市史(武士編)』263、『上越市史』編年3022
56	(天正13)4月20日	前田利家印判状 (奥村助右衛門、千秋主殿助宛)	千秋氏所蔵、『七尾市史(武士編)』264、『未踏城嶺宮書』
57	天正13年4月21日	前田安勝書状 (うなみ村助右衛門宛)	萩野一朗氏所蔵文書、『七尾市史(武士編)』265
58	(天正13)5月7日	前田利家書状(前田安勝宛)	前田育徳会、『七尾市史(武士編)』267
59	(天正13)5月18日	前田利家印判状写 (富田与五郎宛)	松葉公孫集遺稿額巻、『七尾市史(武士編)』268
60	(天正13)5月24日	徳川家康書状写 (佐々喜右衛門尉宛)	『新修徳川家康文書の研究』*藤田
61	(天正13)6月6日	前田利家印判状 (青木普四郎・大屋助兵衛宛)	北徹遺文、『七尾市史(武士編)』271
62	(天正13)6月11日	徳川信康書状写 (徳川家康宛)	古簡書巻、『大日本史料』11編16 (*藤田2001)
63	(天正13)7月4日	前田利家書巻 (騎右衛門入道宛)	前田育徳会『七尾市史(武士編)』282
64	(天正13)7月5日	前田利家書状 (青木普四郎・大屋助兵衛宛)	『大日本史料』11編6、『七尾市史(武士編)』 『富山県史(史料編)』近 世上』

65	(天正13)7月8日	千宗易書状(松井康之宛)	越中出陣を回避するには、家康の家老を人質として出すか成政を 追放し越中を秀吉に渡すか二つに一つしかないと、秀吉は考えて いる。	松井素綱、『大日本史料』11編1 7、*藤田2001
66	天正13年7月8日	頭上人員探御座所日記 :7月7~8日頃	佐々成政の帰望は、家康の取次で赦免してもらい、越中国を秀吉 の使いに渡し、高野山に隠遁することらしい。富田平左衛門と津田 四郎左衛門が三河に下向したのはそのためらしい。	真宗史料集成、『富山県史(史料編 Ⅲ)近世上』
67	(天正13)7月8日	丹羽長重書状(上杉景勝宛)	家康との和議につき父長秀は暇なく相果てたが、加賀・越前兩國 は異議なく申し付けられた。今後変わることも御用に従事し、聊 かも疎意あるべからず。近日越中に赴き働くのでその時面会しま しよう。	上杉家文書、『新潟県史』762、『上越 市史』編年3038
68	(天正13)7月17日	羽柴秀吉直書写 (前田利家宛)	8月4日に越中表出陣と決め、蜂屋に先備目録を渡した。きつと越 中へ参陣せよ。蜂屋の口上をよく聞き相談せよ。	加能越古文叢41、『七尾市史(武士 編)』
69	(天正13)7月21日	羽柴秀吉書状 (小早川隆景・吉川元長宛)	越中の佐々成政不届につき10か国ばかりの軍勢を動員し来月4 日に出陣する。越後へ出陣し、関東の待共も出陣させるので関東8 か国も従うであらう。安心して四国攻めに専念せよ。	小早川家文書、『七尾市史(武士 編)』
70	(天正13)7月27日	木下吉隆書状 (勝興寺願幸宛)	越中の儀敵宛なく、来る8月6日に秀吉の越中出陣は必定。そなた ら阿寺は加賀国に下り、そこに留まり待ち受けるがよい。なお古国 府宛での秀吉翻札を罷えたので連上する。	勝興寺文書、『富山県史(史料編Ⅲ)近世上』
71	天正13年7月28日	前田利家起請文 (菊池右衛門入道・菊池安信 宛:血判)	利家から水見郎阿尾城主菊池氏に、秀吉へ知行方・城など取り成 すことを約束した血判起請文5ヶ条。	前田青徳会、『七尾市史(武士編)』 『富山県史(史料編Ⅲ)近世上』
72	(天正13)8月5日	織田信雄書状(佐々成政宛)	佐々成政は越中出陣が中止などなれば越中を退くと信雄に伝えた。 即刻大坂に行き談判したが、秀吉は確かな誓詞も人質もないのに 応じるわけにいかない。越前までは出陣すると返答した。	宮田作次郎氏文書(三河)、『大日 本史料』11編18、*藤田2001
73	(天正13)8月7日	前田利家書状写 (青木普四郎・大屋助兵衛 宛)	今高河北郡島越まで一戦あり前田利長が切っ筋し、佐々成政家康 介随従の者を多数討ち取った。秀吉の出陣は必定であり御免勢は はや越前に到着した。そちらも油断なく、境目の村々へ人敷を付 け置き、敵情を聞き出し連絡されたい。	加能越古文叢41、『七尾市史(武士 編)』
74	(天正13)8月12日	前田利家書状 (菊池右衛門入道・屋代十郎 左衛門宛)	今高の首尾は手勢であつた。外聞も承儀も面目を飾したといえま しよう。秀吉の軍勢は加賀に充滿して野山も分からぬくらいです。 本日、圓白報にも注進しました。	前田青徳会、『七尾市史(武士編)』 『富山県史(史料編Ⅲ)近世上』
75	(天正13)8月14日	下間藤康書状 (新村郎助主衆中・惣門徒中 宛)	圓白報、越中御乱入につき勝興寺願幸も越中へ下るので、新村川 郡の坊主・門徒衆は万端馳走せよ。お前たちの行動(佐々成政と 同のこと)につき別儀なきまう圓白報に申し入れてあるので早速選 住し異議なく勝興寺願幸に相應の馳走を行おうに。	勝興寺文書、『富山県史(史料編)中 世』
76	(天正13)8月17日	前田利家書状 (長連郎・種村三郎四郎・前 田慶二・高島織部など6名宛)	津幡から惣手働につき、津幡に参着するよう命ずる。七尾には安 勝だけ置き、我々の七尾衆はすべて津幡に集結せよ。荒山城には 九里、石動山城には前の定番共を留守將として置く。	『大日本史料』11編18、松雲公孫集 遺編類纂『七尾市史(武士編)』

上杉家の関係者として
北方方面の取次の
口上を記したとす
る記載がある。

勝興寺は書写方に
誤記されていた。

77	(天正13)8月22日	木下吉雄・石田三成遺書状 (利家宛)	勝興寺顕幸ら2名の越中下向につき、制札を下した。	勝興寺文書(見瀬史料)
78	(天正13)8月26日	羽柴秀吉朱印状 (宛名次:秀長宛か)	19日状を8月26日に越中俱利伽羅峠に着いて拝見した。先勢は東の方立山姥堂、鉤山麓まで放火し木船城・増山城・守山城以下は敗北させたので、左々成政は降参し信雄を頼み富山城を助け渡すという。今日、我が陣に成政が走り入ったので、命だけは助けやわった。一箇日に富山城に入り、上杉景勝を出させ一札を請ける予定である。	三村文書、『七尾市史(武士編)』
79	(天正13)8月7日	羽柴秀吉朱印状 (本願寺顕如宛)	越中平定の様子を誇大に吹聴。木船・守山・増山以下所々の城を敗北させ成政は降参した。信雄の助命を頼りに成政は命乞いをしてきた。富山城は破却して加賀まで馬を絡めた。	勝興寺文書、『七尾市史(武士編)』 『富山県史(史料編Ⅱ)近世上』
80	(天正13)8月11日	前田利家黒印状(国泰寺宛)	村水都国泰寺の方丈の敷地を、守山城跡にて取らせる。	国泰寺文書、『七尾市史(武士編)』
81	(天正13)8月14日	羽柴秀吉朱印状 (妹須賀正勝・黒田孝高宛)	越中表の富山に降参した。国中を見分し諸城の物主を定め、富山城を破却した。佐々成政に味方した飛騨の三木頼綱は悪逆を企てた者ゆえ、山中深く探し出し首を刎ね、飛騨一国を平定したのち帰る。	小見川家文書、『七尾市史(武士編)』
82	(天正13)8月12日	上杉景勝書状 (甘粕近江守宛)	越中表出馬につき、度々の書状を寫ぶ。今越中の境城まで出馬、いかにも仕合よく、上方とも相談し備陣する予定である。(景勝と秀吉は会見せず)	森山八郎氏所蔵、『新潟県史』2853、 『上越市史』古代・中世1000
83	天正13年8月	多聞院日記 : 8月2日・9日 桑	8月11日: 秀吉は富山城に入った。	増補続史料大成、『七尾市史(武士編)』
84	天正13年8月	顕如上人員探御盛所日記	8月上旬、秀吉北国進軍、20日頃信雄の口入で成政訖言が調い、刺殺し小者一人の風体で秀吉陣所に走り入り。秀吉と対面し余りに不便とて越中一郡を与え、大坂に在城させ別の知行を与えたと云々。越中惣国は前田利長に遺わす。	『富山県史(史料編)中世』、真宗史料集成
85	(天正13)9月11日	豊臣秀吉自筆書状写 (羽柴筑前守利家宛)	去年より表裏者の佐々成政は謀反をいたし、度々加賀藩迄人救出したが、貴殿は心丈夫ゆえ未嘗後巻の出馬し成政を降参した。實め込み進泊を催さぬい…秀吉が出馬し佐々成政を降参した。實御も敵しを乞方たので新川郡迄与え許したところだ。今度の戦勝の御礼に秀吉の名前と家名を進ぜる。このあと羽柴筑前と名乗れ。嫡男利長にも羽柴姓を許し越中3郡を与える。家臣団の働きも称賛する。	寸編纂録2(京都大学蔵)、『富山県史(史料編)中世』

■文書選

○以下13点のうち9・11の3点のみ『大日本史料』11編165・18、他はすべて『七尾市史（武士編）』に拠る。

1 (天正12) 8月20日 織田信孺書状

〔香宗我部家伝証文四〕

猶以、淡州へ被差越、彼表被討果候、在陳尤候、其首具承度候、去十一月芳札、当月十五日二令拝見候、元親阿州迄御出馬、殊十川城被賣落之由祝着被申、以飛脚被申候、

一、貴所別而被抽御忠義旨、尤可然候、内々一ケ因御望之由候間、備前国可被遣候、我等無沙汰様ニ在之与、可思召事も候ハん哉と存、只今信雄紙面ニ被書載候、不限之、以来之儀も、何様共馳走可申候、

一、淡州儀、先早々被及御行、可被討果事專一候、

一、羽柴近日濃州へ罷越候、見合以一戦可討果候、然者被聞召合、

此方於取結、可成程其口御行要用候、

一、右京大夫殿御事、即信雄ニ申聞候、以来不可存疎略通候、可御心易候、

一、北国之儀も、大形越中此方へ申様共候、早能州を相破候由申參候、然時者越前・能登一切動問敷候、

一、淡州相果候ハ、彼地二元親御在陳專一候、就中存分具頼心坊へ申遣候、御分別所仰候、恐々謹言、

八月廿日

信張(花押)

香宗我部左近大夫殿御宿所

〔表12〕

2 (天正12) 9月8日 羽柴秀吉書状

〔前田育徳会所藏〕

四日御状今日到来、令被見候、此表儀、所々手堅依申付、敵方種々有想望候、三介殿御料人・家康惣領子十一二成候を被出、其上二

家康舍弟重而出、石川伯耆実子・源五殿・三郎兵衛実子出シ、尾

張因迄にて雖想望候、不能許容候処、色々越前守異見被申候条、

思安半儀二候、然者越州、廿日比二者何之道ニも可為開陣候、越

中へ行儀はや越州与命談合相定候間、佐々内藏助山取以下仕候と

て、聊爾なる働御無用二候、うちば二被相構、越前守被相越候を

可被待儀專用候、自然不被待付、越度候てハ、不可有其曲候、猶

使者へ申渡候、恐々謹言、

九月八日 筑前守秀吉(花押)

前又左

御返報

〔表17〕

3 多聞院日記 天正十二年九月二十二日条

〔浦続史料大成〕

廿二日、(中略)

一、去十一日二、越中ノ佐々内藏介卜前田又左衛門及合戦、越中

ノ衆敗軍了、十五人大将分首取、注文写被下了、(下略)

〔表19〕

4 貝塚御座所日記

天正十二年八月・九月条

〔真宗史料集成〕

一、又尾州小牧表（前田吉忠）へ筑州出陣、八月廿六日、木曾河ヲコサル、ト云々、廿八日、彼表清洲辺、被手遣悉放火、九月六日來着、能州より參詣衆申趣ハ、越中国佐々内藏助色立ニ、コレハ一定也、

○加州ツハタノ城・今庄トヤラン、以上三カ所落居、加州金沢辺迄放火云々、此説皆雜説也、

一、尾州表今度一戦無之、筑州よりつかくトヲシツメテ、又新城三カ所被申付了、越中佐々内藏助敵ニナル、則前田又左衛門ト大合戦アリ、九月九日ト十一日・十二日ニ合戦アリ、佐々打負、ヨキ軍兵十人余、雜兵數輩・討死二千計ト云、又佐内藏キリカエシ、クリカラノウヘニ陣取、加州河北郡令放火云々、説々不同也、

今度秀吉・家康和談既相調、誓詞等出サル、家康家中石川伯耆守・酒井左衛門（前田吉忠）已下既罷出、雖及一礼、又相破訖、まづ筑州ハ城三堅固ニ被申付、諸勢被打入、秀吉自身ハ九月晦日ニ江州坂本迄御帰陣、ソレヨリ京都へ御のぼり、十月二日、

〔表 16〕

5 (天正 12)

9月16日

羽集秀吉書状

〔前田青徳会所藏〕

金右衛門尉・次郎右衛門尉兩人かたより惟越へ之注進状、十六日酉刻ニ到來、令被見候、今度於末守被及合戦切崩、野々村主水始而數多被討捕、被得大利之由申越候、心知能御手柄無申計候、

殊七尾より罷出、是又荒山・勝山乘取、首數多討捕之由、何之

口も首尾揃、日出度珍重候、佐々藏助栗柄山（河内郡）へ北由承候、定而右之くりからニも足を留事成間數候と令察候、然者此表、尾州内取出、下ならニ一、宮後・幸田三个所、普請丈夫ニ申付、はや過半出来候、二、三日中ニ兵糧・玉粟以下、并人数等四、五千討充入置、廿五、六日比ニ岐阜迄令開陣、敵之様子見合、可隨其候条、於時宜者可御心易候、越前守廿日比ニハ可為帰陣候、猶々被仰合、御本意待覽候、恐々謹言、

九月十六日

筑前守秀吉（花押）

前田又左衛門尉殿
御宿所

〔表 30〕

6 (天正 12)

9月18日

須田満親書状

〔青木長之助氏所藏文書〕

追而任到來、初馬式、進覽候、寔不顧左道体候、已上、雖未申通候、一輪令馳候、仍佐々内藏助企逆心、栗柄・小原口相働之由候之条、兼日被申合首尾、為後詰越中向境之要害押詰、直々令放火候、從景勝以直書被申入候、近日此口へ可為進発候、今般能、賀兩州堅固之御備、誠以御勇力不淺存候、貴國・当方被申談上者、佐々内藏可討果事、不可廻踵候、從此方被差上候飛脚、下向才覚分者、尾州表秀吉公思召儀由、目出珍重候、尚巨細河口定左衛門尉可令演説候、恐々謹言、

九月十八日

滿親 (花押)

前田又左衛門尉殿
御宿所

[表 33]

7 (天正12) 9月18日 神保島國等越中國人違書狀 (前田育徳会所藏)

雖未申通候、令啓違候、仍而佐々内藏助栗柄、小原口相働由候之条、
 当方被仰合首尾、為御後詰須田相模守初而、随分衆數多令同心、越
 中向境之要害被押寄、在々令放火候、近日可為出馬候、今般能・加
 兩州堅固之御備、誠以御勇力難述紙而存候、貴國・当方被仰談上者、
 佐々内藏滅亡眼前候、随而前田又左衛門尉殿、各以書狀申入候之条、
 可然様御取成奉憑存候、弥爰元時宜可御心安候、猶重而可申宜候間、
 不能巨細候、恐々謹言、

九月十八日

土肥美作守
政繁 (花押)

唐人式部大輔
親広 (花押)

寺嶋平九郎
信鎮 (花押)

齋藤五郎次郎
信言 (花押)

神保宗次郎
昌国 (花押)

前田五郎兵衛尉殿
参御宿所

[表 34]

8 (天正12) 10月28日 羽樂秀吉書狀 (瀧江文書)

廿五日書狀、今日至勢州浜田表到来、令披見候、仍東美濃国端へ敵
 五、六千罷出候由注進候条、越節所人数候間、幸与存、十九日申廻二
 承、継夜日一騎懸候之處、早人数之催を聞候哉、敗軍同前二引入候
 間、不及是非、直北伊勢へ令手遣、可成程可令放火存候處、思外二
 立毛在之儀候条、悉蒞田申付、其上敵城浜田与申城を瀧川三郎兵衛
 持候間、即執卷、付城四、五力所可申付内存候、比表二十日計も隙
 入可申候条、執出出来次第、至大坂可納馬候、可御心易候、然者能
 州へ取出為普請、前又左被相働付而、其方之人数歴々被差遣由尤候、
 殊加州表城之普請番以下被申付之由、無残所被仰付様大慶候、被入
 御精、早々使者本望候、此書狀前又左へ自其方御届可給候、謹言、

十月廿八日

秀吉 (花押)

雁代心形 (前田氏)
[惟任越前守殿]

[表 41]

9 (天正13) 6月11日 織田信雄判物写 (古簡雜纂六)

一、佐々内藏助成敗として、秀吉被出馬付而、家康与秀吉間柄之儀穿
 鑿之事、

一、越中に秀吉在陣之間、家康家老中之人質二三人程可有御出候哉、其子細者、此中内藏助と別而家康被仰通之由、方々より申越候付、さて被申事、

一、於義伊殿・石川勝千代人質とは申候へ共、人質に秀吉せらるへき二而者無之候、○義伊、勝千代大坂二赴クコト、十二年十二月十二日ノ趣ニ見ユ、家老中人質二三人清須迄被出候而尤候、自然重人質之様ニ於御存知者、越中表に在陣之間、おきい殿・石川勝千代、岡崎迄可被越置候事、

一、秀吉出馬候て以後、家康分国中へ内藏助於走入者、秀吉可有存分_(一)之由候事、

一、只今秀吉・信雄次第二内藏助於令覚悟者、家康分国ニ雖在之、我々請負可申候事、

六月十一日

信雄判

（天正十三）
（信川家老）
（參河守殿）

〔表 62〕

10 (天正 13) 7 月 8 日 千乘易書状

〔松井家譜〕

為御音信、時分物鉢鱗百著給候、遠路毎度之事乍申御懇切至候、次如御書中、北国御船之儀勞々御取乱奉察候、然者四国事者不及申北国も相済申、（備前兵衛）従家康年寄衆人質渡申候か、不然者藏介国を明候而内府様へ（備前兵衛）渡被申、（小幡左衛門）是二ツに相定、源五様・三郎兵衛・津田四郎左衛門尉・富田

（平右衛門）平右衛門下向候、右之分相済条、当月三日四国へ之御出馬も相延候、昨日七日ニ御京著候、○海内、上野ノ中ノ上、我等今日八日ニ罷越候、恐惶謹言、（天正十三）

七月八日

宗易
從大坂

松新
御報

追而申候、（宗易）幽齋・越公へも、指事無之間、別紙ニ不申候、此書中入度候、

〔表 65〕

11 (天正 13) 8 月 5 日 織田信雄書状 (宮田作次郎氏所藏文書)

書状并一書、使者口上之趣、何茂聞届候、秀吉就無出馬者、信雄被任異見、其国可有退出様ニ被申越候間、則二日午刻ニ從其方返札候つる條、即日午下刻ニ我々大坂へ相越、一々遂直談、種々出馬之段申留候、併我々ヲ被拔候間數とハ乍存、儘可有退出と之誓紙等も無之、實物之段へも不被立入候へハ、はたと被相延候儀無之、乍去、我々ニ対ての面むき返事ニハ、出馬ハ相延候、越前ニ手置申付儀候間、（備前兵衛）彼国迄ハ罷越候と之被申様ニ候、出馬無之上、如被申越、様子被任異見、羽柴三郎兵衛・土方彦三郎ニ其国之儀被相談尤候、恐々謹言、（備前兵衛）

八月五日

信雄
（花押）

佐々木陸奥守殿

〔表 72〕

12 (天正13) 8月7日 前田利家印判状書

〔加越能古文叢11〕
如書狀、今度於鳥越表遂一戰、孫四郎手前にて切崩、庄介馬廻隨生之者數多討捕、さし物以下迄追落候、仕合可有心易候、御動座必定にて候、御先勢はやゝ越前迄出申候、其元機遣も五、三日中たるへく候、油断有ましく候、堺目にも人を附置、開届可申越候、謹言、

〔天正十三〕
八月七日

利家印

青木善四郎殿

大屋助兵衛殿

〔表 73〕

13 (天正13) 8月26日 羽柴秀吉朱印状

〔三村文書〕

去十九日書狀、今日廿六日、於越中俱利伽羅峠到来、披見候、

一、此表之儀、先勢東八立山うは道・つるきの山の麓まで令放火之處、

木船・守山・増山以下処々敗北候二付而、内藏助令降参、信雄を

相頼、外山之居城を相渡、今日当陣取へ走入候条、命儀令赦免候事、

一、一兩日中ニ外山城へ相積、越後長尾可出仕之由候間、於彼地一礼

可請置事、

一、右分候間、太刀も刀も不入体ニ候条、可心安候、今五、三日も令

在陣、諸城ニ物主相付、国之置目等申付、五、三日中ニ可納馬事、

一、長曾我部人質、去十九日請取之由、得心候、其国様子、先日孫七郎か

たへ遣候一書面を相守、可申付事、

一、伊予国事、諸城請取、秀吉へ付單相尋、毛利方へ相渡、明隙可帰陣候、猶追々可申聞候也、

〔天正十三〕
八月廿六日

〔羽柴秀吉〕
〔朱印〕

○是所欠ラモ、羽柴秀吉ニ光テシモノ也、

〔表 78〕

第2節 城郭史上の加越国境城郭群

千田嘉博 (奈良大学)

はじめに

1584年(天正12)、尾張から伊勢・伊賀を戦場にして、織田信雄・徳川家康連合軍と羽柴秀吉が、織田信長の後継者をめぐって戦った(小牧・長久手の戦い)。この戦いでは両軍が各地の大名を味方にするため大規模な情報戦を行った。その結果、越中の佐々成政は、織田・徳川軍に呼応して前田利家領に侵入し、加越・能登の利家の城郭を攻撃した。利家の適確な援軍によって成政は城を攻め落とせなかったが、翌1585年8月に羽柴秀吉が越中に攻め入り成政が富山城で降伏するまで、加越国境にある城郭群で、佐々・前田両軍が対峙することになった。

加越国境城郭群で両軍が対峙し、城郭を整備した時期は、わが国において中世城郭から近世城郭への大きな変化の時期であった。しかも近世城郭は織田信長、豊臣(羽柴)秀吉による天下統一の展開に対応して、信長・秀吉スタイル城郭(織豊系城郭)の全国展開というかたちで進んだ。各地に残る戦国・織豊期城郭はいずれも貴重であるが、信長のもとで最先端の城づくりを会得していた佐々成政、前田利家が具体的にどのような城を築き得たのかをつかむことは、わが国の近世城郭の成立過程を実証的に知る上で、きわめて重要である。とりわけ加越国境城郭群は1584-85年という限られた時期に今日見る最終的な改修を集中的に行なったことが明らかで、城郭プランの変遷を把握する標識遺跡となるものである。本稿では、そうした視点から調査が進んだ切山城、松根城の城郭史上の位置づけを検討したい。

1. 切山城

切山城の主郭Ⅰは周囲に土塁をめぐらしており、北東と西に出入口を開いた。城のかたちから北東に開いた出入口が大手筋と考えられる。発掘の結果、柱間2.3mの礎石建ちの城門が検出された。掘立柱建物ではなく、礎石建ちの城門であったことは、当該期の城郭建築を考える上で特徴的である。どのような城門建築であったかは、慎重に考えるべきであるが、門扉を吊った鏡柱の柱間が先述のように2.3mであり、左右開きの一般的な門扉であったと推測すると、1枚の門扉が1mほどとなり、かなり小さかったことになる。

切山城よりわずかに時期は下がるが、文禄・慶長の役(壬辰・丁酉倭乱)に際して築かれた肥前名護屋城と周囲の陣を描いた「肥前名護屋図」によれば、多くの陣の門に突き上げ戸を用いたことがわかる。突き上げ戸であったとすると、城外側へ門扉を突き上げたことになる。だからこの構造であれば、城内側から門扉を押し上げるのは容易であっても、城外側から門扉を引き上げるのは難しく、城門としても合理的であった。また現存する兵庫駅姫路城「水一門」のように、片開きの門扉であった可能性も十分考えられる。いずれにせよ発掘で明らかになった城門の鏡柱の柱間から考えて、切山城主郭の大手門は、突き上げ戸あるいは片開きの門扉を備えた城門であったと復元すべきであろう。将来的には平面表示や立体復元によって、市民が城郭構造を実感できることを期待したい。

この主郭Ⅰ北東の出入口を出た先は、堀で狭められた土橋になり、土橋の先に矩形の曲輪Aがある。もともとは尾根筋上の主郭につづく曲輪のひとつであったと思われるが、最終的には馬出し的な機能を果たした特別な出入口空間になっていたと考えられる。とりわけ曲輪Aから南東側の主郭帯曲輪につづく土橋状のスロープが認められ、その土橋状のスロープの北側に堀を添えたことで、このスロープを城道として明確化した点は重要で、曲輪Aが実質的な馬出しへと変化した証拠である。現状ではこの南東のスロープ以外に外部へ接続した出入口は見当たらない。しかし曲輪A西側の帯曲輪を経由して、城城北側にも

西側にも連絡したと思われる。つまり曲輪Aは、主郭への城道を集約した守りの要の役割を果たした空間だったと位置づけられる。

ただし定型的な馬出しが、馬出しの周囲に堀をめぐらしたのに対し、切山城の曲輪Aは、実質的な馬出しとして機能しながら、定型的な形態をとらず、過渡的な様相を示している。加越国境城郭群に先立つ1583年(天正11)の賤ヶ岳の戦いで築かれた玄蕃尾城(滋賀県)に、やはり過渡的な馬出しが認められること、後述する松根城が過渡的な馬出しを備えたことから考えて、天正11・12年前後に織豊系城郭の馬出しが成立していったことが確実である。

主郭I西側の出入口は主郭から一段低くなった小さな腰曲輪を経由して屈曲して進んだ。この小さな平場Bは単純な段でない。小さな平場の外側には土塁をめぐらし、主郭側から城道が直角に屈曲して通るように設計しており、外枳形と評価すべきである。外枳形は織田信長の岐阜城(岐阜県)、安土城(滋賀県)で発達し、織豊系城郭を特色づけた出入口形式で、熊本城(熊本県)、江戸城(東京都)をはじめとして、各地の近世城郭に受け継がれた。

外枳形Bの西側正面には曲輪IIの出入口Cがあった。この出入口Cは城内側から見て北側から南側に屈曲してふたたび北側に向かって土橋に降りた。そして堀切りを土橋で渡った先には、北側から伸びた土塁を設けて、その土塁と堀切りとを組み合わせて城道を、さらに屈曲させた出入口Dがあった。出入口Dは小規模ではあるが明確な外枳形と評価できる。つまり外枳形Bから出た城道上に、出入口Cを挟んで、もうひとつの外枳形Dを備えて、外枳形の連続帯を設けていたのである。

外枳形Bは南側から土塁を出して北側で開口したから、主郭I側から見れば城道は右折れ→左折れとなった。それに対して外枳形Dは、城内側から見て左折れ→右折れの順に曲がって出ることになり、ふたつの出入口が対の関係になっていたと理解できる。のちの熊本城などの近世城郭では、外枳形の連続帯をより明確に築いたが、切山城の連続外枳形は、近世城郭へつづく外枳形の指向性を、すでははっきりと示している。この点もきわめて重要な発見である。

土づくりの軍事的な砦であった切山城と、石垣づくりの政治拠点としての近世城郭を比較するのはいかかという批判はあり得るだろう。しかし織豊期の軍事的な砦であっても、近世城郭であっても、城として果たすべき軍事機能は通底しており、また近世城郭の軍事機能を担保した出入口などの軍事性は、織豊期の城郭に直接由来した。だから実際の城郭跡で両者のつながりを実証的に把握するのが必要なのであって、それは城跡の考古学的研究でなければならない。もちろん砦と居城ではさまざまな違いがあった。しかし文献史学にもとづいた政治史的な視点にもとづいて、居城と砦とを比較すべきではないと考えたのでは、城跡を物質資料として研究する独自性を狭めてしまうだけでなく、分析の立脚点そのものを文献史学に委ねてしまうことになる。そうした言説には十分な注意が必要だろう。

切山城が小原越道を本来、城内に引き込んでいたことが判明したことも、意義のある発見であった。通断するために切山城を攻め落とすしか方法はなく、切山城が砦であったとともに、いわば関所としても機能したことが明らかになったからである。いわば究極の街道封鎖であった。主郭I・曲輪IIなどによる主要部を中心に、尾根上に広大な曲輪群が広がっていたが、曲輪群の先端は堀切りで明確に遮断しており、途中に削平が不十分な緩斜面を含んでいても、全体を切山城の外郭と捉えなくてはならない。

こうした外郭も一般的に戦時中の軍勢駐屯地として機能した。そして街道を遮断した切山城では、街道を物理的に封鎖した空間としても機能したことが測量と発掘調査から明らかになった。つまり加越国境城郭群が1584-85年に使われた城郭と街道封鎖による佐々・前田両軍による陣地戦という歴史的な状況を、鮮やかに反映した城郭遺構と評価されるのである。このような特徴を備えた城跡は全国的にも珍しく、その点からも加越国境城郭群の歴史的価値は高いといえる。

2. 松根城

松根城は規模が大きく、また全域にわたってきわめて技巧的で、当該期の城郭プランを考える上で、文字通り標識となるべき城跡である。松根城の曲輪群はこれほどの高所に築いたにもかかわらず横堀で囲んでおり、土づくりの城としては最上の防御を意図したことが明らかである。特に注目されるのは出入口の構造で、主郭Ⅰの南には過渡的な馬出しを、北側には出入口空間と堀切り・土橋を挟んで城道を屈曲させた土塁を設けた外枡形Ⅰを設けた。

曲輪Ⅱの南には外枡形Ⅱが認められる。外枡形Ⅱは、林道の建設もしくは公園化によって、馬出しⅠとともに若干の改変を受けている。しかし、基本的に馬出しⅠ・外枡形Ⅱとも、同様の意図のもとにつくったと考えられ、出入口（城門）と組み合わせた特別な出入口空間（空地）を組み合わせて、それを經由して、それぞれ主郭Ⅰあるいは曲輪Ⅱに入るようにしたものと分析できる。

つまり主要な曲輪の出入口に特別な出入口空間（虎口空間）を設けたという一貫性を認められる。しかし、いずれの出入口空間も、定型的な馬出しや外枡形とはいえない難く、多分に折衷的である。織豊系城郭では、岐阜城、安土城で明らかのように外枡形系のくい違い出入口、外枡形が先に発達し、切山城で見たような馬出し系の出入口は遅れて出現した。松根城主要部の出入口は、外枡形系の知識を基礎にしながら、そこから馬出しが分離・出現していく過程を、みごとに物語る希有な遺構である。特筆すべき特徴といえよう。

曲輪Ⅲから南東に出た出入口は、堀切りを土橋で渡り、その先の広場に入って、90度直角に城道が屈曲して、外へとつづくという馬出しの要件をより整えた形態を示した。しかし曲輪Ⅲと馬出しⅡとの間の土橋幅が太く、出入口空間がそのまま外側に突出するという馬出しⅠに共通する初期要素（馬出しⅠは、後方の曲輪、つまりここでは主郭Ⅰと出入口空間とを分離する堀切りがなく、単純に出入口空間が前方に突出した）を見せた。同様の様相は主郭Ⅰ北側の外枡形Ⅰとも共通し、ここでも堀切りを渡る土橋の幅が異様に広い。その後の近世城郭では、堀切りの外側に突出した出入口空間を堀切りで切断して分離するように発達した。しかし松根城では可能な限り出撃と守りの拠点であった出入口空間を前方に進めながら、その後方分離を明確にしきれていないという、馬出し成立の過渡期にのみ表れたきわめて微妙な構造をもっていた。

また馬出し空間が完全に堀で囲まれておらず、城外側への出入口であった南西部は曲輪の段差でつながったことも、玄蕃尾城の馬出しと共通した定型的馬出し成立の前段階を示す特徴であった。このように松根城の出入口を分析していくと、織豊系城郭のなかで馬出しの成立過程を明確に追うことができることがわかる。つまり織豊系城郭において、まさに加越前境城郭群が最終的に改修された時期に、外枡形を基礎にして馬出しが成立していったと評価できる。ところが関東の北条氏あるいは伊斐の武田氏が、戦国・織豊期に馬出しを用いたことが古くから知られており、織豊系城郭に見られ、近世城郭に受け継がれた馬出しは、北条氏や武田氏の馬出しを取り入れたものという説がしばしば提説されてきた。しかし、このように織豊系城郭において独自の馬出しの成立過程をたどることができるので、近世城郭が普遍的に用いた馬出しも、東国の北条氏や武田氏の技術系譜を取り入れたものではなく、織豊系城郭そのものに発したものと位置づけなくてはならない。

松根城でも、小原越の街道を城域にもともと取り込んでおり、最終的には街道を大規模な堀切りで遮断して通行を封鎖したことが測量と発掘で明らかになった。街道の封鎖は城の西端の堀切りによって実行しており、この城の最終的な改修が佐々成政側によってされたことを示唆する。それは文字史料からの推測とも合致する。

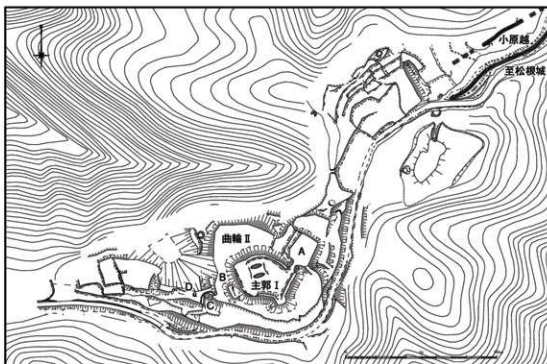
まとめ

加越国境城郭群のうち、調査が進んだ切山城と松根城を中心に城郭としての特徴と、城郭史上の位置づけを検討してきた。この結果、両城が当該期の城郭の標識遺跡としてきわめて重要な位置を占めただけでなく、縄豊期城郭と江戸時代の大名の居城として成立した近世城郭とをつないで理解するための、ミッシングリングをつなぐ特別な城郭群であることを指摘した。

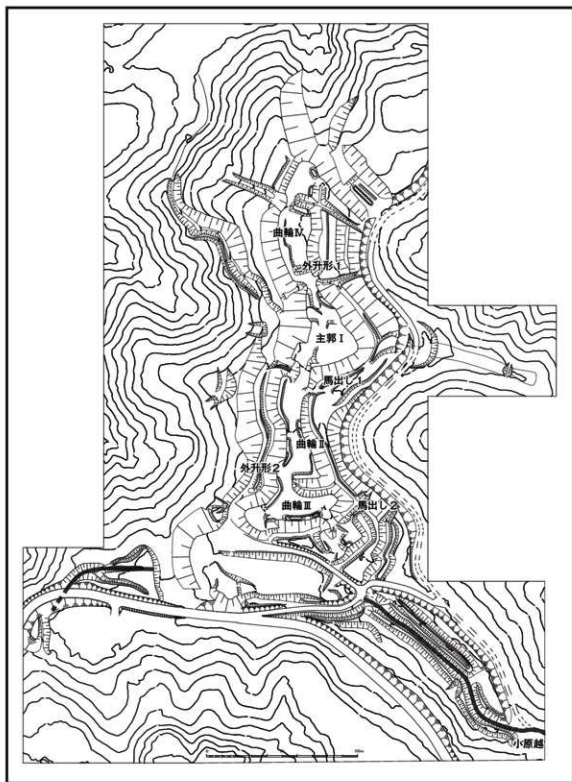
とりわけ外枳形や馬出しという、わが国の近世城郭が普遍的に用い、また地球上に人類が築いたさまざまな時代と地域の城が普遍的に備えた出入口プランの成立過程を、明確に物語る城郭群であることは特筆すべき歴史的価値である。外枳形も馬出しも、世界の城郭で認められる。たとえばイギリスの紀元前4世紀から紀元前1世紀頃に築いた鉄器時代の城塞都市・ヒルフォートには、外枳形を用いたデンブリーヤ、馬出しを用いたメイドゥンカッスルがあった。また中世のロンドン塔は、みごとな半円形の馬出しを持ち、フランスのカーン城は石造りの四角い馬出しを複数備えた。

このように外枳形や馬出しは、人類史上の城郭が、高度な発展段階に到達したことを示す指標であり、人類が到達したもともとも合理的に防御と出撃の機能を発揮し得た普遍性をもった出入口プランであった。そうした世界史的な視点に立つとき、切山城と松根城が代表する加越国境城郭群がもつ歴史的価値は、佐々成政と前田利家との戦いを物語る遺跡という日本史上の意味に留まらず、日本の城郭がいかに人類史上の普遍性を持ち得たかを証明するものと位置づけなくてはならない。筆者は主要な加越国境城郭群を踏査しているが、切山城、松根城以外の城郭群も規模や構造で劣るものではなく、2つの城だけでなく、城郭群全体の保護と活用を検討することが必要であろう。今後の取り組みが期待される。

また今回の調査では、城郭遺構だけでなく街道と合わせた測量や発掘を行った。金沢市のこうした調査方針はまことに適確で、街道を取り込んで封鎖していった、まさに加越国境城郭群が戦いのなかで果たした機能に合致した特異な構造を実証的に解明した。将来、城跡だけでなく街道と合わせて、いかに特色ある保護と整備を実現していくか、積極的な取り組みを期待したい。



第45図 切山城遺構説明図



第46図 松根城遺構説明図

第3節 総括

天正12年(1584)、当時の加賀国と越中国の国境を通過する街道沿いにはいくつもの山城が築かれていた(第2図下段)。これらの城郭は羽柴秀吉と織田信雄、徳川家康の小牧・長久手合戦に連動して起きた秀吉方の前田利家と信雄・家康方の佐々成政の抗争によるものであり、430年が経過した現在は山中に残された城跡としてその歴史を伝えている。

今回の調査は、そのうちの小原越を通じて対峙する切山城と松根城に関するものである。加越国境城郭群の調査としては、主に縄張り調査成果を集成した石川県教育委員会による城館調査(石川県教委2002)があるが、測量調査や発掘調査ということであれば、本市が松根城跡や朝日山城跡で測量調査や発掘調査を実施している(金沢市2004、金沢市教委他1979)。また、加越国境城郭ということになるかもしれないが、宝達志水町による末森城跡や坪山砦跡などの発掘調査も進められてきている(宝達志水町教委他2007)。

松根城とも対峙したと伝わる朝日山城では平成14年(2002)に発掘調査を実施している。朝日山城は田近越を介して小矢部市一乗寺城と対峙している。土取りにより一部が損壊しているが、主要部分は残っている。朝日山城は天正2年(1574)の上杉謙信と一向一揆衆の抗争時に利用され、一揆衆が謙信側を鉄砲によって迎え撃つたという1次史料が存在する。その10年後に佐々勢の攻撃を村井長頼が迎え撃つことになる。

朝日山城の城郭構造は単純であり、既存の城郭をほとんど改修することなく利用したものと推測できる。最も西側に位置する主郭を含めた3つの曲輪から構成されており、それぞれの曲輪は堀切によって分断されている。城域の最も東側には大きな堀切があり、切山城と松根城の調査成果から推測すると、当時は田近越を遮断していた可能性が高い。その大堀切の西側に位置する曲輪には堀切に面して土塁が築かれており、越中側からの攻撃に備えていたことが明らかである。発掘調査の結果、16世紀後半を中心とする土師器皿や越前焼、古銭などが出土しており、切山・松根の両城と同様の位置づけが可能である。また、大量の石臼や茶臼が出土しており、その利用実態の解明が待たれる。

さて、今回の調査によって加越国境城郭群及び古道の一端が明らかとなったと考えている。

切山城跡の調査では、敷石と土間を伴う礎石建物による城門とその両脇の土塁上に設けられた櫓もしくは塀の存在が明らかとなり、織豊系城郭における過渡的な馬出と城門、櫓・塀がセットで見つかったことで、具体的な作りの様子がわかってきた。また、城郭によって小原越が遮断されている可能性が高く、城郭の南側切岸に沿って残っている掘り割り遺構は、従来言われてきた小原越ではなく、当初は横堀であったことがほぼ明らかとなっている。出土品は多くなかったが、出土鉄砲玉の主成分分析と鉛同位体比分析によって、国内では16世紀後半～17世紀初頭にかけて九州を中心に流通が認められるタイ・ソントー鉱山産の鉛から作られている可能性が高いことが判明し、城郭の年代を押さえる際の指標になると共に、北陸での出土は、当時の交易・流通を考える上で重要な発見といえる。

松根城の調査では、中世に遡る旧小原越と考えられる道跡をこれまで道跡が想定されていなかった尾根筋で発見し、なおかつ大堀切で遮断されていることが発掘で明らかになったことが特に大きな成果といえよう。このことによって、加越国境城郭群のあり方を考える際には、「街道封鎖」を念頭に置くことが必要となったと共に、他の城郭においても城郭内部だけを調査するのではなく、外との繋がりを明らかにすることが城郭築造の背景を探るために大変重要であることがわかった。城郭研究の一つの方向性を示すことができた事例になるのかもしれない。今回は、城郭と道との関係性を明らかにできた点で、これまでにない調査成果となり、中世の道を調査する際にも有用な情報を提供できたと考えている。

松根城においても、切山城同様に城門が見つかった。礎石建物ではあるが、岩盤ブロックのような塊を礎石に採用しており、希有な事例であろう。出土遺物も比較的豊富であり、土師器皿の年代から16世紀後葉の年代が得られたことは、遺構年代を裏付ける上で重要である。横堀については、現在道跡であったり、遊歩道となっている箇所においても、深い掘り込みが残っていることが判明し、横堀がほぼ全周していた可能性が高くなった。遺物は平安時代や鎌倉時代、南北朝時代頃のものも出土しており、加越国境の要衝として古くから利用されていたことについての物的証拠が得られたのは初めてのことである。

小原越の調査では、松根城跡の調査で尾根筋に旧小原越と考えられる道跡が見つかったことを受け、現況遺構を測量すると共に、道が推定される尾根筋についても測量を行い、発掘調査は尾根筋を中心に実施した。結果として、ほとんどの尾根筋で道跡を発見し、中世段階の小原越は基本的には尾根道であるとの推測が可能になった。そして、近世期には現況遺構に見える幅が狭い道跡、荷車が通るためと考えられる幅が広い道跡は近代以降といった遺構変遷が想定可能となった。

文献史料の収集では、俱利伽羅や小原越に佐々軍が侵攻している様子を伝える1次資料が見ついている(本章第1節文書選6・7)。松根城や切山城は前田・佐々による合戦では1次資料に表れないが、先の史料によって小原口への侵攻＝松根城・切山城への侵攻が推定可能となった。

以上のような調査成果のみならず、第7章第1節の木越隆三委員による文献史学からのアプローチによって、天正12・13年の加越国境城郭群に関する政治情勢が詳しく述べられると共に、史料を駆使することによって、その際の切山城、松根城、小原越の状況が推察されている。また、既往の研究が整理されると共に、史料の信頼度や取り扱い方を詳述しており、今後の文献調査を行う際の指標となる。さらに、「加越国境城郭群」というよりも、文献史料が豊富な未森城や能登荒山城を含めた「加越国境城郭群」として捉えることによって、天正12・13年の戦乱の動向や城跡、古道の実態に近づける可能性があることが提示された。

第7章第2節の千田嘉博委員による城郭考古学からのアプローチでは、切山城・松根城の年代が城郭構造と出土遺物、文献などから天正12・13年にほぼ限られることから、これまで織豊系城郭の馬出は東国の北条や武田の技術系譜上に成立したとされることが多かったが、織豊系城郭の中で外柵形の知識を基礎にしなが馬出が成立する過程がわかる希有な城郭と位置づけられた。その上で、織豊系城郭による近世城郭の成立過程を実証的に知る上での貴重な情報源であり、城郭プランの変遷を把握する標識遺跡になると評価された。

なお、今回の調査では、松根城跡の測量調査に航空レーザ測量を採用した。この測量によって、新たな遺構を確認すると共に、広い範囲で周辺地形を把握することができるなど多くの利点があることがわかった。今後も多くの城郭遺構で実施されることを期待したい。

今回の調査によって、城郭の年代や構造の特徴、小原越の変遷などが明らかとなってきた。城郭については、戦国末期に限られた時期の構造を示している可能性が高く、城門や櫓・塀など、その構造の変遷を考え得る良好な資料といえよう。繰り返しになるが、城郭が主要街道を封鎖していることを推定可能とし、具体的な遺構として城郭と道の関係に新たな知見を示すことができたことが大きな成果であり、加越国境城郭群の実態をよく示す調査成果が得られたと考えられる。

※引用・参考文献は20頁参照



A 検出状況



C 礎石・石敷き検出状況



C 門と土壘盛土



D 焼土半截状況



D 盛土確認状況



D 調査状況



E 調査状況



F 調査状況



G 調査状況



H 調査状況



I南側 調査状況



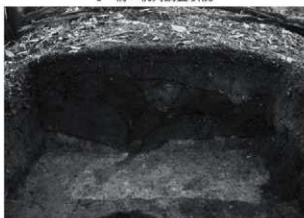
I北側 調査状況



J 柵・杭列調査状況



J 柱穴半載状況



J 土壘盛土



J 土壘半載状況



K 調査状況



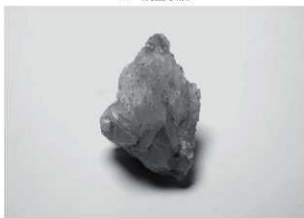
L 検出状況



M 調査状況



1



2



3



4



5



A 調査状況



C 調査状況



D 調査状況



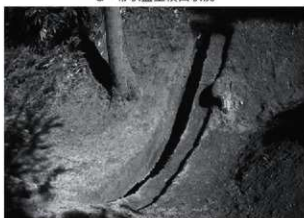
E 調査状況



G 带状盛土検出状況



G 調査状況



H 調査状況



O 調査状況



J 調査状況



K 北側の堀検出状況



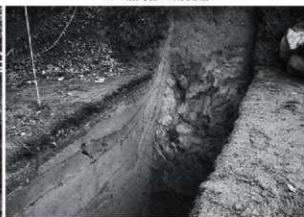
K 堀内部の土壘と堀 (北より)



K 堀内部の南側堀



L 調査状況



M 調査状況



N 道跡検出状況



N 道跡検出状況 (拡大)



5



7・10・9



8・13



15



17・21



18



3・4



19・20



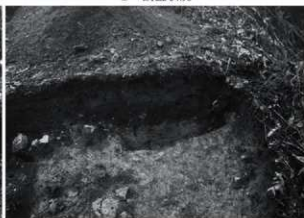
A 調査状況



D 調査状況



B 調査状況



B 調査状況 (部分拡大)



C 付近現況



C 調査状況



F 付近現況



F 調査状況



F-G間現況



G 調査状況



H 調査状況



H 調査状況 (部分拡大)



ドンバ峰・H付近現況



I 調査状況



J 調査状況



K 調査状況

ふりがな	かえつこつきょうじょうかくぐんとこうど ちょうさほうこくしょ							
書名	加越国境城郭群と古道 調査報告書							
副書名	切山城跡・松根城跡・小原越							
シリーズ名	金沢市文化財紀要							
シリーズ番号	295							
編著者名	向井裕知							
編集機関	金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)							
所在地	〒920-0374 金沢市上安原南60番 Ⅱ(076)269-2451							
発行年月日	平成26(2014)年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° 〃	東経 ° 〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きりやまじょう跡と 切山城跡	いしかわけん 石川県	172014	1390	36°	136°	111108	170m ²	学術調査
	かぬざわし 金沢市			36′	44′	∩		
	きりやままち、みやのまち					111216		
	桐山町、宮野町			02″	42″			
まつねじょう跡と 松根城跡	いしかわけん 石川県	172014	1395	36°	136°	121003	135m ²	学術調査
	かぬざわし 金沢市			36′	47′	∩		
	まつねまち、たけまたまち					121206		
	松根町、竹又町			57″	00″			
おほらごえ 小原越	いしかわけん 石川県	172014	-	36°	136°	130709	41m ²	学術調査
	かぬざわし 金沢市			36′	46′	∩		
						130802		
				19″	06″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
切山城跡	城館跡	安土桃山時代	平坦地 堀 礎石建物 焼土坑	土師器 石製品 鉄砲玉	
要約	馬出から主郭に至る虎口で礎石建物の門が発見された。門内部には石敷きも検出され、織豊系城郭で独自に発展したと考えられる過渡期の馬出と付随する具体的な門構造の一端が明らかとなった。また、従来小原越の痕跡とされていた南接する掘り割り遺構が本来は横堀であったことが判明した。櫓台の表土直下からは鉄砲玉が出土しており、16世紀後半～17世紀前半頃にかけて国内で流通しているタイソントー鉱山産の鉛を用いている可能性が高くなった。				
松根城跡	城館跡	平安時代 鎌倉・南北朝時代 安土桃山時代	平坦地 堀 礎石建物 道	灰釉陶器 土師器 国産陶器 金属製品	
要約	切山城同様に馬出から曲輪へ至る虎口で礎石建物の門が発見された。周辺からは16世紀末頃の土師器皿や越前焼と共に鉄釘も見つかっており、具体的な年代や作事に関する遺物が明らかとなった。また、同所の盛土下位からは鎌倉～南北朝時代の土師器皿や平安時代後期の灰釉陶器が出土しており、国境の要所として幾度も使用されている実態が明らかとなった。加賀側から大堀切に向かう尾根筋で旧小原越と考えられる古道跡が発見され、城郭によって道が遮断されており、戦時封鎖している可能性が考えられるようになった。				
小原越	道跡		道 堀		
要約	発掘調査によって、道が想定されていなかった尾根筋で古道跡を発見した。また、若干の凹みが尾根筋に散見され、測量を実施した。また、従来から小原越とされていた道筋に隣接して、人一人が通れる規模の掘り割り道が随所に残っており、これも測量を実施した。発掘調査と測量調査によって、小原越の大まかな変遷が想定可能となった。				

加越国境城郭群と古道 調査報告書

『金沢市文化財紀要』295)

平成26年3月27日発行

(2014)

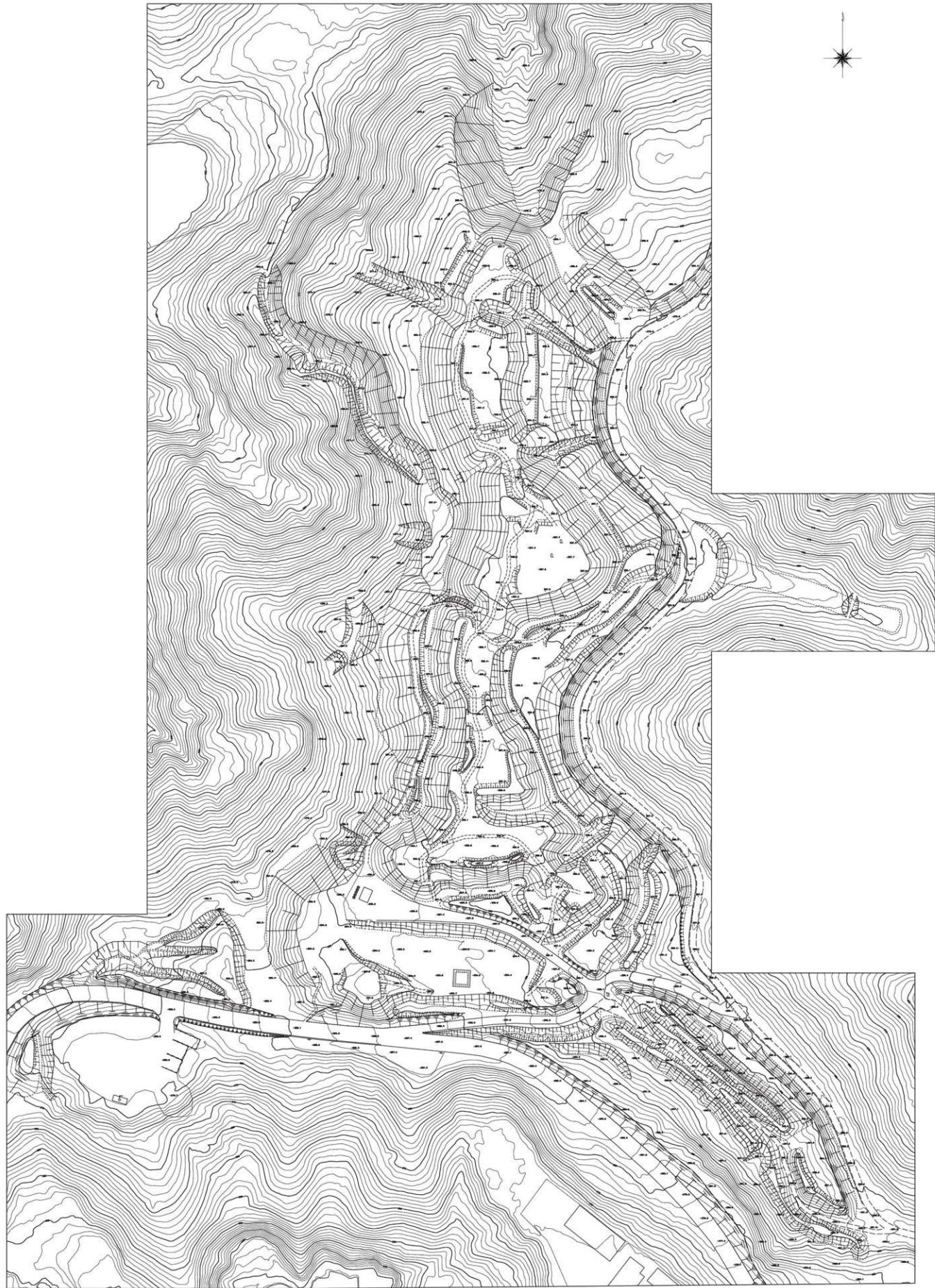
編集 金 沢 市
発行 金沢市埋蔵文化財センター

〒920-0374

石川県金沢市上安原南60番

TEL (076)269-2451

印刷 株式会社橋本確文堂



S=1:1,000

平成24年度	
業務名	松任線跡線空レーゾ調査
業務場所	金沢市松任町・竹又町境内 粟田島小笠原野呂田町境内
図面名	概 観
縮尺	S=1:1,000
図面番号	
金 沢 市	
平成25年1月 アジア建設株式会社製	